RIHN LINKAGE Artbook 02

ぬ‘てぃぬかーら どぅなん

いのち湧く島・与那国

和歌嵐香 N子

海よりも広い心で・著者からのメッセージ

この本は、**どうなんむぬい**（与那国語）という、いまでは話せる人も少なくなった島言葉が忘れ去られないようにしたいと願ってまとめました。ここには、わたしがお年寄りから教えられた島での暮らしの知恵と、この星の大気圏をめぐる水脈の中に生かされた「いのち」の一員として、お仲間さんたち（生物多様性）や自分とは違う暮らしをする人たち（文化の多様性）と平和に共存できる方法を、記憶を手がかりに絵と文で表現しました。

わたしたちの島には、**ぬ'てぃむ'てぃむぬ**（いのちあるもの）たちや、**にらがなち**（地底の神）などの目には見えない存在と会話して、食べることを通してすべての「いのち」がつながっていることに感謝する暮らしがありました。干ばつや長雨、高波や津波など、いのちの水をめぐる危機に、島ではどのように対応してきたのでしょうか。**～がなち**と呼ばれる、聖なる存在の大地と海と天の巡りの中で、人間が生み出した汚れやけがれは、大気と水の大循環の中で浄化されるというのが与那国島の伝統的な宇宙観です。びっくりしたことに、その内容は、太陽の熱を地球に取り入れ、それを宇宙に返しながら安定した状態を保つために大気中の水の循環が大きな役割をはたしているという最新の研究結果と一致するのだそうです。

今、地球環境が危ないと言われ、食糧が足りなくて飢えるという恐れも聞こえてきます。島に暮らすわたしたちは、はたして生きのびられるのでしょうか。そんなことを考えながら作ったわたしの拙い詩をご紹介します。

戦だけはいらん / あの日なべの中には魚が煮てあった / タマ降る中みんな走った / ばあちゃんはなべとらんぷもって / ぢいじゃんはばあちゃんのまくらもって / とうちゃんは馬の手綱もって / かあちゃんは泣き叫ぶ赤ちゃんおんぶして / ねこも走った / にわとりも走った / 昭和の南の島にタマが降り / みんな / 走って / 走って / 走ったの / 戦だけはいらんと / 語りつづけた / 明治の人々 / みんな / 旅だっていった / 現 / 南の空は / タマ降る空をやるの？ / とかあちゃんはたづねる / あたし大正の人よ　N子さん / とかあちゃんはいう / それでも / わたしは / この国が好きだ / 海は広い / と人はいう / 人の心の広きが / 欲しいよ / 戦を知らない昭和生れ / タマはイヤだ戦はいらん / を道連れに / 今日もわたしは旅をする。

2023年3月　　和歌嵐香　N子

RIHN LINKAGE Artbook 02

ぬ‘てぃぬかーら どぅなん

いのち湧く島・与那国

Nu‘tinu Kaara Dunan

The Source of Lives: Yonaguni Island in the Ryukyu Arc

和歌嵐香 N子
Author: WAKARANKO Nko

編者　安渓遊地・安渓貴子・渡久地健
Editors: ANKEI Yuji, ANKEI Takako, & TOKUJI Ken

LINKAGE Project, The Research Institute for Humanity and Nature (Japan)
総合地球環境学研究所 LINKAGE プロジェクト

Introduction

Yonaguni Island is located at the western end of Japan, 111 kms from Taiwan. This book is a compilation of the experiences and memories of Ms. N. Wakaranko, who was born on this island in 1954. Many elders trained her to be a ***Mutu'kahamai***, a traditional advisor who taught the islanders to live peacefully with plants and animals through daily and seasonal prayers to the spirits. She grew up during a time of political upheaval, as ownership of the Okinawa Prefecture was transferred from the U.S. to Japan. As a result, the island's lore and traditional wisdom has remained in her, even though its recipients have been lost. The islanders' experiences of surviving through various natural cataclysms has shaped a cosmology that includes the circulation of the atmosphere and water on earth. In this book, Ms. Wakaranko expresses her memories through a creative and unique form of art.

This book was published by the Research Institute of Humanity and Nature (RIHN). The RIHN aims to solve global environmental problems from the perspectives of human cultures and behaviors. Our LINKAGE project collaborates with the local people to showcase the sustainable use of natural resources supported by the water cycles of coral islands. We hope that this book will help readers and visitors to coral islands realize the importance of the islands' traditional ecological knowledge as a method to facilitate sustainable life change.

本書の内容

本書は、1954 年に日本の西端の、台湾まで 111km に位置する与那国島で生まれた和歌嵐香 N 子さんの体験と記憶の一部をまとめたものです。戦争と戦後の混乱の中で、老人たちは、島の伝統が失われることを心配していました。そして、日々の祈りを通して、すべての生物と共存し、いのちの流れの中に身をおいて生き延びるために、食料獲得を中心に季節の変化などを感知して適切に助言する**むとぅ'かはまい**という役割の復活をめざしました。その候補者として選ばれた N 子さんは幼い日から鍛えられました。沖縄の施政権がアメリカから日本へと変わる社会の激動期に、受け皿を失った島の伝承や伝統的な知恵の多くが N 子さんによってかろうじて残されたのです。さまざまな天変地異を乗り越えてきた島民の経験は、地球上の大気や水の大循環を含む壮大な世界観を形成してきました。この本は、N 子さんの膨大な記憶と経験を独創的でユニークなアートとして表現したものです。

本書は、地球環境問題を人間の文化や行動の側面から解決することを目指す総合地球環境学研究所（ちきゅうけん）の出版です。LINKAGE プロジェクトでは、サンゴ礁の島々で水循環やそれに支えられた自然資源の持続的な利用の可能性を、地元の方々との緊密な連携の中で明らかにすることを目指しています。この本が、島々の伝統的な生態学的知識（TEK）の重要性に気づく一助となり、島を訪れる人たちにとっても、現在の生き方を見直す手がかりのひとつとなることを願っています。

身にあまる贈り物への感謝の祈り ―――――――― *Author's prayor for thanksgiving*

なつかしい故郷の与那国島の暮らしや伝承のすべてが忘れられて、どこかに消え去ってしまいそうな今、幼い日からわたしが島のお年寄りから教えられ、記憶し、実践してきたことの一部が、こうして画文集にまとめられたことを、うれしくありがたく思っています。３０年あまり前から、わたしの記憶のかけらをどんなものでも大事にして、預かってくださる安渓貴子・遊地さんが、絵に詳しいお友達の渡久地健さんといっしょに絵を選んでまとめてくださいました。与那国島の記憶や経験は、記録の価値があり、台湾やもっと南の島々の記憶ともつながるものがあるはずだ、ということで、総合地球環境学研究所（ちきゅうけん）のプロジェクトの応援もいただくことができました。

このように一人ではとても使い切れないような、身にあまる贈り物をいただいたとき、与那国島のお年寄りは、必ず次のような祈りをささげて感謝してきました。ここにそれを再現して、はじめのごあいさつとさせていただきます。

和歌嵐香Ｎ子

うぉーす‘とぅい　つぁりたる　むぬや
たばらりたる　うぬ　うさんぎ　に
ちむがら　みぃがら　んにがら
ばたぬすぐがら
ふくふく　ふくらし　しゃなるにや
とぅながら　しゃなるにや
とぅとぅながら

うぉーす‘とぅい　申し上げますことは
いただきました　この　贈り物に
心から　体（目も同じ）から　胸から
お腹の底から
ふくふく　ふくらし　うれしいばかりで
遠い海ほど　うれしいばかりで
遠い海のまた遠い海のほど

あー　うぉーす‘とぅい
どぅ　とぅいしや　あまい
ばんぎ‘てぃらし
くぶり　くぶり　ひぃんだぎ　どぅ
あるんにや
うぬばすや　どぅでぃん
とぅないん　とぅん

あー　うぉーす‘とぅい
私　一人では　余ってしまい
湧いて吹きこぼれ
こぼれて　こぼれて　いってしまいそうですから
そのときは　どうか
隣近所の方々　にも

みながに　あまらし
またん　にらがなちにぃん
あまるた　うやし
ぶぅるし うぬ　まいさる　うさんき　ば
たばらりたる　しむ‘てぃ
‘とぅい‘とぅん どぅぐまい　みぬんき
まぁるんに　ふぅ　しむ‘てぃば
つぁりたる　むぬや
‘てぃ　とぅらしわいひりぃ
たんでぃ　たんでぃ　たんでぃ
（繰り返し）

庭に　あふれるほど
また　にらがなち（地の底のかみさま）
にも　余るほど　さしあげ
みんなで　この　大きな　頂き物を
たまわる　つもり
一人だって　欲ばらず
おいしく　いただくつもり
申し上げることは
お聞きとりください
お願い　お願い　お願い　いたします。
（繰り返し）

またん　どぅぐば　つぁりぶさるむぬ
‘とぅち　あい
うぬ どぅぐん‘てぃとぅらし わいひり
うぉーす‘とぅい　うぬ　うさんき や
またん　たばらりひりぃー
うぉーす‘とぅい　どぅぐん
‘てぃとぅらしわいひぃー
ふがらたぬぅぉ　ふがらたぬぅぉ
ふがらたぬぅぉ（繰り返し）

さらに　欲を　申し上げたいことが
ひとつ　あります
この欲も　お聞き　くださいませ
うぉーす‘とぅい　この　贈り物は
また　おたまわりくださいませ
うぉーす‘とぅい　欲まで
お聞きくださいまして
ありがたいこと　ありがたいこと
ありがたいことです（繰り返し）

編者のことば ―――――――――― *Editors' note*

この画文集は、日本の最西端、台湾が見える与那国島の伝承を、生きたものとして今日まで伝えてきた和歌嵐香N子（わからんこ・えぬこ）さんが、日々の生活と祈りの中で制作してきた詩文や絵の中から、島の宇宙観と生命観につながる部分を中心に抜粋したものです。

安渓遊地と貴子が、はじめてN子さんにお会いしてから30年あまりの間に、N子さんから届けられた資料は、与那国語の語彙カード約4000枚を筆頭に、厚さ1メートルを超える伝承ノート、700枚の絵、祈りや歌の録音と動画など、膨大なものです。その一部は、インターネットでも公開しています。「与那国島の生物文化データベース」で検索するかこのページのQRコードからご覧ください。

明治時代から、与那国島には研究者が調査に訪れて、さまざまな報告を出版してきています。島の人たち自身も、歴史や与那国語について研究・発表し、与那国町史には、くわしい地名なども載せられています。ところが、まだ字も読めない幼いころからお年寄りに叩き込まれたというN子さんの伝承や記憶は、これまでの研究では気づかれなかったものがいろいろ含まれているようです。

本に書かれた公式のものとはちがう伝承も含めて、いまではすっかり忘れ去られようとしている、与那国島での日々の祈りを、移住した北の大地でN子さんは今も続けています。

この画文集は、5つの章からなっています。第1章は、とても病弱で草の葉の上の露のように消え去りそうだった幼い日々のN子さんが「**ちゆ**（露）」と呼ばれ、やがて稲の種もみや苗の世話をまかされて「**ない**（苗）」と呼ばれるようになるころの様子です。第2章は、ライフワークでもある「人は植物にいかに支えられてきたか」につながる「植物班」との関わりです。なんだか仔猫のようだというので、「**まゆ‘てぃ**」と学校では呼ばれていました。第3章は、心をこめて世話していた「動物班」の生き物たちとの暮らし。このころ父母からは「喋るな」という意味の「**むぬんな**」と呼ばれました。第4章は、祖父の妹と祖母の名前からの「**たまんく・なさ**」という名前をもらったころからの、おもに祖母から習ったというN子さんの祈りと歌の日々です。その祈りは、すべての「**ぬ‘てぃむ‘てぃむぬ**」（いのちあるもの）の共存こそが、持続性のある島の暮らしを支えてきた伝統的な環境知識の核心だったことを示しています。最後の第5章は、この本を作成した地球研LINKAGEプロジェクトの中心的な研究テーマの、サンゴの島の水循環とさまざまな自然資源の利用に直接関わるものです。地球上の水の大循環とも呼応して、人間の作り出す汚れやけがれが浄化されるという、壮大な与那国島の宇宙観が描かれます。「N子」は、編者がこれまでの報告で彼女の匿名として使ってきたものですが、本人も慣れておられるので、著者名としました。

与那国語の表記では、が行の鼻濁音を半濁音の記号がついた「ぱ、ぴ、ぷ」で表しています。また、韓国語の濃音や日本語の促音に似た、か行とた行の発音については、前に「‘」の印をつけることで区別しています。

今回の絵の多くは、自身も植物画をよくされる、渡久地健さん（地球研LINKAGEプロジェクトメンバー）に選んでいただいたものです。この画集から、島の伝承の民俗知識を読み取るだけでなく、絵そのものとしても鑑賞できるように、メモを作成していただきました。絵には、オリジナルのサイズや画材、わかる範囲での制作年月を示しています。

この画文集ができるまでに、地球研LINKAGEプロジェクトのリーダーである新城竜一教授、生存基盤ユニットリーダーの高橋そよさん（琉球大学人文社会学部准教授）、プロジェクト事務担当の片岡貴恵さんのお世話になりました。また、版下作成は、オフィス・カモテトップスの福田美智子さんによるものです。

DB与那国

与那国島の生物文化データベース

目次 Contents

著者からのメッセージ …… 表紙裏
序文 Introduction …… 2
ありあまる贈り物への祈り
Author's prayer of thanksgiving …… 3
編者のことば Editors' note …… 5
与那国島地図 A map of Yonaguni Island …… 7

第１章　幼い日々

Chap.1 My early life: Training to be a *Mutuk'ahamai*

1.1　生まれる I am born …… 10
1.2　お守り Amulets …… 12
1.3　月光浴 Moonlight bathing …… 14
1.4　肥溜めから這い上る Crawling out of a latrine …… 16
1.5　便所立てこもり Locking myself up in a toilet …… 18
1.6　屋根の上で叫ぶ Yelling on a rooftop …… 20
1.7　怒り Anger …… 22
1.8　満月に祈る Prayer to the moon …… 24
1.9　涙の口噛み酒 Chewing rice in tears …… 26

第２章　植物に支えられて

Chap.2　Supported by Plants

2.1　樹からの水 Water from a tree …… 30
2.2　竹筒の水貯め Bamboo water reserve …… 32
2.3　海藻を干す Drying seaweeds …… 34
2.4　眠る稲 Sleeping paddy deities …… 36
2.5　苗に歌う Singing to rice seedlings …… 38
2.6　赤ん坊を木に預ける Babysitting by trees …… 40
2.7　疲れを木に預ける Healed on a tree …… 42
2.8　ガジュマルの木 A strangler tree …… 44
2.9　木の精霊に出会う Fairy in the woods …… 46

第３章　動物とのかかわり

Chap.3　Together with Animals

3.1　卵を抱く鶏 A hen sitting on eggs …… 50
3.2　水牛に乗る On the back of a carabao …… 52
3.3　魔除けの十字 A cross against evil …… 54
3.4　魚と話す Talking with fish …… 56
3.5　海亀の子の見送り Seeing off baby turtles …… 58
3.6　鳥が巣立つ A bird leaving its nest …… 60
3.7　トンボ Dragonflies …… 62
3.8　猫がいない My stray cat …… 64
3.9　仲間たち My companions …… 66

第４章　祖父母の教え

Chap.4　Elders' Teachings

4.1　祈りの浜 A sacred beach …… 70
4.2　日の出に祈る Praying for the rising sun …… 72
4.3　月に呼びかける Talking to the moon …… 74
4.4　海辺の鎮魂 A requiem on the seashore …… 76
4.5　それでも生きたい Still wishing to live …… 78
4.6　春への感謝 Spring thanksgiving …… 80
4.7　井戸と天女
A heavenly maiden indicating a source …… 82
4.8　はらむ Becoming pregnant …… 84
4.9　**ぬ'てぃぬかーら** A source of lives …… 86

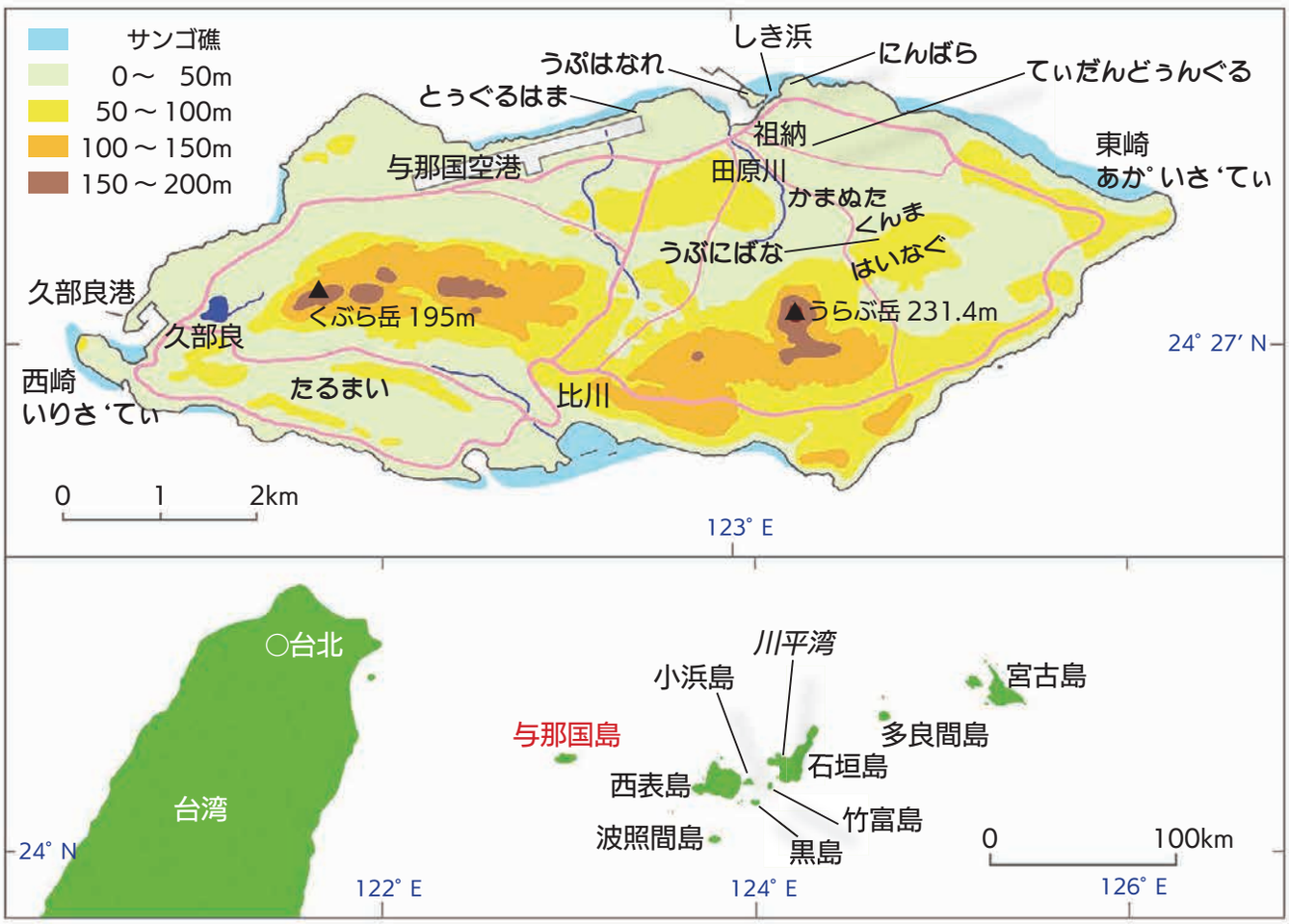
第５章　めぐる水への祈り

Chap.5　Prayers for Water Cycles

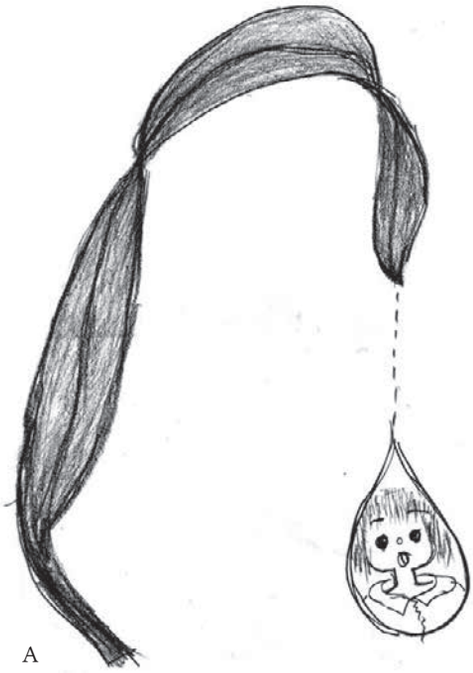
5.1　魔除けの石 A stone to ward off evil …… 90
5.2　**にらがなち**とその成長
Growth of ground deities …… 92
5.3　海の底の **にらがなち**
Ground deities under the ocean …… 94
5.4　神々の出会い Encounter of the deities …… 96
5.5　魔物たちの出会い Encounter of evil spirits …… 98
5.6　慈雨 A welcome shower …… 100
5.7　台風の予感 Predicting a typhoon …… 102
5.8　水脈 Water cycles …… 104
5.9　枯れるな水脈 Water cycles for ever …… 106

鑑賞の手引 A Guide to the Art …… 108
時空を超えた座談会 An Imaginary Roundtable …… 115
プロフィール Profiles …… 116
奥付 Credits …… 118
A message from the author …… 119

与那国島地図 *A map of Yonaguni Island*



作成：渡久地健



A

第１章　幼い日々

B

C

A 病弱で**ちゆ**（露）と呼ばれたころ　I was so weak and called ***chiyu***, a dewdrop ready to disappear.

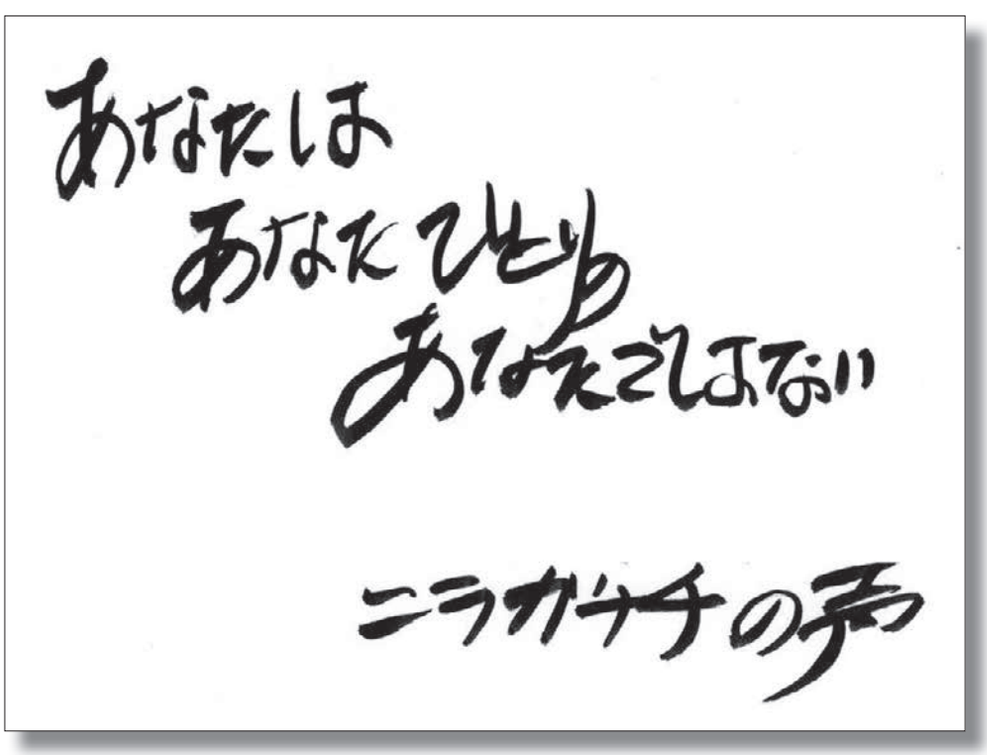
B **はちんかい**（初迎え）のお出かけ、２歳。　Two years old. Dressed up for the first going out.

C 13 歳から**むぬんな**（しゃべるな）と呼ばれた。Shut up! (***Mununna***) was my name after the age of thirteen.

歩きはじめたばかりのわたしは、庭の枯れ葉とお話しながら楽しく遊んでいました。その様子からわたしは、将来の**むとぅ‘かはまい**として育てられることになったのでした。**むとぅ‘かはまい**は、島の「食べごと」に関わる総責任者。季節のめぐりを感じとり、糧となるひとつひとつのいのちに祈りを届けます。その候補者の条件は、匂いに敏感、風を読む力がある、空をみて天気を知る、長時間一人きりでも少しも暗くならずに過ごせる、人以外のものとやりとりできる、多くをほしがらないこと、などでした。

Chapter 1. My Early Life: Training to be a ***Mutu‘kahamai***

As a baby, I had just begun walking when the island elders found me cheerfully talking to dead leaves. They decided to train me as a future ***Mutu‘kahamai***, a shaman who advised the people about food acquisition, indicating seasons to the islanders, and praying to each creature that is consumed by humans. A child who would be a future ***Mutu‘kahamai*** was supposed to have the following characteristics: a keen sense of smell, knowledge of the directions of winds, and ability to predict weather. They were also supposed to enjoy staying alone and talking to non-humans, and they were to be satisfied even in shortage.



"You are not you for yourself alone," said the voices of ***Niraganachi***, the ground deities.

1.1　生まれる ―――――――――――――――――――――――――――― I am born

わたしを妊娠中に、母の健康は妊娠に耐えられませんでした。そんな時は、大昔の住居だった洞窟（**あぶ**）でお産をするという島の伝統的な方法もとれないほど母は弱っていて、家でお産をしました。生まれ落ちたとき息ができなかったのか、わたしは全身赤紫というか黒い塊だったそうで、みんなの懸命の努力で、母の胸にようやく抱かれたのは、生まれて 20 日もたった後でした。

難産や、旧暦の１月から３月に生まれる場合は、洞窟でのお産が選ばれたそうです。

その様子を、お年寄り方が話すのを聞いて再現したのが下の図です。

洞窟（あぶ）でのお産　Traditional childbirth in a cave, ***abu***

与那国語では、胎盤のことを**あんぐ゜ぬむぬ**（ぐ゜は鼻音）といいます。**あんぐ゜**とは相手をすることですから、**あんぐ゜ぬむぬ**というと、赤ん坊のお相手さんというような意味です。赤ん坊がひとりでにこにこと笑っているのを見ると、与那国の人は、下の例文のように言います。あらゆるものを、いのちのあるものとして、まるで生きてる人みたいに、神のやどるものとして大切に向かい合ってきた、与那国島の人たちの思いがこもった言葉です。

あんぐ゜ぬむぬどぅ	**うむいだし**	**ばらい**	**ぶるってぃらおお**
お相手さん（胎盤）を	思い出して	笑って	いるんだろうね

原題：ワタシが産まれた　　2020 年 10 月、25x17cm、画用紙、アクリル水彩

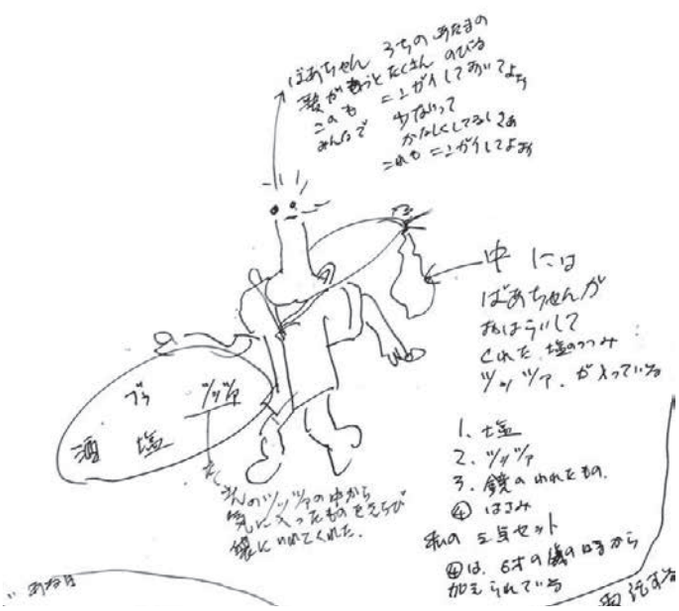
I am born: I was born in March 1954. Mother suffered from bearing me in her womb. She was too weak to follow our tradition of staying in a cave (***abu***) during the difficult childbirth. At birth, I was dark purple from not breathing. Mother could not embrace me until 20 days after giving birth.

1.2　お守りをつけてお祈りとお清め ―――――――――― Amulets

ばあちゃんに魔除けのお守りをつけてお祈りとお清めをしてもらいました。いつもいっしょにいた**み‘た**（鶏）と、**まゆ**（猫）もいっしょにお祈りをしてもらいました。袋の中には、ばあちゃんがお祓いをしてくれた塩の包みと、**つ‘つぁ**が入っています。**づつぁ**は魔除けの意味ですが、**までぃむぬ**（魔物）をよけるために**ばらんぷ**（藁の芯）やススキなどの植物で作ったものです。お盆の上には、お酒、塩、**ぶー**（苧麻の糸）、**づつぁ**が載っています。ばあちゃんはたくさんの**づつぁ**の中からわたしが気に入ったものを選び、袋にいれてくれました。

つ‘つぁは、日常的にもよく使います。例えば、なにか食べ物を届けるために道を歩く時。必ず容れ物の上に**つ‘つぁ**を載せるのが、与那国島の習慣です。

六歳の儀の時からは、はさみがつけ加えられました。生まれた時から身を守るものとして身につけて育てられました。わたしぐらいの年頃の島の人は、赤ちゃんの時と同じように、外出するときはお守りとして身に付けています。



魔除けをつけて歩く　Walking with amulets, ***tsu‘tsa***

生れたばかりの子どもは、**んく‘てぃ**と言います。あやす時などは「**んーん‘くぉお**」と呼びかけます。子どもは数え年の六歳になると人間界に入るとされ、それまでは、神様に近い状態にあるのです。

つ‘つぁ　びき‘てぃ　とぅんでぃりよ
魔除け　つけて　外出しなさいよ

原題：ばあちゃんがおはらいしてくれた塩のつつみ ツツツァ　　2013年頃、26x37cm、画用紙、アクリル水彩

Amulets: To protect me from evil spirts, Grandma gave me salt, a grass charm (***tsu'tsa***), and a fragment of a mirror as amulets. When I survived to be six, I was accepted as a human, and a pair of scissors were added to my amulets. I still have them with me, as do most of the Yonaguni islanders of my age.

1．3　月光浴 ―――――――――――――――――――― Moonlight bathing

「**まぁびん　まぁびん**（もっともっと）」と、わたしがどんなに泣いてもおかまいなしのじいちゃん。旧暦の 13 日から 16 日まで、毎月十五夜を含む 4 日間の間、夜の海辺に連れて行かれ、素っ裸にされて潮水に浸かっていました。健康になるために、**うとぅんとぅがなち**（月光様）のお力をいただく、**うとぅんとぅあんしみ**（月光浴）です。わたしは、海に浸かって夏でも寒いので「ワァァワァワン！ワァァ〜ァ」と泣き叫びます。ただひたすら口を大きくあけて、ぶったおれるまで叫ぶのです。のどの奥まで月の光が入りこむことが大事だというので、じいちゃんは、小さいわたしが海に流されていかないように手をつかまえ、おなかの中に月の光がたっぷり届くまで、続けさせるのでした。体がとても弱かったわたしは、いつ消えてもおかしくない草の露のようだというので、**ちゆ**（露）というあだなで呼ばれていました。じいちゃんは、そんなわたしを守るために、どこに行くにも、いつもわたしを懐に抱いてくれていました。わたしが 4 歳の時、じいちゃんは病気で亡くなりました。満月の海で月の光に力をいただくことは、じいちゃんがたたきこんでくれたことです。海に行けないときは、家や畑小屋で浴びられるように縁台のようなものを作ってくれてありました。例文は、稲の成長を願う**うーす‘とぅい**（祈り）の言葉です。

縁台での月光浴　Moonlight bathing at home

んにまい　でぃぎらし　たーはたぎ　きんだいまんぎらし　にらがなちん
稲米を　できさせ　田畑を　元気一杯にし　にら（地底）の神様も
ふてぃんがなちん　てぃんがなちん　うとぅんとぅがなちん　ぶーる
稲光様も　天の神様も　月光様も　みんな
かんぬ　まーぎり　んでぃたてぃ　わいとぅらしひり〜
神々の　限り　出で立ち　おいでください

原題：「マァビンマァビン」　　2013 年 8 月、29x20cm、画用紙、色鉛筆

Moonlight bathing: Moonlight bathing was thought to be the best way to keep me strong. Grandpa brought me to a beach on full-moon nights. Standing naked in the sea, I cried from the cold. "Not yet, not yet (***maabin, maabin***). Cry aloud and absorb the moonlight deep in your throat," said Grandpa.

1.4　肥溜めから這い上る ―――――― Crawling out of a latrine

うどぅる（肥溜め）に落ちたわたしは「ふえーん、また落ちたよぉー。だれもおらんのおー、さむいよー、ふえーん」と叫んでいます。近所のお姉さん達とかくれんぼをしていた時、わたしは肥溜めにブクブクと沈みました。やっとの思いで這い上がって、どろどろの泣き顔で家に帰りました。誰も家にいなかったので、自分で水瓶の水を汲んでかぶりました。音を聞いたばあちゃんが出てきて、体が冷えて井戸端にしゃがみこんだわたしを、抱いてかまどの前に座らせて、火を焚いて温めてから怪我の手当てをしてくれました。

こんな時には、**たまち**（魂）がびっくりして欠け落ちてしまいます。そうなると、病院では治せない不調になりますから、魂のかけらを拾い集める**たまちすい**（魂ひろい）をしなければなりません。そのあと、体の中に入り込んだ魔物がいるでしょうから**すでぃ**（お清め）もしなければなりません。ばあちゃんは、**すでぃ**の仕上げに**ぶぶ**（瀉血）をして、それから一番座で**まいまい**（祈祷の舞い）をして、祈りをあげてくれました。さらに、驚きで飛び散ったを魂のかけらを丹念に拾い集めるために、近所のばあちゃんにも頼んで、3 人のばあちゃんたちが長い時間かけて**たまちぬちんあちみ**（魂の粒集め）をしてくれたのです。仕事を切り上げて家にもどった父母も加わって、最後にわたしを裸ん坊にして、全員でわたしの体じゅうに灰と塩をすり込んでくれました。そのあと、**さらぶ**という器に収めた**たまちぬちん**を全部わたしの体にもどしたのです。

ふるぬかんがなち（便所の神様）は、位の高い神様で、常に人の暮らしを見守ってくださっています。魂がどこで欠け落ちたかわからない時には、**ふるぬかんがなち**のお力を借りて、**ふるぬ**（便所）の前で祈りをあげます。以前は年に 2 回、海水で便所全体を清める習慣がありました。**ふる**（大小便）は**うどぅる**（肥溜め）に移し、そこで 100 日以上発酵させます。わたしが落ち込んだ**うどぅるぬかんがなち**（肥溜めの神様）は、日常生活の中で一番位が高い神様だと考えられています。

便所に入ったら、便を出す前に、**ふるぬかんがなち**に次のようにお祈りをします。

ないがら　つぅまい　　どぅんばいきぃ
今から　　うんこして　おしっこして
ちむすりるた　んとぅるんゆんがら　たんでぃ　うんがまりひりぃ
気のすむまで　座りますから　　どうぞ　　拝まれて下さい

原題：こえだめからはい上がる6才児　　2022年7月、27x19cm、画用紙、色鉛筆・ペン

Crawling out of a latrine: A toilet (***furu***) is the most sacred place for us. Its goddess is the most beautiful and powerful of all the deities. We stored human and animal excrement in a latrine for fertilizer. I often fell into one of these fermenting pits. It started when I was very young, and I continued to crawl out of a latrine until I was much older.

1.5　便所立てこもり ―――――― Locking myself up in a toilet

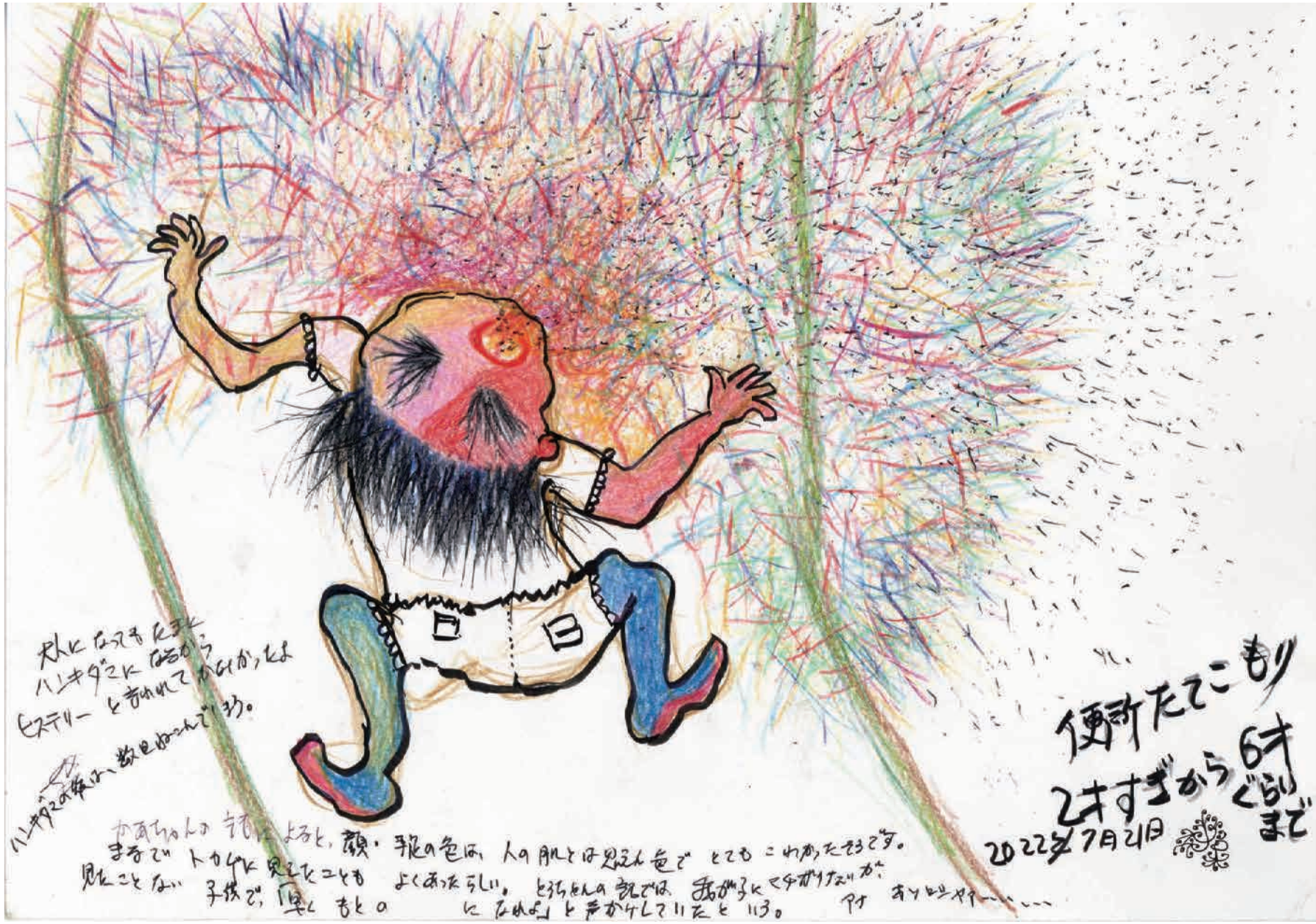
3歳から6歳くらいまで、わたしは便所にたてこもって叫び、わめくことがありました。そんな時わたしは**はんきあがみ**と呼ばれていました。「強烈な感情を爆発させる子」の意味です。大人なら**はんきだま**といいます。父と母は、**はんきあがみ**のわたしを、無事に便所からつれだすのには苦労しました。よその家の便所にも立てこもるので、実に迷惑な**はんきあがみ**でした。何を大声でわめいているのかは誰にもわかりません。むやみに**はんきってぃ**（感情爆発して）いたのではなく、何かを訴えるもので、父と母と祖母は、**ぬーあるばん　くとぅ　うぐりるんなぁ**（何か大きなことが起きるんだね）と話していました。

食事も会話もせず、草をむしって食べたりしました。草を食べても父と母は遠まきに見守り「やめなさい」とは言いませんでした。石ころを食べた時だけは、吐かせてくれました。草を食べるといきなり、**はんきあがみ**となって便所にたてこもります。むやみにつかまえようとすると、ものすごい力で大人をなぎたおすほどでした。ばあちゃんだけは、いつものように、「**えいえい　んさんんさん**（うんうん、いいよいいよ）」とだけ言い、父と母は、わたしが便所の中で、怪我をしたり気絶したりしないように、注意深く見守りました。

人間の体から出る便や大便やおならは、けっして汚いものではなく、それを循環に乗せていくことが大切で、便所は汚いところではありません。むしろもっとも神聖な場所と、与那国島の人々は考えてきました。ですから赤ん坊が、自分のおしっこの匂いをいやがらないように、濡れたおしめを身近においたり、体の弱ったお年寄が、赤ん坊のうんちを枕元に置いてもらい、その香りで力をもらう、という習慣はごく当たり前にありました。朝の新鮮な**んばい**（小便、古い言葉では**どぅんばい**）で体を清めたり、少量を飲む習慣もありました。

例文は、重病人や赤ん坊が大きなおならをすると、元気がいい、頼もしいと言って、喜び、微笑ましく励ます時の表現です。

ひよぉっ　ひんたん　どぅみんがし　ひち　　かばみるすや
いよっ　　おならも　おもっきり　　ひって　臭いまでさせるなんて
まぁ　い‘てぃにんまいてぃらあ
もう　一人前だね



原題：便所たてこもり　　2022年7月、19x27cm、画用紙、色鉛筆・ペン

Locking myself up in a toilet: At the age of three, I began locking myself up in toilets. I got furious, yelling something the others could not understand. "You looked like a lizard," said my family. Neighbors, angry at my occupation of their toilets, called me a hot-tempered child (***hankiagami***). The toilet deities may have made me do so.

1.6　屋根の上で叫ぶ ―――――――――――― Yelling on a rooftop

「あ〜あ〜あ〜、わあ〜わあ〜、わお〜わお〜！」よその家の茅葺き屋根によじ登って、**ちんぷる**（頂きの部分）にまたがって、大声で何事かを叫ぶわたしです。えんえんと叫ぶけれど、何を言っているやらわかりません。そんな時、わたしは、**ちんぷるちゆ**（屋根の上の**ちゆ**）と呼ばれました。その家の人になにか急な危ないことが起こる前知らせのことがあって、その知らせを、喜ぶ人もいれば、うるさいやつだと言う人もいました。当人のわたしは、どうでもおかまいなしに「大変！」と思うと、いてもたってもいられなくなり、木によじ登り、屋根に移って、**ちんぷる**にまたがって、拡声器のように叫びました。大人はわたしが叫び終わるまで待ってから、そっと抱いておろしてくれていました。

なにかの予兆が、夢のしらせにあらわれるということは、与那国島ではごく平凡にあります。わたしが大人になってからのことです。あるとき、夢でぱあっと光るものが人間の体をまっぷたつに切るのが見えました。驚いて飛び起きたわたしは、大騒ぎして母に相談したら、「大変、それは、いのちにかかわる大きな事故が、身内に起こるしるしかもしれない」といいます。「こういう時は、夢を見た人が、『大難を小難に変えさせて下さい』と祈ることが許されていて、その祈りが通じれば、不思議に軽くてすむといわれているのよ」と母。二人で真剣にお祈りをしました。そして、そのあとすぐに、島外で屋根の修理のアルバイトをしていた弟が、上の方から落ちてきたトタン板に直撃されるという事故が起こったのです。危うく胴に当たるところだったけれど、少しずれて足の怪我ですんだというしらせが届きました。また、山のような臓物に埋もれるという夢を見たときは、別の弟が虫垂炎からあやうく腹膜炎になりかけたのが助かったということもありました。

以下の二つの例文は、いつも助けていただいている神様たちに、災難が起こりそうなときに、心の底からお願いするときのお祈りの言葉です。

ぬーんにぬ　なんあるばん　はんしみ　とぅらしわり
どんな　災難であっても　はずして　くださいませ
ほーてぃんきぬ　なんあるばん　うゆびあたいんき　なし　とぅらしわり
とても大きな　災難でも　手の指ぐらいに　して　くださいませ

原題：よそのチンプルにまたがって延々と叫ぶ　　2022年2月、30x21cm、画用紙、色鉛筆・ペン

Yelling on a rooftop: I was sometimes found yelling on a rooftop (***chimpuru***). Some thought of me as raising the alarm of an approaching danger, and others took it as only a nuisance. I was called dewdrop on the rooftop (***chimpuru chiyu***). Father waited for my yelling to end; he then took me in his arms and carried me down from the roof.

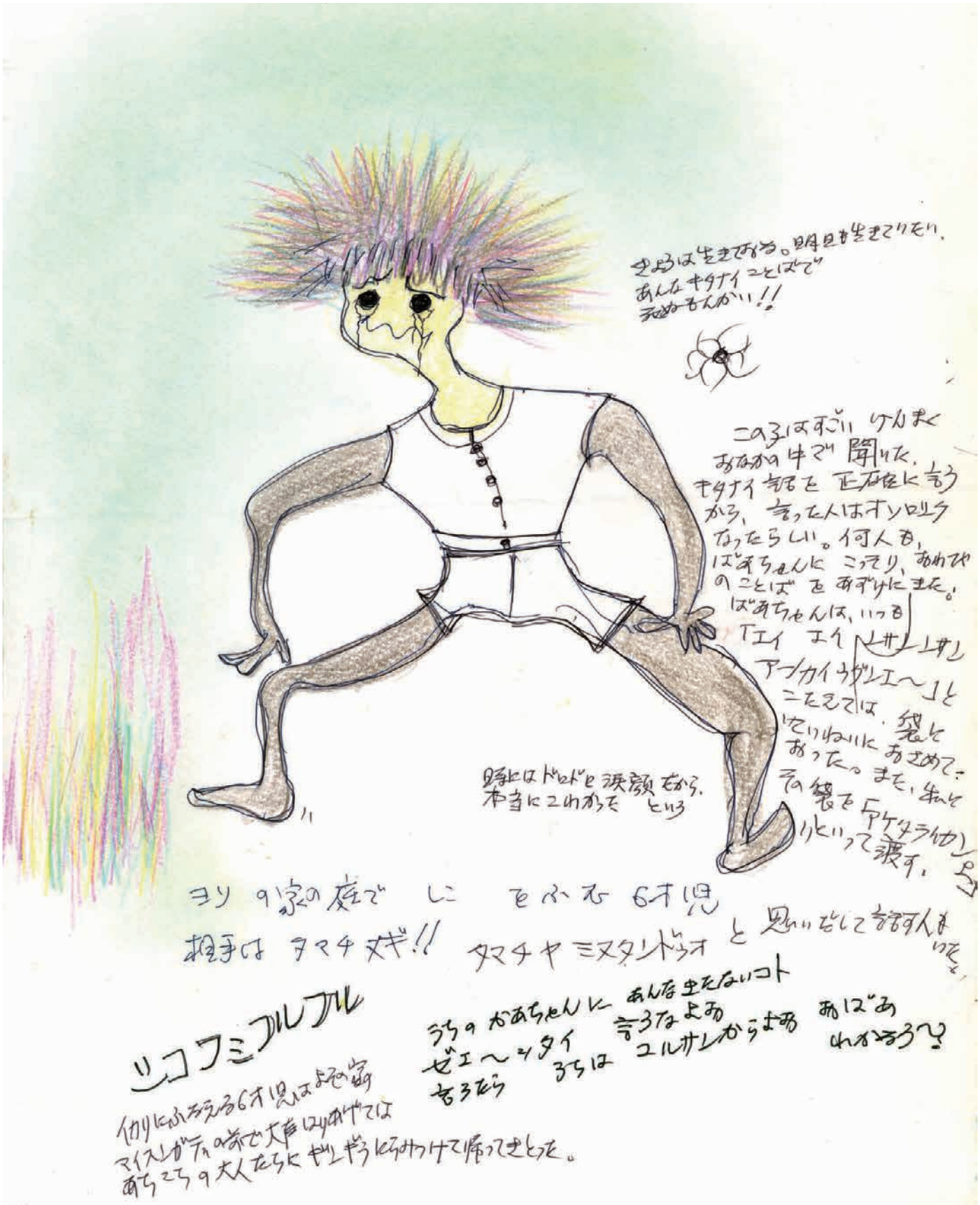
1.7　怒り　Anger

よその家の入り口に立って、怒りに体を震わせながら怒鳴るわたし。四股（しこ）を踏み、ふるふる怒りに震える六歳児は、よその家の**まいすんかぺ‘てぃ**（入り口の垣）の前で、大声を張りあげては、大人たちをギンギラにらみつけて帰りました。この子はすごいけんまくで、自分が胎児だったとき、お腹の中で聞いた声を聞き分けて、その時の言葉を正確に再現して言うのです。妊娠中の母の健康を気遣うあまり、腹の子を降ろしなさいと強く言ったのだとしても、言われた本人は、火を吹くほど怒っています。「今日は生きておる。明日も生きていたい。お腹の中で聞いたあんなキタナイことばで死ぬもんかい!!」とドロドロの涙顔で叫ぶのですから、本当にこわかったそうです。母のお腹の中で聞いたことを、なぜかわたしは正確に覚えていて、困ったことに、子どもだったわたしに、その記憶がぽろんぽろんと戻ってくるのでした。そのあと、何人もがばあちゃんのところにこっそりやってきて、お詫びのことばを預けていきました。ばあちゃんは「**えいえい　んさんんさん**（うんうん、いいよいいよ）、**あんかいうとぅぐんえ**（あずかっておくね～）」と答えては、詫びのことばを袋にていねいに納めていました。あとでわたしに、その袋を「開けたらいかん」と言いながら渡すのでした。

子どもは6歳までは神の子といわれています。何か判断に困った時、子どもに聞くとわかる場合があります。一番ポピュラーなのは選挙です。「この人強い？　弱い？」ときくのですが、たいてい当たるといわれています。

6歳をすぎ、人間界に入ると、それまでのようによその家の屋根のてっぺんに登って、その家の秘密を大声で叫んだり、胎内記憶を口走ったりすることは、大人たちからの攻撃を受けるもとになります。家族は心配してわたしに「**むぬんな**（しゃべるな、ものを言うな）」という名前をつけました。そして、話すと具合が悪いときには「**むぬんな！**」とわたしに言いました。この言葉を聞くと、わたしは黙りこむようになりました。例文は、悪い夢を見た時、けんかを売られた時、家族に不幸がありそうな時などに唱える言葉です。

だなむぬい	**だなくぅとぅや**	**とぅんない**	**ひり**
悪口	悪いことは	どいて	下さい
たんでぃ	**どぅーでぃん**	**うぉーす‘とぅい**	**うぉーす‘とぅい**
お願い	頼みます	（敬いのことば）	



原題：胎児の記憶　シコフミフルフル　　2022年、35x25cm、画用紙、色鉛筆・ペン

Anger: “Why did you tell Mother to abort me when I was in the womb?” Shaking with rage, I stood in tears in front of my neighbor's house and stomped my feet. Shaken by the accuracy of my memories from before birth, the neighbors came to apologize. Grandma put all their apologies in a bag and gave it to me, saying, “Forgive them, but never open the bag to reveal the inside stories.”

1.8　満月に祈る ―――――――――――――――― Prayer to the moon

この絵は、満月に向かって舞いながら祈る祖母とその側にいるわたしです。

ようやく歩けるようになったころ、枯れ葉と話して遊んでいるわたしが、雨の近いことを匂いで嗅ぎ分けることもできることに近所の二人のお年寄りが気づきました。みんなで相談した結果、後継者がなくて絶えていた**むとぅ‘かはまい**の役割を継ぐものとして、わたしを育てることになったのだそうです。**むとぅ‘かはまい**は、島のあらゆる「食べごと」について季節や天候の変化を踏まえて、指示をするという大事な役割でした。こうしてたかだか2歳半のわたしの厳しい日々が始まったのです。発芽を待つ「種籾の見守り」、田を耕す水牛の背に乗って水牛が快く働いてくれるように歌ってあげる仕事、苗代の苗にも歌ってあげなければなりません。それだけでなく、なぜか一人でやらされた口噛み酒づくりなどの仕事を一気にやらねばならないことになったのです。嫌いだったのは、**んすがみ**（味噌かめ）の前で毎日お祈りをすることでした。ときには涙ぽろぽろの**ちゆ**ちゃんは、**はな**（麹）の部屋にずらりと並んだ味噌かめの前で祈ります。母屋の北西の角にあって、1年に2回、**はなんかいぬにかᵖい**（麹迎えの祈願）が行われていました。

だんだん成長して**むぬんな**（しゃべるな）という名前をつけられるようになったわたしは、庭や一番座で突然ぐるぐる回りだすことがありました。時と所をかまわずぐるぐるは始まり、バタリと倒れるのです。めまいがして倒れるまでまでぐるぐるまわりをするわたし。気がつくと大勢が集まって宴会をしていて、わたしはふとんに寝かせられていました。**うぶ‘とぅぬかでぃどぅわい**（大人の数に入る祝い、13歳の祝い）の後からは、わたしのぐるぐるに合わせて、ばあちゃんは**うーす‘とぅい**（お祈り）の時の一番上等の着物で舞いをするようになりました。

ばあちゃんは、なにがあっても「**えいえい、んさんんさん**」と言うばかりで、わたしを叱ることはめったにありませんでした。それでも、どうしてもしてはいけないことをしたときには、「ばあちゃんのあげた名前をとっちゃうよ」と言われました。これは**ちまな**（島名）のことです。**ちまな**は家によって違うけれど、男の子は**たにがた**（父方）から、女の子は**しきがた**（母方）からもらいます。わたしがもらったのは、ばあちゃんの**ちまな**でした。戸籍の名前以外に、**ちゆ**、**ない**、**はんきあがみ**、**むぬんな**などなど、いろいろなあだ名のあったわたしでしたが、本当の名前、諱（いみな）としての**ちまな**を取り上げられるというのは、わたしにとってはいちばん恐ろしいことでした。

原題：ばあちゃんのマンティニガイ（満月のお祈り）　2022年1月、17x25cm、画用紙、色鉛筆・ペン

Prayer to the moon: Grandpa passed away when I was four, and I began to stay with Grandma in her bedroom. She taught me how to thank and pray for every plant and animal as food. The elders chose me as a future ***Mutu'kahamai***, a shaman in charge of food acquisition. Grandma taught me singing, dancing, and playing instruments for everyday life and during traditional rituals.

1.9　涙の口噛み酒 ―――――――――――――― Chewing rice in tears

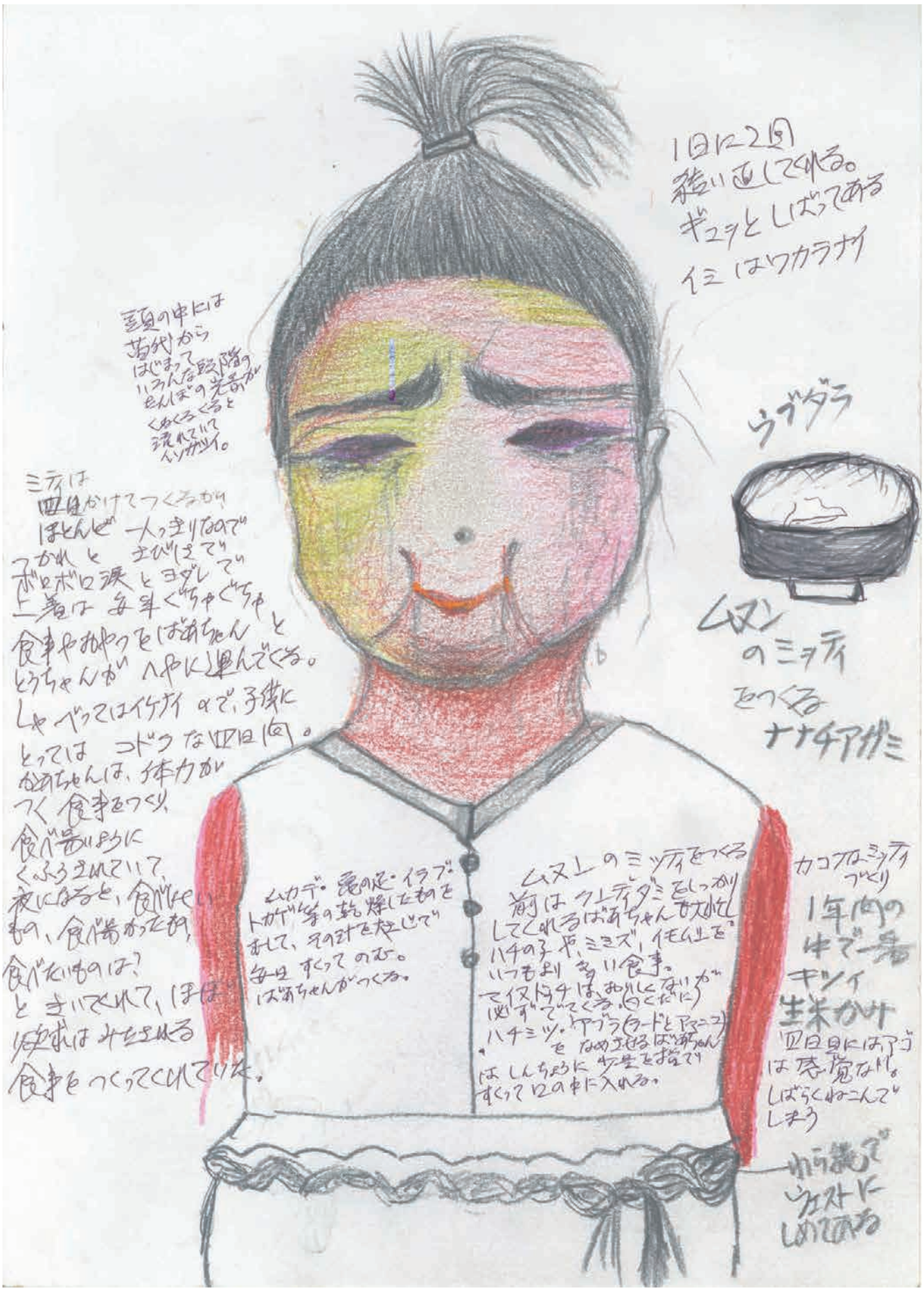
むぬん（稲の成長を祈る行事）のための**み‘てぃ**（口噛み酒）をつくるわたし。**ななちあがみ**（七歳の子ども）の１年間の中で、一番きつい仕事がこの米噛みでした。炊いた米も噛みますが、ごくわずかで小さい手のわたしのおにぎりぐらい。あとは生米ばかりです。涙をながして鼻たれて噛んでいると、小さい子まで「**まゆ‘てぃ**ねーねーが、涙流してる」といって笑いました。**まゆ‘てぃ**は、この頃のわたしのあだ名で、子猫という意味です。髪の毛を、１日に２回ぎゅっと結い直してくれます。腰はわら縄でしめてあります。

むぬんの**み‘てぃ**をつくる前は、**くん‘てぃだみ**（滋養のある食物）をしっかり作ってくれるばあちゃんも大忙しです。ハチの子や、ミミズ、イモムシがいつもより多い食事となります。**まいぬどぅち**（稲の友、イナゴのこと）は、おいしくないけれど佃煮で必ずでてきました。

み‘てぃは四日かけてつくります。ほとんど一人っきりなので、疲れと寂しさで、ボロボロ涙が出るし、ヨダレもいっぱい出るので上着は毎年ぐちゃぐちゃ。しゃべってはいけないので、子どもにとっては孤独な四日間でした。頭の中には、苗代からはじまって、いろんな段階のたんぼの光景がくるくるくると流れていて忙しい。4日目にはもうアゴの感覚がなくなって、そのあとはしばらく寝込んでしまうのが常でした。

食事やおやつを、ばあちゃんととうちゃんが部屋に運んできてくれます。かあちゃんは、体力がつく食事をつくります。食事は、わたしが食べやすいように工夫されていて、夜になると「食べにくいもの、食べやすかったもの、食べたいものは？」ときいてくれて、ほぼ欲求が充たされる食事をつくってくれていました。ムカデ・亀の手・イラブ・トカゲ等の乾燥したものを蒸して、その汁を大さじで毎日すくって飲まされます。そのほかに、ハチミツ・あぶら（ラードと亜麻仁油）をなめさせてくれるばあちゃんは、慎重に少量を指ですくってわたしの口の中に入れてくれます。これらは、食事というよりは、栄養剤のようなものです。

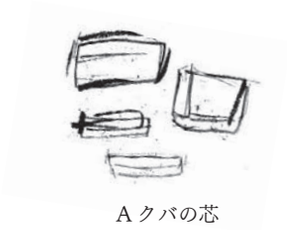
み‘てぃは、未婚の娘が儀式用に噛むものだけだと思われているかもしれませんが、それだけではありません。日常的に噛んで作ったもので、歯がない年寄りになっても作ります。掌に入る扱いやすい丸っこい石を用意して、大きな石などの台の上に、よく水にひたして水を切ったお米を載せてゆっくりくだきます。それをもぐもぐ1、2日かかって噛んで作ります。



原題：ムヌンのミッティをつくるナナチアガミ　　2022年夏、30x21cm、画用紙、色鉛筆

Chewing rice in tears: I was made to chew raw rice for four days before a ritual that needed a fermented beverage (***mi'ti***). At the age of seven, I was the only girl in charge. Mother and Father prepared my favorite food. Grandma gave me energizing food made of substances like lard, honey, grasshoppers, earthworms, caterpillars, larvae, centipedes, turtles, sea snakes, and lizards.

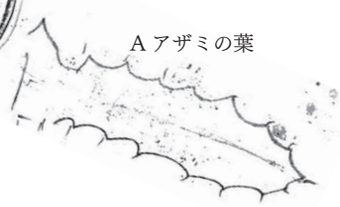
Aアザミの根



Aクバの芯

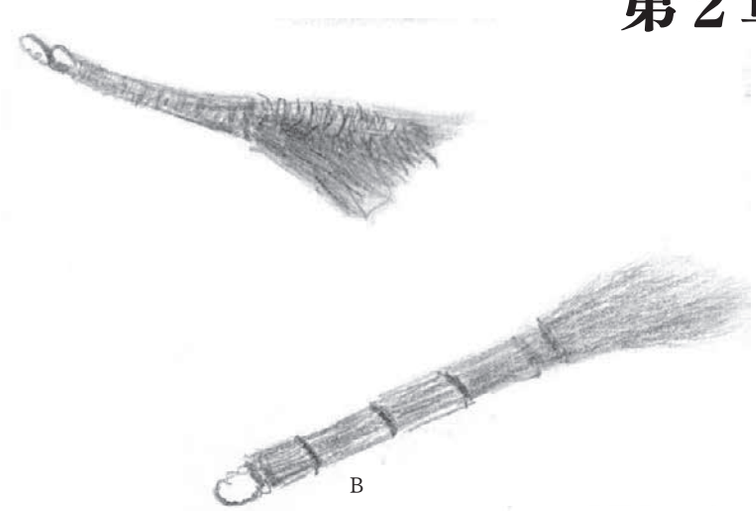
Aフチビヌブトゥの新芽

Aアダンの地上根アダヌチ

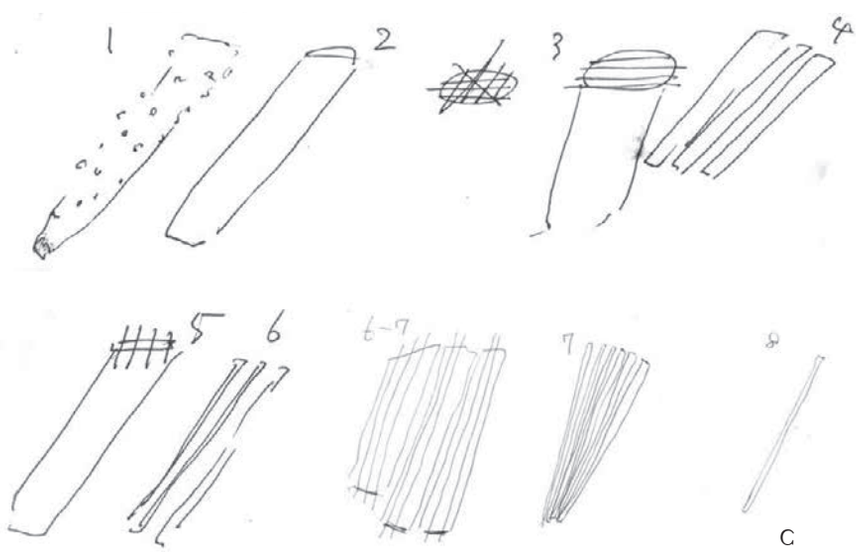


Aアザミの葉

第2章　植物に支えられて



B



C

A 神聖とみなされた食用植物。Some edible plants are traditionally treated as sacred.

B ワラとクロツグで作る**ふ‘てぃ**（箒）。Brooms (***fu‘ti***) are made of straw, palm fiber, and other plants.

C **あだぬち**（アダンの紐）の作り方。***Adanuchi***, a rope made from Pandanus fibers.

畑のものを食べる時の作法も、こまかく父と祖母に教えられました。畑から持ってきた芋・野菜は、半日から一日、小屋の中に広げて休ませます。その間に、芋や野菜に、わたしたちの食物となることをお願いし、なれ親しんだ畑とさようならをする時間にしてもらうのです。野山のものを採ってきた時も、小屋に広げて、同じようにします。与那国島で人が暮らしたあとには、かならず桑の木があります。昔々から人が植物にいかに支えられてきたか、がわたしの生涯の研究のテーマです。

Chapter 2. Supported by Plants

Father and Grandma taught me how to consume our harvest from the fields. Tubers and vegetables were put in a hut for half a day to a day. They were supposed to find time to bid farewell to the fields with which they were familiar and accept that they would be our food. Wild edible plants were also carefully treated in the same manner. If there are mulberry trees in our island, there must have been a village there. “How have plants supported human life from ancient times?” has always been a major topic of interest to me.

I am a seed gatherer.

2.1　樹からの水 ―――――――――――――――――――― Water from a tree

井戸の多くで塩気のある水が出る与那国島では、木に降る雨を、幹にしばりつけた**くば**（ヤシの仲間のビロウ）の葉で集めて、壺に貯める習慣がありました。こうして自然にたまった天水は、甘くておいしく、しかも、わざわざ汲みに行く手間もかからない、たいへんありがたいものでした。

あまみん　んだみん　みぬんとぅ　ならぬん（あま水も　からい水も　ないといけない）。これはお年寄りがいつも話していた言葉です。**あまみん**（真水）の手に入れ方は、1 川、2 わき水、3 雨降りのあとの水たまり、4 ここで図示した雨水を木を利用してためる方法、5 井戸、6 洞窟からのわき水、7 沼の 7 つがあります。お話の中には、雨が降った時にだけ、川のように流れる場所に水を求めたということも伝えられています。そのお話の場所に行ってみると、たしかに水辺にはえる植物が多く、また、貝の化石もあります。大きいものは両手でかかえる大きさのシャコガイです。ここは、普段はただ、木や竹やその他のつるやいろんな植物がはえているだけです。その場所はずうっと西の**かまぬた**へとつづき、東はさとうきび畑のあぜを通っています。この大きな水の通り道のわきにいくつかのわき水がわずかにあります。人々は、雨降りの後、ここに水が走っているといって、情報を共有しあい、めいめい水をくみに行ったといいます。たくさん水をくめて、しかも「おいしい」水が得られるのです。「おいしい」ことの他に「くさりにくい」ことも大切な条件です。ここの水のおいしさは、田原川の水と比べられるほどのもので、田原川はとにかくたくさんの人が水を汲むので、遠くてもここまで来て、おいしい水を好んで汲む人も多かったのです。**んだみん**（塩辛さのある水）の必要な時は、1 海水を利用するか、2 やや塩気のある水としては、祖納村を東西に走る一本の道の南と北と南に隔てて、南側の井戸水が真水、北側の井戸水が塩辛い水です。飲み水の大切さは、どんなに質素な葬式でも水一升を墓に供えることからわかります。

例文は、井戸掘りのときにうたわれる祈りの歌で、水を**みでぃ**といい、日常会話の**みん**は違うなど沖縄島の影響がみられます。

でぃぬ　うくがら　わちんじゃる　くがにたまみでぃや
地の　　奥から　　わき出ずる　　黄金玉水は
うまんちゅ　ぬ　たみに　んしみてぃ　たぶり
大衆　　の　ために　見せて　　くださいませ

原題：「イイナア」　　製作年不明、154x59cm、画用紙、アクリル水彩

Water from a tree: Fresh water is extremely precious in Yonaguni Island. The water in the wells is mostly salty. So, it was customary to collect the rainwater flowing down a tree trunk. A fan-shaped leaf of a palm (***kuba***) was attached to a tree to direct water into a clay pot.

2.2　竹筒の水貯め ―――――――――――――― Bamboo water reserve

田畑には飲み水をためておく、大人の両手の指を合わせたぐらいの太さの竹筒の束が置いてあります。田畑の持ち主以外でも飲んでよいのです。この水貯めは、空が見える場所に置くことが大切です。井戸水とは違って太陽の光・月の光をたっぷりふくむこの水を飲むためだけに、畑に行くこともありました。竹筒の数は6コあるいは6の倍数ですがそのわけは聞かされませんでした。

竹の他に水入れは、鍋やかめ、大きい貝なども使いました。今では水筒といいますが、もともとは**みんいりむぬ**（水を入れるもの）と呼んだ竹の容器がありました。焼き物の**みんいりむぬ**もありました。各自本人の手の平の大きさの**みんいりむぬ**を持っていて、これを**‘とぅいから　ぬ　みんいりむぬ**（一掌の水入れ）と呼びました。茶碗であれば、**‘とぅいら　ぬ　まがい**というのですが。

逆に、水が多すぎて苦しんだ時に、竹に助けられたことが言い伝えられています。**ながあみ**（長雨）で島全体が苦しんだときのこと、人々は長老の教えで生の竹を燃やして寒さをしのぎました。竹は、生で燃えるからです。お話の中の**てぃだん　どぅんぐる**は、太陽所の字をあてた町指定の史跡で、**てぃだん　どぅぐる**とも言い、その長雨で一番初めに太陽の光が射し込んだという井戸のある所です。ここは、人々の信仰の場となっています。また、その井戸の場所が、村の東西南北のちょうど中心に位置するため、「むらの真ん中にと、**てぃだんがなち**（太陽神）が考えたんだ」と人々は思いました。**まちり**（冬の祭り）の中で、**‘か**（神女）の一行がその位置に来ると必ず拝んでおられる光景が見受けられます。

このほか竹はいろいろなところで役にたっています。農業の祈りの最後をしめくくる、**うかゞんふとぅてぃ**（祈願ほどき、豊年祭）の中で、わたしはバイクに乗せられて、あちこちの**はる**（耕地）で、自分の身長の何倍もある長い竹竿を振るという役割をさせられていました。**なんだぐち　‘てぃばらい**といって、長い竹竿を左右に勢いよく振り、ひゅっひゅっという音を出すのです。これはあらゆる魔をふりはらうという意味ですが、うまく音を出すのは難しく、終わるころには気絶するほど激しいものでした。**なんだぐち**は竹ざおを指すそうですが、語源はよくわかりません。**‘てぃばらい**は振り払うという意味です。旧暦5月4日の**どぅがぬひ**に、大漁と航海安全を祈る祭りでも、これをやっていました。あるおばあさんがやっておられたのが、わたしに引き継がれました。わたしが中学1年の時「そんなものは時代遅れだ」と言われてからは、一人で村の東の方へ行って、海や畑に向かってやるようにしていました。

原題：人は植物にいかに支えられてきたか　　製作年不明、38x54cm、画用紙・上質紙、クレヨン

Bamboo water reserve: Containers for rainwater were made from bamboo stems. They were placed in a field where there was access to sunshine and moonlight. Everybody was allowed to drink from them. The water was thought to be filled with the energy of the sun and the moon, and people often walked a long way to taste the water. Only the rich owned large water tanks made of stone (***ichitarai***).

2.3　海藻を干す ―――――――――――――――――――― Drying seaweeds

なちら（海人草、駆虫薬）を海で採取してきて、日に干してとっておきます。お腹が痛くなると、煎じて飲ませます。とても苦い薬です。このように、島では海や山から採取し保存して利用することがいろいろあります。野生のものや栽培したものでも、採るときには作法があります。

それらの中でも、織物の原料の**ぶー**（苧麻（ちょま））と、染める原料の藍は、とくに注意が必要です。染物や織物の材料として藍や**ぶー**を取る時、いきなり行ったら藍や**ぶー**にいらっしゃる神様が驚きます。ですから、なんらかの合図をして寝ている神様をお起こししてから近づいていって、採らせてもらわないといけません。それには、ぽんと石を投げてもいいし、「おおい！」と言っても、呟払いしても、歌をうたってもいいのです。

ぶーは、いちばん神に近い植物です。だから、落とした魂のかけらを集めて体に戻す**たまちすい**をするときに、魂を人間の体にしばりつけるために、**ぶー**の繊維を使います。手首、足首、首にも巻いて魂が逃げ出さないようにするのです。わたしが**たまちすい**された時は、お腹にまで**ぶー**を巻かれました。

くす（唐辛子）にも神様がいます。だから同じように遠くからよびかけたりして合図して、神様に起きていただいてから採ります。これをおこたって、神様が驚かれると、木が枯れてしまったり、唐辛子が辛くない、**ぶー**ならすぐ切れるし、藍なら染らないのです。与那国島では、寝ている人を起こすときは、乱暴に起こしてはいけないといいます。これは人も植物も同じです。

稲作のために行われる祈願は、**むぬん**（物忌）と呼びます。年中行事としての**むぬん**とは別に、各自各家庭で作物をつくる時に行なわれていた**むぬ‘くいぬにか゜い**（農業の祈願）があります。これは、一年を通して何度もあり、その祈りは家庭の長老を中心にしたやり方でした。また、実際に農作業をする者も、**にらがなち**（大地）に、**てぃんがなち**（天）に、**ふてぃんがなち**（稲光）に、**うとぅんとぅがなち**（月光）に、風に、あらゆる周りの皆さんへのお願いを日常的に行ってきました。特別に供え物を揃えなくても手を合わせ、特に手を合わせなくても口ずさむ祈りは、日常の中にごく普通にありました。例文は、自生しているものを採らせていただく時に、与那国島の誰もが当たり前にしていた声掛けのことばです。

またん　まり　くぅよぉ　　また　生まれて　おいでよ

原題：干乾カイジンソウ１　　2012 年 12 月、25x19cm、画用紙、色鉛筆

Drying seaweeds: Wild plants and seaweeds were important as food, feed, and medicine. The drawing shows the drying process of a medicinal seaweed (***nachira***) used for deworming. Some plants are sacred, and they need special rituals before they are harvested.

2.4　眠る稲 ―――――――――――――――― Sleeping paddy deities

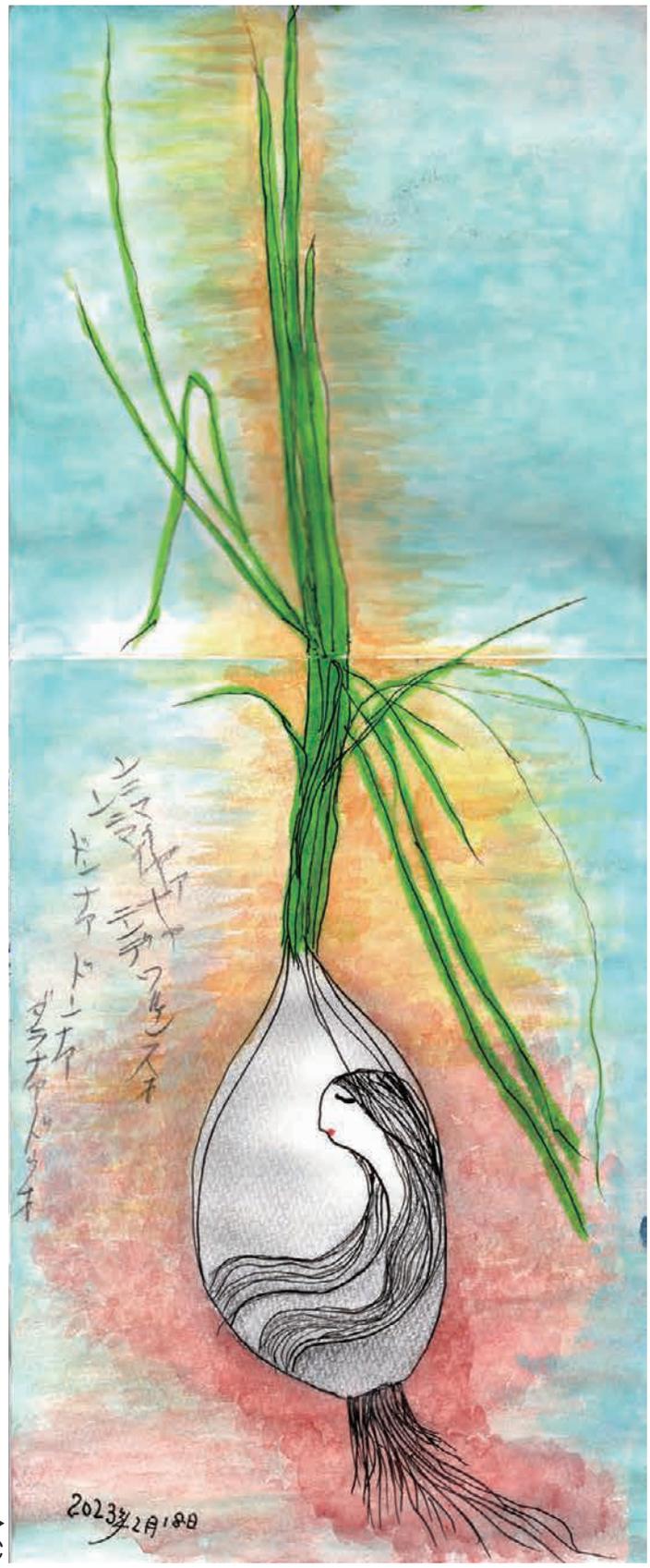
みんき　あんきるんどー（水に　預けるぞー）の合図で、種もみを流水に漬けます。二歳半から、種もみを預かって、播種できるようになるまで見守るという大変な責任ある役割がわたしの仕事になりました。**むとぅ‘かはまい**の訓練を兼ねた仕事のひとつです。水に漬けた種もみを、おじさんたちめいめいがわたしに預けに来ます。預けられた種もみが水に漬けて何日目なのか、一人一人の日数をわたしは正確に数えなければなりません。そのために、それぞれの種もみの場所に小石を毎日１つづつ置いていきます。そうやって数えて、種もみの様子をみながら、もう播いていい時がきたよと教えるわけです。下の左側の絵は、そのころの絵の再現で、まだみんな寝ている状態です。１粒の米の中には、男と女がいて、仲良くしていると、虫も遠慮するそうです。が、やがて女の精だけが残ります。その別れの様子が右側の絵です。また、刈り取り前にはよく眠っていただくと**まるちん**（丸い粒）の収穫がいただけるといわれています。

日を数えるための**いちぶぐ**（石）集めも大変でした。小石は「良い石」でなければなりません。家の中から外へしだいに活動範囲を広げながら、日頃から良い石とそうではない石に分けて袋に集めて歩きました。この石集めは子どもには過酷で、時には道に座り込んで泣いていました。通りがかる大人たちは誰も手伝ってくれず、笑顔で通り過ぎていくのでした。**むとぅ‘かはまい**の訓練だと知っていたのでしょう。「手伝ってあげられないんだよ」と言われました。

（上）眠る種もみ　Sleeping paddy grains
（右）発芽前の男女の精　Rice spirits

◀ A

◀ B



▶ C

原題：ニンディワイヒリヨオ（お眠りください）

A（左上 Upper left）：男神との別れ Departure of the male spirit　2023 年 2 月、25x17cm、画用紙、カラーペン

B（右 Right）：稲粒の女神 Female spirit asleep in a rice grain　2023 年 2 月、15x17cm 画用紙、カラーペン

C（左下 Lower left）：稲に眠る女神 Female spirit asleep in the rice plant　2023 年 2 月、42x17cm、画用紙、カラーペン

Sleeping paddy deities: At the age of two and a half, I began taking care of the rice grains (***chin***) for transplanting. Neighbors brought their rice grains to me, so that I could take care of their germination. Male and female deities, sleeping in grains, slowly wake up with humidity and warmth. When the paddy (***nnimai***) grows, there is a deity within each plant. The deity needs to sleep well and should never be disturbed before the grains get ripe.

2.5　苗に歌う ―――――――――――――――― Singing to rice seedlings

なーす（苗代）で、**ない**（稲の苗）にうたってあげて、田植えのために引っ越し（田植え）をすることを告げて、苗さんたちに納得してもらうことが、わたしの務めでした。絵に描いたこのときは3つの**なーす**に歌ってあげることになっていました。「とても無理！」とわたしは言いました。

ばあちゃんがやさしく静かな声でこう言いました。「これはあんたの仕事だよ。あんたが**なーす**に行かないとか歌わんと言うと、みんなで困るのはわかるよね。3か所の苗代はよく知っているんだから目つぶってみるとみんなはっきり見えるはずだよ。知ってる苗代なら大丈夫。一人でいやになったら**にらがなち**に頼みなさい。どんな言葉で頼んでもいいから、あんたには**にらがなち**と相対できる力があるのだよ。」

ポロポロ泣きながらばあちゃんの話を聞き、そのまま寝ました。朝になり**すでぃ**（お清め）をすませると、父と一緒に馬に乗り、悲しい心で家を出ました。でも、畦で歌いだすと悲しい気持ちはなくなり、もともとは漂流民との別れのつらさを歌った**ばがりぐりしゃ**（別れづらいけれど）の歌の意味もわかっているので、3か所の**苗代**に届くように歌いました。

田植えの時には、**さーら**という**くば**の葉の容れ物に口噛み酒を入れ、水面を滑らせて次々に飲み、**さーらみ‘てぃ　まいぬ　にばりん　さーらみんがし**（稲の　根も　伸びやかに）**さーらさーら**と歌いながら植えます。伸びてくると慎みの時期です。稲が稔るためには稲にやどっている神様の熟睡が必要です。稲刈り前には、神様の安眠をさまたげないように、人間たちも静かに静かにすごします。

やがて稲がしっかり熟したら、やさしく合図をして起きていただき、それからはじめてわたしちの手に渡されるのです。これが稲刈りです。その時に使う**いらら**（鎌）は、大切に取ってあって、その時期以外には決して触れてはいけません。

収穫の時には、「**にらがなち**がかなっていたから、**てぃんがなち**のおかげで」と初穂を水平に両手にもって、田んぼの一郭で主に女性が踊ります。こうやって田んぼから出たら初穂になります。これは、小学校のころ、今生きておられたら130歳ぐらいのおばあちゃんにうかがった稲の話です。

くがにぴぬ	**にしきびぬ**	**くがにだまば**	**たばらりひーり**	**ふがらたぬぅ**
黄金日の	錦日の	黄金玉を	たまわり	ありがたいこと

原題：苗にうたうナイちゃん　　2017 年 1 月、26x38cm、画用紙、色鉛筆・水彩

Singing to rice seedlings: As a future ***Mutu'kahamai***, it was my duty to sing to the rice seedlings. They must accept that they have to leave their nursery to be transplanted to the main paddy field. Farmers came to the school, and I was allowed to leave the class to sing to the seedlings. This illustration shows me singing in three nurseries in a day. This duty was far more important to me than classes.

2.6 赤ん坊を木に預ける ―――――――――――――― Babysitting by trees

泣き続ける子の子守りに疲れると、赤ん坊をこの絵の**んくみでぃる**（ゆりかご）か**あみらぐ**（網目のぶらんこ）に入れて、子守りを木に頼むという古い習慣があります。じいちゃんとばあちゃんはわたしが泣き止まないので、ゆりかごに綱をつけて木の幹に結びつけて、家の中から引っ張ってゆらしていたそうです。また、同じように**あみらぐ**に入れて「土に預ける」という習慣もありました。

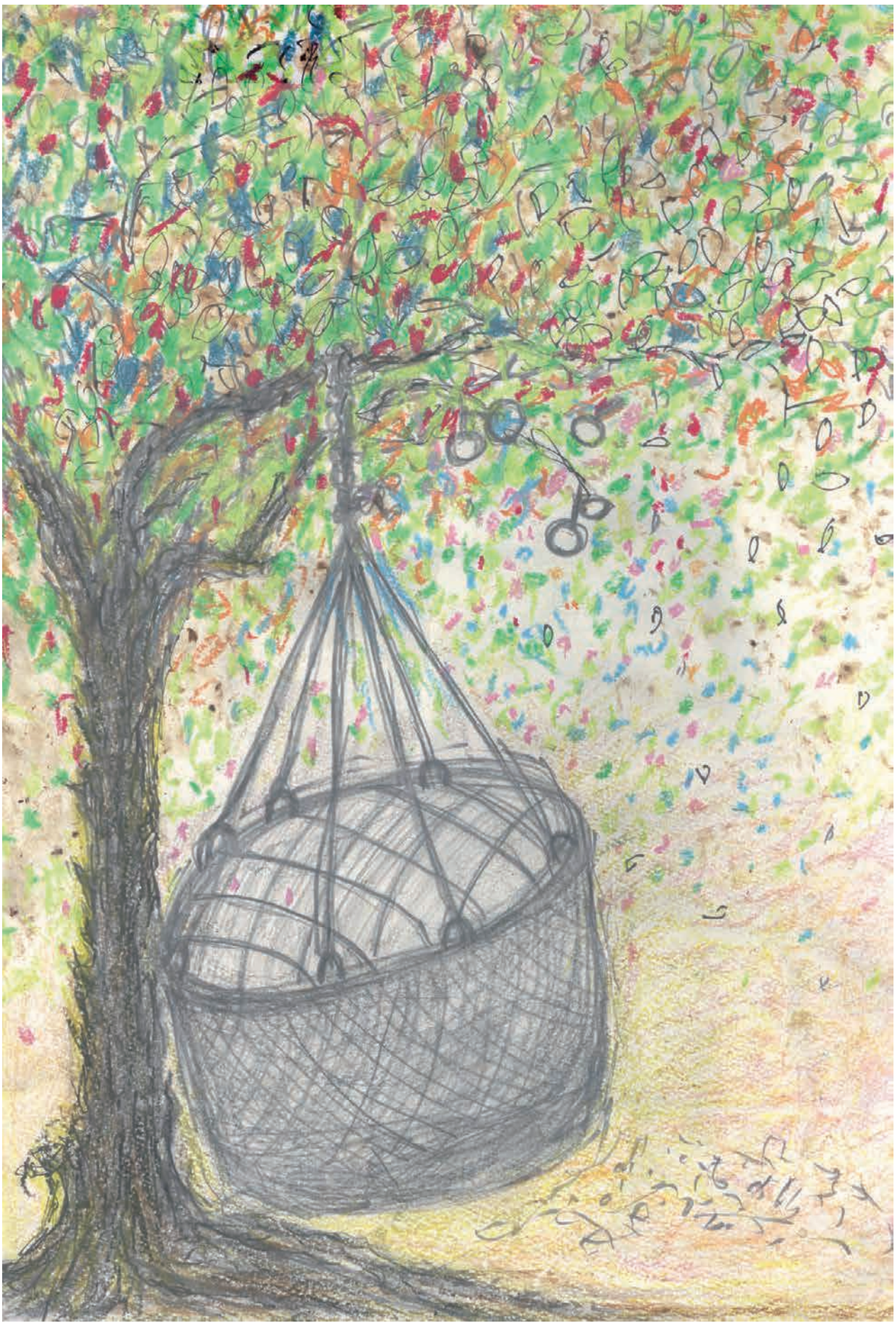
とうちゃんは**あみらぐ**を手作りして多くの孫の子守りをしました。わたしの兄は赤ちゃんの時、両親が多忙なためばあちゃんとじいちゃんが**あみらぐ**に寝かせて長い間こいですごしたので、頭の後がぺしゃんこになってしまったとばあちゃんが話していました。妹が県外で世帯を持ったとき、子どもに恵まれたらとうちゃんの手作りの**あみらぐ**をつくってもらいたいと言っていましたが、本当にとうちゃんはつくって送ったので、妹はとても喜びました。

かでぃばうすりならい（風をおそれならい）と言って、まだ歩かない頃から子どもに「風」を敬うことを教えます。**うすりならい**というのは、目には見えなくても恐れ敬うことで、**どぅふぬち**（屋敷の主）**うすりならい**などという表現もあります。ひとり歩きできるようになると、大人の目の届くところで、木の下につくった**あみらぐ**にのせます。一番初めに乗った**あみらぐ**を下げた木を親として、その子はなにかとその木とともに成長することになります。木に縄をくくったり、木に物を吊り下げるなどして、木をめぐって、大人は色々なことを教えていきます。木と力くらべしたりもします。

染め物に使う**ふぐん**（フクギ）の木なんかを、木を伐って使わせてもらうときも、切らせてもらっていいかを聞きます。「あなたを伐っていいですか？　あなたの体の一部をわたしにください。ただし、根絶やしにはしません」「今日のお日柄はいいですか？」「今日は刃物をあてていいですか？」「悩ましいことをかかえていませんか？」

これらの問いに、木が「どうぞ」と言わなかったら、わたしは手ぶらで帰ってくることになります。みんなに「だめなやつ」と言われましたけれどこれだけは仕方ありません。

また、その木に相手がすでにいるかどうかを聞きます。先約があるかもしれないでしょう。そして木が「いいよ」といえば「じゃあいただきます」といって取らせてもらいます。



原題：木にあづける（左半分）　2012年、42x59cm、画用紙、色鉛筆・クレヨン

Babysitting by trees: When a baby does not stop crying, babysitters are at a loss. In our island, we have the choice to ask a tree to work as a babysitter. If a tree in the garden agrees to accept the baby, we place the baby in a cradle, a bamboo basket, and tie the cradle to the tree trunk with a rope. The ground deities of the garden help the tree look after the baby. This shows how much we depend on trees.

2.7　疲れを木に預ける ―――――――――――――― Healed on a tree

お茶や薬草の植物を集めることもわたしの大切な仕事で、ばあちゃんと集めてまわったものです。採るのも楽じゃなくて、木にもたれて休んでいると、寝るつもりではなかったけど、気がついたら寝てしまっていた、という時の絵です。心身ともに消耗したときは、そのまま床に寝ないで、大きな木の幹にもたれるようにして眠ると、癒やされるという習慣もありました。

このように、生きている木には、大きな力がこもっていますから、与那国島の人は、生木をむやみに切ることをとても嫌います。枯れたものか、もう死ぬと決まった木だけを切ります。ここには、神様に申し訳ないという気持があります。必要最少限度にしておけという教えでしょう。

常日頃、枯れ木を集めるのではなく、むやみに生木を切って薪にしたりするようなことをしている人が、言動がおかしくなり、お酒に溺れたり、精神を病んだりすることがあります。そういう人は、例文にあるように、**きぃぬ　からにどぅ　しみらりぶる**（木の　精霊に　締め付けられている）と考えられていました。植物だけでなく、動物、石、光などには、**から**（精霊）がやどっています。からと人の数え切れない交流を踏まえて、ばあちゃんは、わたしに、**から**（精神）のこもらない話はするな、と口癖のように言って聞かせました。

木を伐って、その切り株の芽が上に出るにも出ようがない、根っこだけ生きている状態にしておいてはいけません。とくに絶対やってはいけない木がいくつかあります。そんな木の声がわたしには、ざわざわと聞こえてくることがあります。「どこの誰が呼んでるの？　人間か人間じゃない生き物かわからないよぉ。もしかして木の根っこ？」。わからないから、何日間もかかって掘ってみたら、生き埋めになった木の根が出てきました。こんな時には何日もかかる古い古い儀式をします。**てぃんがなち　てぃだんがなち　うやまいうかゞみ**（天の神々太陽神敬い拝み）といいます。この根っこに、地上で何日もかけて、晴れの日の**てぃだんがなち**（太陽様）の光、**うとぅんとぅがなち**（月光様）、雨や風やいろいろなお天気に、あててあげます。これをしたら、根っこはようやく満足し、心おだやかに眠りにはいることができます。

あらーぐ　　なまきぃ　きぃぶたる　ゆんがら　うぬ　とぅがぶん‘てぃらぁ
あまりにも　生木を　　切りだしていたから　　その　罪科なんだろうなあ

原題：ねている人　　2012年、38x27cm、画用紙、色鉛筆・水彩

Healed on a tree: I collected wild fruits of mulberry. The yield was abundant, and I became exhausted. I leaned on a tree trunk and fell asleep there. I was completely rejuvenated when I awoke. Thus, we believe a tree heals your physical fatigue and mental worries. If you cut down green trees too often, the tree spirts (***kara***) would seize you.

2.8　ガジュマルの木 ―――――――――――――――― A strangler tree

この木は、**さが゜い**（ガジュマル）です。普通は民家には植えませんが、木ノ下うすまい（士族のおじいさん、沖縄島のことば）という人の子孫の一族の家には植えられていました。この方は、むかし沖縄島中部の平安座島から与那国島に来られて生活し、生まれ島に戻りたいという思いを残して亡くなられました。子孫たちは、この木の下に集まって、祖先をしのぶ宴をもよおしてきました。

それほど遠い島でなくても、西表島との交流は、古くからありました。ばあちゃんは、わたしに付き添って石垣島の眼科に行く時に、西表島の沖にさしかかると、わたしを起こして西表島に手をあわせて、深く祈るのが常でした。

西表島からの材木で、与那国島はうるおっていました。材を手に入れるには、物々交換によっていたそうですが、その時、材の種類や良し悪しの見極めをする役割の人が西表島の崎山村にいました。その方が与那国にもその力をもった人がいたほうが良いという判断で、与那国島の男性が修行のため西表島に滞在し、1年ほどかかって材の見極めをする力を身につけたそうです。その時、崎山村の人が、免許皆伝の印にと、その人に与えたのは、**なんだぬぶるさ**（銀塊）でした。もともとは、台湾から与那国島に贈られたものが、手違いで西表島に留まっていたので、それを与那国島に返すという意味合いもあったそうです。わたしは、その銀塊を、それを受け継いでいた方から実際に見せてもらったことがありましたが、新生児の頭ほどある大きなもので、持ってみるととても重かったのを覚えています。

新しい材木で家を建てると、そこにはまだ神々がいらっしゃいません。それで、家ができあがったら、大工の棟梁が家主に家をわたすための儀式をします。棟梁というのは、すごく権威がある人で、天のお使い役です。**みーだい**と呼ばれる儀式がすむまでは、家は家主のものではなく、天のものとされています。家主は、木の神々や石の神々に、建築につかわせていただいた木の代や石の代を払います。棟梁が代理で受け取りますが、それを払い終えて初めて家は人のものになって住むことが許されるようになるわけです。

ある家に、法事のお客さんがたくさん来たことがあります。家に泊れない人数なので、近くの旅館を頼みましたが、**みーだい**の儀式をすませていない新築でした。まだ神様の手からぬけていないから泊めるわけにはいかない、といって断ったのです。与那国島では、これをおかしいと思う人はいません。むしろ、泊めて下さいという方が非常識という考えがあります。

原題：木ノ下ウスマイ一族の木　　2020 年 11 月、19x27cm、画用紙、色鉛筆・ペン

A strangler tree: This tree belongs to the fig family. It grows on top of another tree until it strangles the host tree dead. Usually, we refrain from planting it in our households. The descendant families of the Kinoshita Ushumai, the offsprings of old Mr. Kinoshita, preferred to plant this tree in their houses. Mr. Kinoshita is said to have arrived in Yonaguni Island from the Henza Island of the central part of Okinawa Island.

2.9　木の精霊に出会う ―――――――――――――― Fairy in the woods

親しい人を失って哀しむ人を見守る**きでぃむぬ**。わたしの母の実体験を絵にしました。

きでぃむぬは、妖怪、おばけのたぐいですが、人間好きの陽気な**きでぃむぬ**もいます。海の上を歩き、魚とりが上手。とった魚は目だけ食べて、あとは仲良くなった人にあげてしまいます。また、人をだまして海の上、山の中をあちこちと連れ歩くこともあります。ところが、その人が屁をすると、ほったらかして逃げるので、その人は家に帰るのが大変になると言われています。与那国の島内には、このような**までぃむぬ・きでぃむぬ**のみなさんのような妖怪が好む場所が多くあり、集落内でも、人間とともに住んでいると考えられています。

この絵は親しかったいとこが事故で亡くなったあと、いとこの子どもたちが成長してお父さんに仕込まれたりっぱな芸能発表をした時、喜びながらも哀しくなった母が暗い夜道を一人で歩いて帰った時の情景です。木を大切に扱う大工の仕事をしていたいとこが生前から親しくしていた**きでぃむぬ**たちが故人の霊といっしょに、母を見守りながら夜道を一緒に歩いてくれたことに母はあとから気づきました。そうとは知らずに、**きでぃむぬ**がたくさんいるので有名な屋敷まわりの**ふぐん**（フクギ）の並木のところまで来たときのようすです。

わたしが小さい頃から、道路拡張といって、防風林、防火林が、どんどん伐られていきました。わたしは道路工事のために打たれた印の杭を見てわあわあ言って騒ぎました。「おまえがいると仕事にならん」と言われて、柱にくくりつけられたりもしました。「**きでぃむぬ**の棲むところがなくなる。かわいそう」「木にはいろいろな生き物がたくさん棲んでいるよ。棲むところがなくなる。かわいそう」と。

「他所に行けばいいさ」と人はよくいうけど、他所だって先に棲んでいる生き物たちがいるでしょう？　わたしたち人間のこととして考えたらわかります。いきなり自分の家に入ってくる者がいて「わたしここに住みます」と言われても困るでしょう。人間も一緒じゃない？　日照権とか争うじゃない。人間に生まれなかったらどうでもいいの？　他の生き物に生まれていたら待遇が違うわけ？

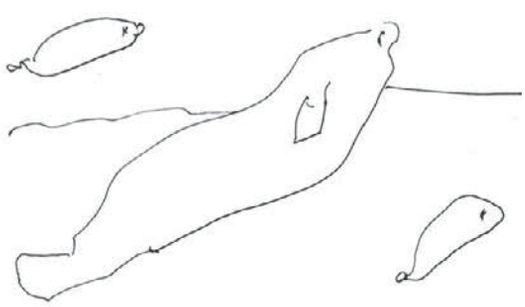
道路整備といって道に石を敷く時もそうです。石にも種類があって、転がっている石と、**むいいち**（根付き石）の区別があり、それぞれの石に言い分があるのですから、むりやり動かされたら、石もものを言います。

原題：哀しむ人を見守るキディムヌ　　2012 年、38x27㎝、画用紙、色鉛筆・クレヨン

Fairy in the woods: One night, Mother was walking alone in darkness. She was miserable because she was remembering her deceased cousin. When she came by a row of ***fugun*** (*Garcinia subelliptica*) trees, she realized that the ghost of her dead cousin and his friendly tree spirits (***kidimunu***), had been accompanying her to soothe her sorrow. Tree spirits are usually extremely mischievous and fool humans to stray into the sea or the hills. If you make friends with them, they will help your fishing, and they ask only for the eyes of the catch in exchange.

A

第３章　動物とのかかわり



B

C

A **くぶや**（大蝙蝠）はなぜかわたしの下着の印。Grandma marked my underwear with flying foxes.

B **うんながぬかなち**（海中の神）と呼んでばあちゃんが描いた子連れのジュゴン。

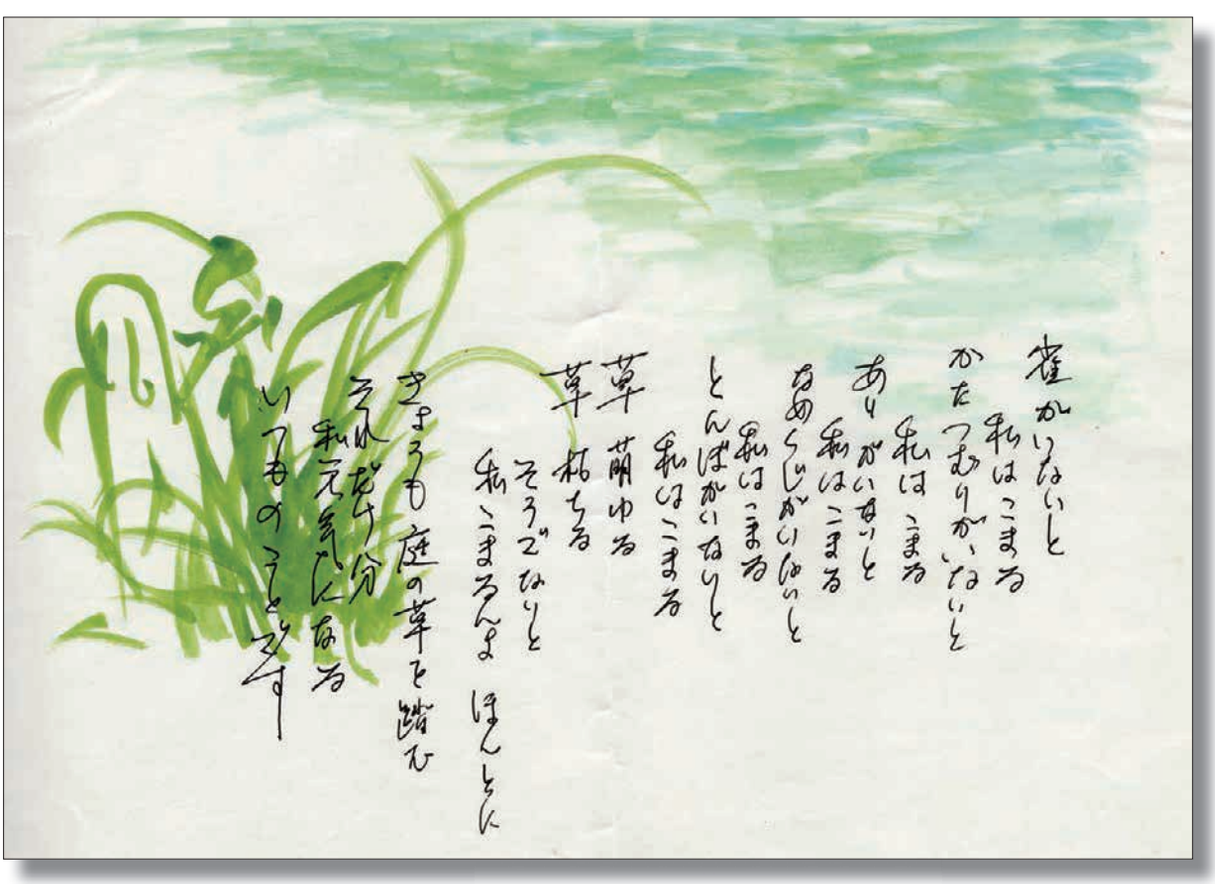
Grandma saw and drew a dugong with a baby. She called them ***unnaganukanachi***, or deities of the ocean.

C **んだみ**（かたつむり）を集めて煮て食べる４年生。Collecting ***ndami***, or snails, for food. Ten years old.

動物を大切に養い、人間の食べ物になることを納得してもらったうえで、殺して料理し、お椀に盛るまで。そのすべてに一貫して責任もつことを、父に仕込まれました。にわとりやヤギをかわいがって世話をし、そして、時が来たらいのちを断つ仕事を、父は兄弟の中でわたしだけにたたき込みました。できるだけ苦しませないで、いのちを断つことの大切さを、日常会話の中でよく父は話しました。地にもぐり海を渡り空を飛んで島にやってくるあらゆる生き物たちにも、歓迎と感謝の祈りをささげることが、欠かせません。台風が近づくととんぼを捕まえて、蚊帳の中にかくまうということもしていました。

Chapter 3. Together with Animals

Father trained me to master the care of domestic animals, chickens, and goats. His daily teachings included how to ask them to be our food and how to butcher them by causing the least pain. Greeting and thanking the animals of the ground, ocean, and sky were also important. When a typhoon approached, we caught dragonflies and kept them in our mosquito nets; we released them when the weather became calm.



Without sparrows, I am in trouble.

3.1　卵を抱く鶏 ―――――――――――――― A hen sitting on eggs

み‘た‘てぃ（鶏）は神聖なものです。鶏が大騒ぎするときは、なにか大変なことが起こる予兆とされています。鶏が「ケーッ！」と一声鳴くだけで、たちまち魔ものが逃げだします。また鶏はくちばしや爪で、悪いものをみつけて引きずり出して食べてしまう力があります。卵を抱く鶏は**んぐみみ‘た**といいます。

鶏は人間を護る、そんな大切な役割をしてきたから、昔の人は鶏を食べることはしませんでした。食べはするけれど、それも日常的なものではないという感覚があります。例えばお盆や焼香（法事）の時に裸にした鶏を供えます。あとでみんなでいただきますが、それも、食べるというよりは、出汁を飲んで祖先にあやかるという、直会（なおらい）のような感じです。でも手間がかかるので最近はあまり供えなくなりました。

三十三年忌の焼香のときに、羽をむしった鶏を一羽まるごと供えるのは、先祖が乗って飛び立つという考えからだそうです。ばあちゃんたちは、昔は、仏前に捧げる鶏は羽根をむしらなかった、新しい品種の白色レグホンとかが来る前は、チャボみたいな小さな鶏で、いろいろな色が混じった種類でした。それよりも昔は、山に野生している**だまみ‘た‘てぃ**（山の鶏）を連れてきていたそうです。**だまみ‘た‘てぃ**は、もともとは、祈願のために生きた鶏が使われた後、山に放されたものです。この鶏は見つけたものは捕まえてよいとされていました。

また、似た言葉ですが、別に、**だまぬみ‘た**もいると言われています。これは、美しい羽をもつ鳥で、大人の背より高い木の枝にとまっていると尾が地面まで長く垂れていたといいます。この鳥に会うと幸運になるといわれ、羽を一つ手にするだけで永遠に幸せになると言われているものです。

小さいときのわたしの動物を世話する仕事は、ひよこの世話からはじまりました。ひよこの世話は親鶏より難しいのです。畑や野原から柔らかい草を集めてきて細かく刻みます。それにぬかをまぜてあげます。たまに丸くないお米**くぶりちん**（割れ米）もあげます。**くぶりちん**をひよこは大好きです。**くぶりちん**は**はどぅや**（すずめ）にも、**うやんとぅ**（ねずみ）にもあげます。**うやんとぅ**にはあげないと丸い米を食べるので、ちゃんとたくさんあげます。**うやんとぅ**には勝てないので、勝負しなくてもいいようにたくさんあげます。

そう、わたしはいつも猫と鶏を抱えて引っ越しをしてきました。だから、住む家を見つけるのがたいへんでした。鶏は小屋がいるし、糞の臭いもあるし。猫はご飯だけあげればいいから楽ですが。

原題：ングミミッタ　　2017 年 2 月、25x38cm、画用紙、色鉛筆

A hen sitting on eggs: My hen protects her eggs. Chickens are regarded as sacred. A crowing rooster will chase all evils away at once. They can peck insects and worms out of the ground. When chickens make a fuss, they predict that something important will happen. They also accompany ancestors' spirits during their travels. Due to their power to protect humans from evil spirits, our ancestors never consumed them.

3.2　水牛に乗る ―――――――――――――― On the back of a carabao

水牛の背中に載せられた、**ない**ちゃんと呼ばれていたわたしが、耕すための農具をとりつける前に水牛にお話をしてうたってあげているところです。その時の水牛の様子で、続けて農具をつけたり、少し水牛の様子を見ることにしようと時間をおいたりします。水牛が納得するまで、根気よくお話しをしたりうたってあげたりしなければなりません。最高で、四日かかったことがありました。四日目の朝、わたしは「もうイヤダヨ」と言って泣きました。しかし、ばあちゃんはじめ、とうちゃんもかあちゃんも「泣いてもいいから行っといで」と言うので、グシグシ泣きながらおじさんの馬にのって田んぼに行きました。その日の弁当は、かあちゃんが特別につくったと言ってとうちゃんが持ってきてくれました。行った先の家でも特別の弁当を用意してくれてあって、帰りにはみんなもらって帰りました。どれもみんなおいしかったです。この絵の**たるまい**の田んぼは広いので、すごく寂しかったのを今も思いだすと涙ぐんでしまいます。寒かったんですよう……。

うちには牛はいませんでしたが、馬がいて、力も強くかしこく従順でした。この馬は、母がいのちの危機に出会いかけたときに「しばしお待ちたぼれ」と話してそれを教えてくれたことがありました。父ともよく話が通じていたようです。ある朝のこと、父が、馬に話していました。「今日はとてもきつい仕事だが、頼む、がんばってくれ、お前に家族がかかっていることを忘れるな、がんばるんだぞ。夕方帰ったらごちそうしてやるからね。」父は**おーりよりよりよ、おーりよりよりよ**、といいながら馬をなでていました。

体調が悪くて、その日学校を休んでいたわたしに、ばあちゃんが作ってくれた、豆腐チャンプルーをわたしは弟たちと、おいしくいただきました。

夕方帰ってきた父に、ばあちゃんは、**ばださ　てぃばん　あらい　さーぬめぇ**（ぼっちゃん、手足洗ってお茶をお飲みなさい）とねぎらいました。馬の世話してから休むよと答えた父は、しばらくすると血相を変えてどなりはじめました「ここにおいてあった豆腐、誰がどうしたかあ！」と。「子ども達に食べさせたよ」とばあちゃん。父は泣きながら怒っていました。「馬にあげるはずの豆腐だったのに。ああ、馬に何と言い訳したらいいんだ」と泣いていました。ばあちゃんはあやまって父をなだめ、馬の前で２人はひざまづいて馬にあやまりました。とくに厳しい仕事をさせる日は「明日の朝早く、お前が何も仕事しなくても豆腐あげよう」と言ってあったのです。

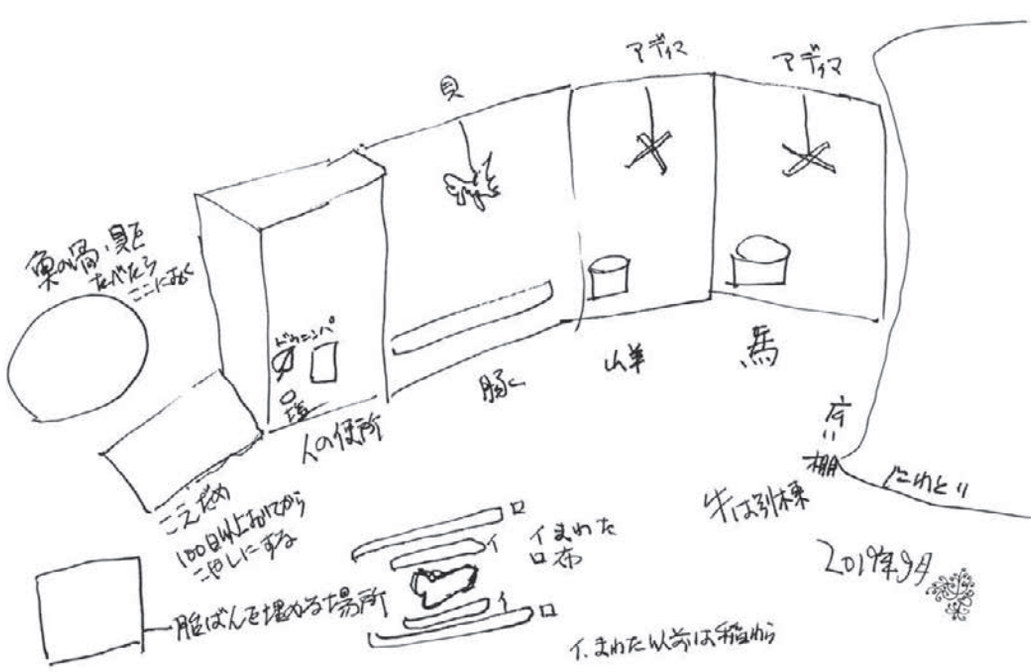
原題：水牛のナイちゃん　　2022 年 12 月、45x27cm、画用紙、アクリル水彩

On the back of a carabao: Riding on the back of a carabao was part of my duties as a future ***Mutu'kahamai***. When there were no machines for plowing, and carabaos were the only means of tilling paddy fields. When I was placed on the back of a carabao, I sang songs and talked to it. This was thought to be important to make it work happily. When I fell into the mud, the owner of the field grabbed me and placed me back on. When work continued for four days, I found it difficult.

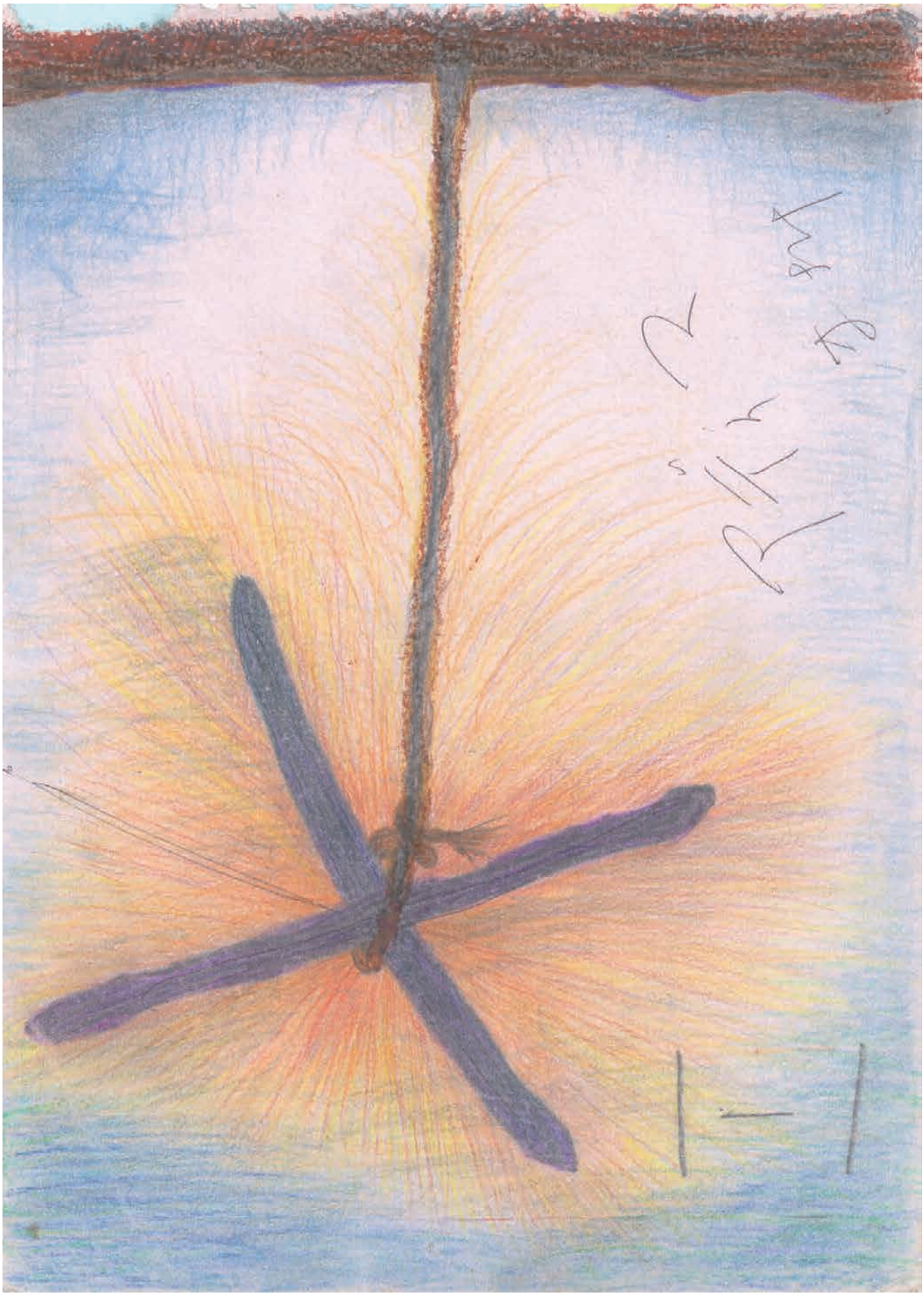
3.3　魔除けの十字 ―――――――――――――――― A cross against evil

あでぃまは木を十字形に組んだもので、魔除けです。この絵は、じいちゃんがつくってくれたわたしの**あでぃま**。じいちゃんは、わたしが3歳になる日までにつくるんだとか言っていたらしいです。病気になったじいちゃんは、わたしが4歳の時になくなりました。最後は毎日ふとんに寝ていました。ふとんに寝たきりになりながら、わたしのための**あでぃま**の最後の仕上げをしながら、灰を付けて磨き上げていたのを覚えています。これは**うとぅんとぅあんしみ**（月光浴）をする庭先の小屋の入口につけてありました。冬の寒い日は直接外に出ずに、竹の荒い目の壁からさしこむ**うとぅんとぅがなち**（月光様）と相対します。また、そこは、**んぐみみ‘た**（卵を抱く鶏）の巣がある場所でもありました。わたしがいくら泣いてもやる**うとぅんとぅあんしみ**の間、ずっとじいちゃんとばあちゃんは、いつもこの小屋にすわって見ていてくれました。

あでぃまは家の**にぬは**（北側の隅）にある家畜小屋などに吊り下げられます。魔除けには他に**だだあんぶ**（スイジガイ）も使います。下の絵にあるように、豚小屋には、スイジガイが下げてあり、山羊小屋と馬小屋には**あでぃま**が吊り下げてあります。ここは、霊力の強い**ふるや**（便所）と**うどぅる**（肥溜め）のある神聖な場所で、**あんぐ゜ぬむぬ**（胎盤）、魚の骨や貝を食べたあとの殻などを預けます。捨てるとは言わず、**あんきるん**（預ける）というのです。



あでぃまのある**にぬは**の様子　A sacred corner with crosses for animals



原題：アディマ　まよけ　　2012年、29x21cm、画用紙、色鉛筆

A cross against evil: Wooden crosses were hung where evil spirits might come in. We usually protected domestic animals, especially pigs, with a cross or shells having sharp spines. Grandpa polished the wood of a cross for me with ash, and he continued to finish it even on his death bed. This cross has nothing to do with a Christian cross.

3.4　魚と話す ―――――――――――――――――――――――― Talking with fish

魚と話しているこの絵は、よく描きます。島のならわしのひとつで、魚をつかまえて食べる前に、人は魚に話をして、もちろん歌もうたってあげます。この絵の魚は、よくもぐってとっていた魚です。やり方の基本は貝でも同じです。今は海に魚をとりに行くことはないので、魚屋さんから一匹買ってきます。それでも同じように皿に寝かせてお話しをしてからいただきます。

家畜も食べるときは同じです。**ひびだ**（ヤギ）は春と秋にはヤギ料理を作って父は皆におふるまいをしていました。子ヤギのときに、将来食べられる子ヤギ、子を産むようになる子ヤギと運命がわかれます。牛・豚・ヤギのめいめいに「あなたはこういう運命だからね」と時々言って聞かせます。

畑の野菜や、野山のものをいただくときも、お話と歌は欠かせません。その上で、別れてきた畑や野山を懐かしがる気持ちから解放されるように、半日から一日は小屋の中に広げて、人間に食べられるという運命を受け入れられるように配慮するというのが、わたしがばあちゃんから伝えられた与那国島の食べ物に対するやり方です。つまり、糧となるひとつひとつのいのちに対しての感謝とお祈りを、食べられる側が納得できるだけの時間をかけて、きちんと捧げるのです。以下は、魚に歌ってあげている歌です。

やぁ　とぅながぬ　いてぃふとぅぎぃ
やぁ　大海の　　生仏様
すーや　　あびゃる　ちぃにば　なしとぅらし　ふがらたぬぅ
きょうは　きれいな　日にをば　してくださり　ありがたいことです
すーぬ　ちぃば　むとぅば　き　　んだとぅ　あぬとぅや　んにぬ　なが
今日の　日を　　基に　　して　　あなたと　わたしは　　胸の　　中
ばたぬ　ながから　んに　　わいひりよー
腹の　　中から　　見ていて　くださいませ
とぅながぬ　いてぃふとぅぎぃ
大海の　　生仏様
たばらりひーり　たばらりひーり　たばらりひーり
たまわりくださいませ　（くりかえし）

原題：ウンナガヌイティフトゥギ　　製作年不明、21x30cm、画用紙、色鉛筆

Talking with fish: I make it a rule to talk to a fish in the sea before catching it. "You are a living Buddha in the ocean," are the words of a song sung to praise it. Now I do not have a chance to fish. When I buy a fish at a shop, I put it on a dish and sing to it anyway, asking the fish's consent before cooking it.

3.5　海亀の子の見送り ―――――――――― Seeing off baby turtles

わたしが小学校六年生の時です。**とぅぐるはま**でばあちゃんが亀を見送っていました。ばあちゃんは毎年、浜で生まれた子どもの亀たちが海に帰って行く時に、見おくる**ぱいぱい**（お祈り）をしていました。ときには、わたしが子亀を育てて、大きくなってから海に放すこともやりました。**とぅーがなち**（海の神様）への使者として、感謝と祈りの伝言を頼むのです。大きく育って島に帰ってきた海亀の背中に、見覚えのある印が残っていたこともあります。

わたしは、目が充血するので、ばあちゃんに連れられて石垣島の眼科に2、3才から中学校のころまで通いました。母が「あなたおめめが赤いから今度のお船だよ」と言ったら、すぐ魚の用意を始めます。途中で出会うかもしれない**ひ‘とぅ**（イルカ）と遊ぶためです。父は潮時を見て、わたしを連れて出て、夏冬関係なく**しばな**と呼ぶごつごつした岩場の所にわたしを立たせて、わたしが波や風にあおられて飛ばされないように晒の布で岩場にくくりつけておいてから自分は魚を捕ります。捕れたら岩場で魚にお祈りをします。「あなたたちは、今から船旅でわたしたちのためにイルカにさしあげるので、そのつもりでいてください。お願いします」といって。家ではばあちゃんが儀式の準備をして待っています。わたしは魚を持って家の中をぐるりと3回まわり、家の周りもまわって魚に「ここがわたしの住んでいるところよ」「ここが道だよ」とか時間をかけて教えてあげます。2歳の時から船に乗るたびにやっていました。

たてぃないゆ（小魚）は生きた状態で船で運びます。イルカを見たらまず船のエンジンを止め、拝みます。静かにしているとイルカのほうから船にだんだん近寄ってきます。こちら側からいろいろなお話をします。イルカも鳴きます。持って行った魚を、バケツにひもを付けてバケツの中に海の石をおもりとして入れて魚を入れ、**したーり　うやしわり**（どうぞお召し上がり下さい）と言って海の中に下ろし、**び‘とぅにぬぶぐ**というイルカを見送るお祈りをします。イルカに遊んでもらうのです。

じゅうぶんに遊んだあとのイルカはやがて自然に潜っていきます。イルカのみんながいなくなるまで待つから1時間あまりかかることもありました。それから船を出します。8、9時間かかる船旅なのでイルカに会ったら10時間かかりました。

与那国島に帰ってきたら儀式をします。帰った日は疲れているからたいてい翌日、半日かけてやりました。魚たち、イルカたち、**とぅーがなち**（海の神様）への祈願で、**すびにかぺい**（首尾願い）をやって旅は終わります。

原題：海に向かう子亀を見おくるバイバイ　　2015 年 6 月、24x35cm、画用紙、アクリル水彩・クレヨン

Seeing off baby turtles: Grandma made it a rule to pray for the hatching baby turtles every year. She occasionally prepared a boat made of leaves to encourage their departure. Sometimes, I was advised to keep one of them. I fed it for some time, and then released it as a messenger to the sea deities (***Tuuganachi***).

3.6　鳥が巣立つ ―――――――――――――――― A bird leaving its nest

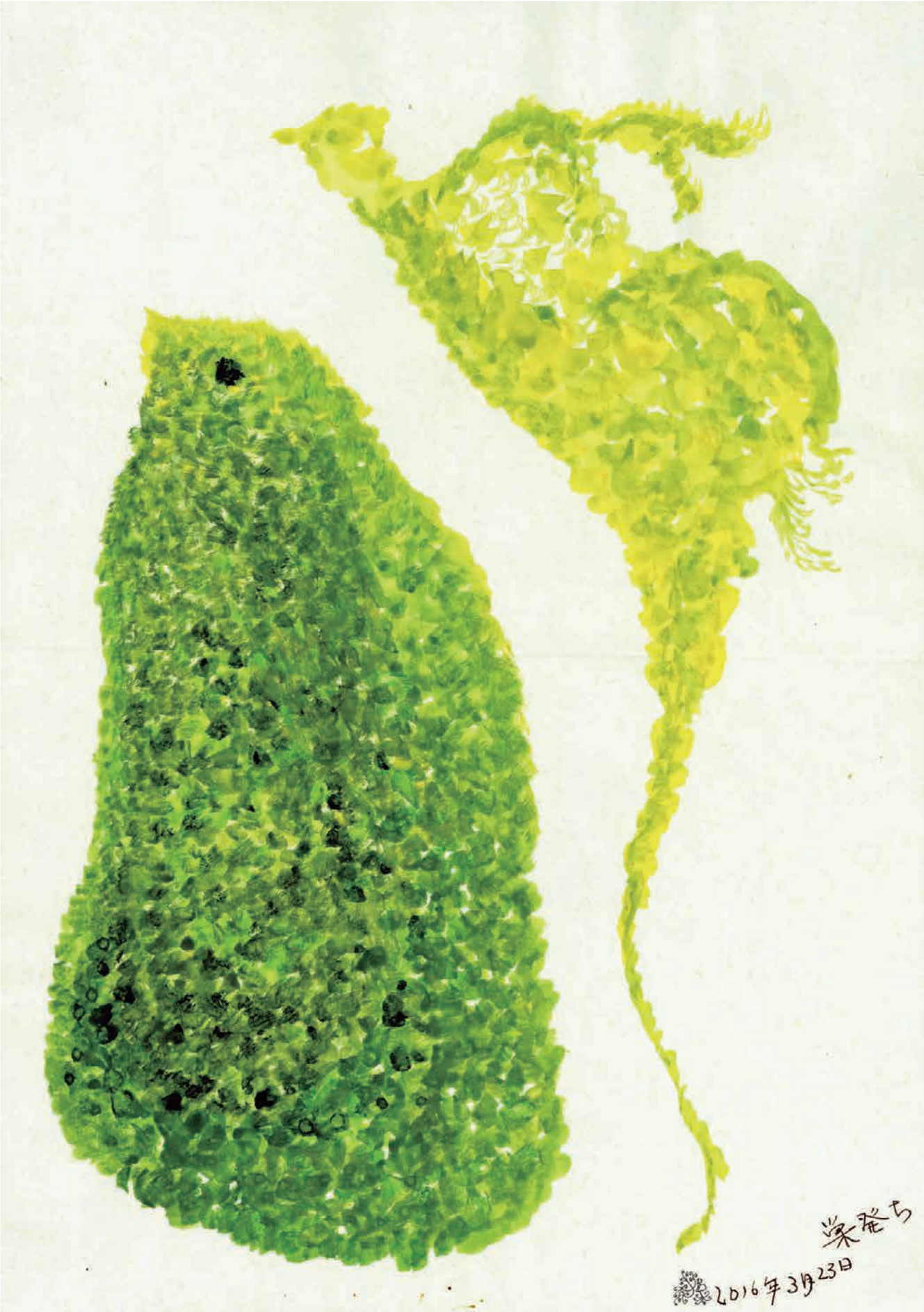
鳥たちの中でも、**はどぅや**（スズメ）や**ま‘たる**（ツバメ）は、子どもたちにも親しいものです。ツバメは、一年に2回、卵を産み　子育てをしますが、男の子はツバメをケガさせずにつかまえて世話をする習慣がありました。通り道でまちぶせて、地面すれすれに飛んでいるつばめを網ですばやくすくいとります。これを育てて、渡りが始まるころに放していました。育ててと簡単にいいましたが、ツバメを人間が養うのは大変な手間です。家族が総動員で餌取りを手伝います。そして、空に放すときには、**てぃんがなち**（天の神々）への感謝と祈りの伝言をツバメにお願いするのです。わたしが10歳ごろの1963年までは確かにやっていましが、この頃、すでにそういうことをする家庭は減っていました。

ちんちら‘てぃ（ジャコウネズミ）の赤ん坊を育てる**ちんちら‘てぃうやまい**（もぐら拝み）ということを、わたしはしていました。幼稚園に入る前ぐらいから、**ちんちら‘てぃ**の赤ちゃんをとうちゃんがつれてきて、屋敷の中で飼って、また野に帰します。**ちんちら‘てぃ**の家は、お芋を入れる籠に藁を敷き詰めて土を入れます。そして**ちんちら‘てぃ**のいやがることを絶対にしてはならないというのは、家じゅうで守り、弟たちや妹にもきちんと守らせていました。**ちんちら‘てぃ**の家は、私とばあちゃんの居る裏座の部屋の片隅の静かなところでした。

大きくなった**ちんちら‘てぃ**を野に帰すときは、前の晩からご馳走を作ります。朝は家族全員が、まず**あか゜いてぃだんうやまい**（日の出拝み）をめいめいで済ませて、そのあと**ちんちら‘てぃ**といっしょにご馳走をいただきながら宴をします。

大人はお酒も飲むお祝いです。ばあちゃんがとりしきって**ちんちら‘てぃ**を送る**うーす‘とぅぃ**（お祈り）をします。そのあと、左耳の毛を少しと、わたしの左側の髪の毛を少し切り取ってからふとんで道を作って外に逃がします。宴と歌で送られた**ちんちら‘てぃ**は、**にらがなち**（地底の神々）に、うちの家でどんなに大事にされたか、そして家族みんながいつもどんなに**にらがなち**に感謝して崇めているかを、直接伝えてくれます。夜、地面の穴から空をむいて短く鳴くのは、**てぃんがなち**（天の神々）への報告なのだと言われています。

ちんちら‘てぃは、鼻がとがっていて、手足は人間の指を「パー」に開いた形。同じ名前だけれど、手がシャベルの形になったのも、**くんま**の畑にだけいました。こちらは、太陽に会うと死んでしまうので、飼えませんでした。



原題：巣発ち　　2016 年 3 月、30x21cm、上質紙、アクリル水彩

A bird leaving its nest: A chick of a bird leaving its nest. Boys were advised to catch a young swallow and feed it for some time. A swallow only accepts live insects, and all the family collaborated with the boy to catch and feed it. The swallow was to be released into the sky to deliver the family's thanks to the heavenly deities (***Tinganachi***).

3.7　トンボ ―――――――――――――――――――――――――――― Dragonflies

あぎだん（トンボ類）は大切な生き物で、**あぎだんうやまい**（トンボ敬い）の祈願がありました。**あぎだんんかい‘とぅ**（トンボ迎えの人）と呼ばれるおばあさんの家では、絵のようにトンボが止まれる植物を軒からぶら下げて、供物を並べ、子どもたちはそこでおかしや他のごちそうをもらえるので楽しみにしていました。各自でその家の庭に石を積み上げる習慣がありました。庭に**いちたらい**(石盥)を置いて、そこにやってくる**あぎだん**を迎えるのは、もともとは**むとぅ‘かはまい**の大切な役割でもありました。**むとぅ‘かはまい**がいなくなっても、**あぎだんんかい‘とぅ**の役割だけは、引き継がれていました。

あぎだんかくまいと言って、台風が近づくと、**あぎだん**をできるだけ捕まえて、家につった蚊帳の中に放し、夜は寝ないで見ていました。天気がよくなると放します。**あぎだんかくまい**をするわりには、**あぎだん**を捕まえてひよこの餌にすることも普通にやりました。

トンボは島に渡ってきて何か月かいます。稲刈りの途中ぐらいの季節に**あぎだんんかい**（トンボの祭り）といって、右の図のような仕掛けでトンボを迎えました。座敷の１番座と２番座を使って歌いながら舞います。わたしは小さかったから庭で見ていただけでしたが、男の歌と女の歌は少しずつ違っていました。「来年も島のことを忘れないでまた来てくれますように」と祈ります。

トンボは何種類もいて、赤とんぼを**あがむぬ**と呼んで年寄りが好んでいました。最近は、「大和奥さん」という名前の**だまとぅうくさん**（糸とんぼ）も赤とんぼも減ってしまいました。

今ちょうど**あぎだんぐさ**が咲いています。クマツヅラのことです。棒のように長い花の穂でトンボがとまりやすいでしょう。**あぎだんぐさ**が咲くと、トンボは今年どのくらいくるかなと思います。

夜の灯りに飛んでくる虫たちは、祖先の霊がやってこられるといいます。また、トンボを含めて、いろいろな小動物の多くは、人間の大切な食べ物でもありました。列挙してみると、**いゆ**（魚）、**んだみ**（カタツムリ）、**んだみだぐ**（ナメクジ）、**だぐ**（芋虫）、**んかでぃ**（ムカデ）、**ばがどぅ**（トカゲ）、**とぅがら**（蛇）、**あぎだん**（トンボ）、**あうだ**（カエル）、**さんさん**（セミ）、**でぃみみ**（ミミズ）、**あや**（アリ）、**まいぬどぅち**（イナゴ）、**いさとぅまい**（カマキリ）、**あんしゃみ**（カメムシ）、**だまかんな**（山のカニ）、**とぅーかんな**（海のカニ）、**んぷ**（巻き貝）、**かたかや**（笠貝）、などです。

原題 :アギダンヨオ　ドゥグイワリヨオ（トンボさんお休みくださいね）2023 年 1 月、29x21cm、画用紙、鉛筆・水彩

Dragonflies: Dragonflies were important for the islanders to indicate seasonal changes. Rituals were performed to welcome their arrival. Nevertheless, they were often consumed as food and used as feed for chickens.

3.8　猫がいない ―――――――――――――――――――――――――――― My stray cat

「はぐれたきたこ。皆様、情報をください。人なつっこいおす猫。人のことばを少々理解し話す。……」これは、いっしょに暮らしていた猫の「きたこ」を探すために描いたポスターの下描きです。

2022年夏のある日、病院で目覚めたわたし。救急車で運ばれたらしいのですが、どうやって救急車に乗ったのか、記憶がありません。

愛猫のきたこは、アパートの隣の家の窓で、前足を乗せてミャアーアーアー、ミャアーアーアーと、けたたましく鳴き叫んで、隣家の住人に訴えました。「普段、きたこは騒がないのに、こうも激しく鳴くとは、N子さんに何かあったのかもしれない」と夫婦でアパートの部屋に入ると、わたしが倒れて硬くなって反応のない状態だったといいます。

夫婦はきたこに「N子さんの病院カバンを知らないかい？」と尋ねました。すると、きたこはズルズルとショルダーバッグをひきずってきたというのです。救急隊員は、その中の受診カードを見て、わたしのかかりつけの病院に運んでくれたのでした。

何も知らずに退院してきたわたしに、隣の方が言われました。「きたこちゃんの根気強さは、N子さんのいのちを救ったよ。犬が飼い主を助ける話は聞くけど、猫がそんなことするって、聞いたことないわ、これで2度目よ、あなた。きたこちゃんに、うんとお礼言っときなさいよ」と。

きたこにいのちを救われたのは、実は4度目だったのです。

猫たちには、何かあったら大声で人間が気づくまでいうんだよ、と常日頃お願いしています。与那国島では、人間の安否確認のために、その人の住んでいる所まで猫の行動範囲を広げておくという知恵が昔からありました。猫たちの警戒警報は人間よりも速くて漏れがないのです。猫の義務をわかってくれれば、あとは、猫の尊厳を守ってあげるように努めます。死んだらこの絵のように、猫をやぶの中に寝かせて、塩とみそをくるんで体にくくりつけて、ひもじくないように送ってあげます。「お利口なあんたがいたから助かったよ、ありがとう」とうんとお礼を言います。

原題：はぐれたきたこ　　2014 年 8 月、27x20cm、画用紙、アクリル水彩・ペン

My stray cat: A request to search for my stray cat. For us, cats were the most familiar animals, along with chickens. This cat was so clever as to save my life four times. It used to call my neighbor to help whenever I fell sick and fainted. It was customary for us islanders to use cats as a means of notifying humans of dangers.

3.9　仲間たち ―――――――――――――――――――――――― My companions

右ページの絵は、**んだん　いてぃむち、ああぬん　いてぃむち、しゃにいしゃにい　ぬ　どぅわい**、つまり「あんたも　生き物　私も　生き物　うれしい　うれしい　の　祝い」をする時に、描いたものです。年に２回一緒に住んでいる動物たちにお礼をして、いいことをしてあげる儀式です。この日は、鶏や山羊や猫にサービスし、よろしくよろしくと頼みます。子やぎにはあちこち行って、和やかにしておいで、といいます。それぞれの動物の喜ぶごちそうを作ってやります。毎日は作ってやれんけれど、今日は特別だからと言い聞かせます。年に２回、春と冬に入る前にやります。

鶏をはじめ鳥類はすべて聖なる存在です。自分が死ぬときは乗せてくれよ、と頼んでおきます。もしあんたが先に死んだら、他の鳥にわたしを乗せてくれと**とぅんき**（伝言）してくれよ、と願います。子猫も連れて行きます。海の近くで、島中の**ちでぃちでぃ**（頂き）、**とぅーがなち**（海の神様）、**たぎたぎ**（山）に祈ります。

下の絵は、７歳のわたしが、字ではなく、**かいだ**という絵で書かれた手紙を届ける、郵便配達のようなことをしている場面ですが、いろいろな動物たちがいっしょに楽しく歩いてくれているようすです。

動物たちと歩く７歳のわたし　A happy walk with animals

原題：ドゥナントゥヌドゥワイその１　老衰死めざすたまんくなさの旅

2021年３月、25x17cm、画用紙、アクリル水彩・ペン

My companions: These are some of my companions. Animals and plants are our teachers in life, demonstrating how to live in harmony. Many of them are human food as well. I aim to grow old with them until I move from this world to another someday.

A

第４章　祖父母の教え

B

A 祈りの前の**すでぃ**（お清め）をする本家のばあちゃん。

An old woman purifying herself before a prayer.

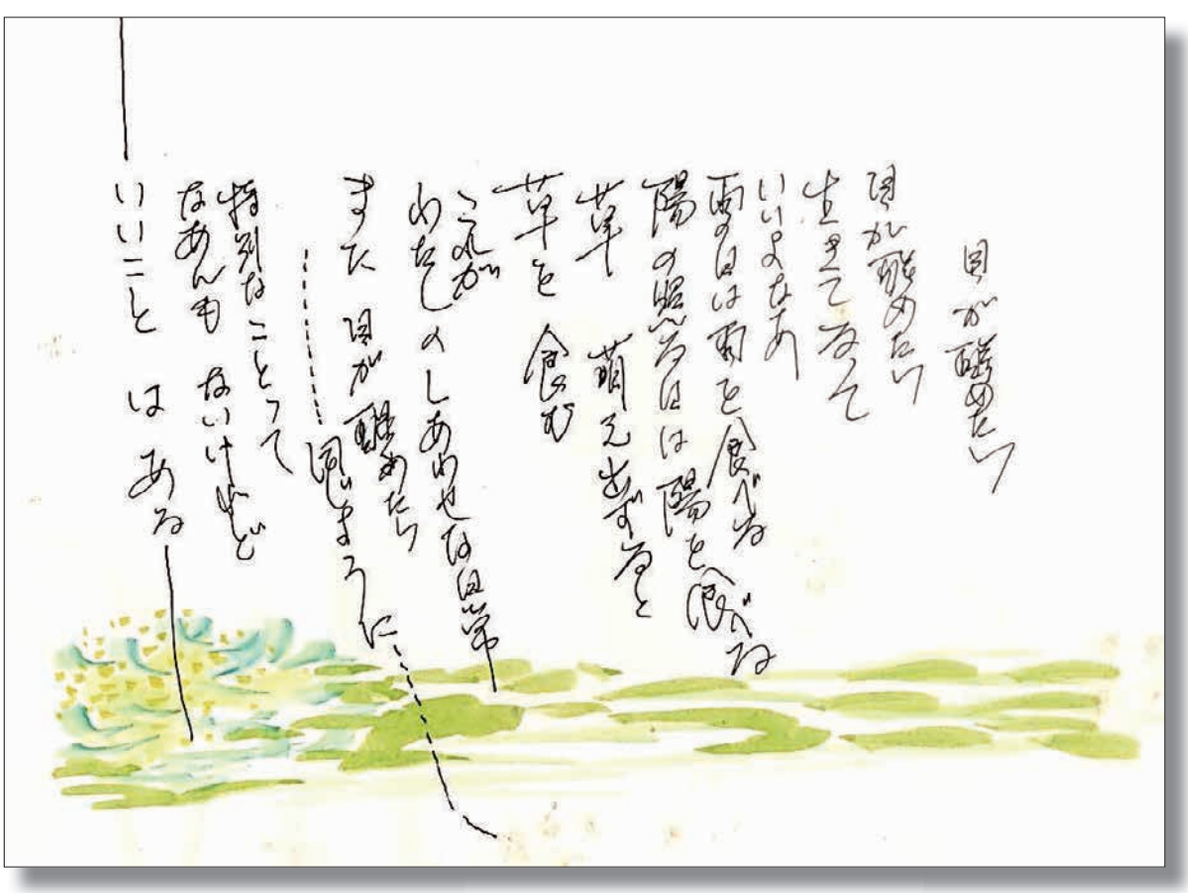
B 家族のための**うーす‘とぅい**（お祈り）をする祖母。

Grandma praying for the family.

病弱だったわたしは、日中はじいちゃんの懐に入れられて過ごしました。ばあちゃんの部屋で、わたしは14年間寝起きしました。悲しいことや怖いことがあってわたしが泣いてもこわがっても、ばあちゃんはいつも、**えいえい、んさん、んさん**（はいはい、いいよ、いいよ）というだけ。いつも周りにはお年寄りがいて、昔々からのいろいろなことを、繰り返し繰り返し話して聞かせてくれました。お年寄りの言うことには、口をはさまず、たとえ一人一人の言うことがちがっていても、そのままに受け止めることを教えられました。

Chapter 4. Elders' teaching

I was of poor health, and Grandpa used to keep me warm under his shirt. I lived in Grandma's room for 14 years and learned her ways of daily living. I was often sad and afraid, but she always soothed me, saying, "It's okay, it's okay (***Ei ei. Nsan nsan***)." The elders would surround me and repeatedly narrate their stories. I learnt to absorb what the elders told me, never raising questions, even if their oral traditions did not seem to match each other.

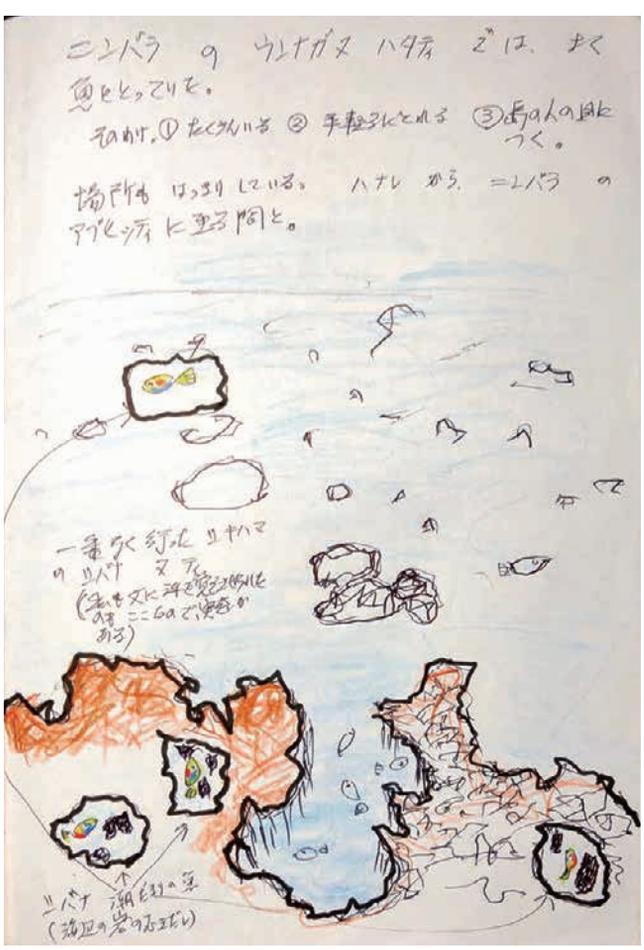


It is nice to wake up to find myself still alive.

4.1　祈りの浜 ―――――――――――――――――――――――― A sacred beach

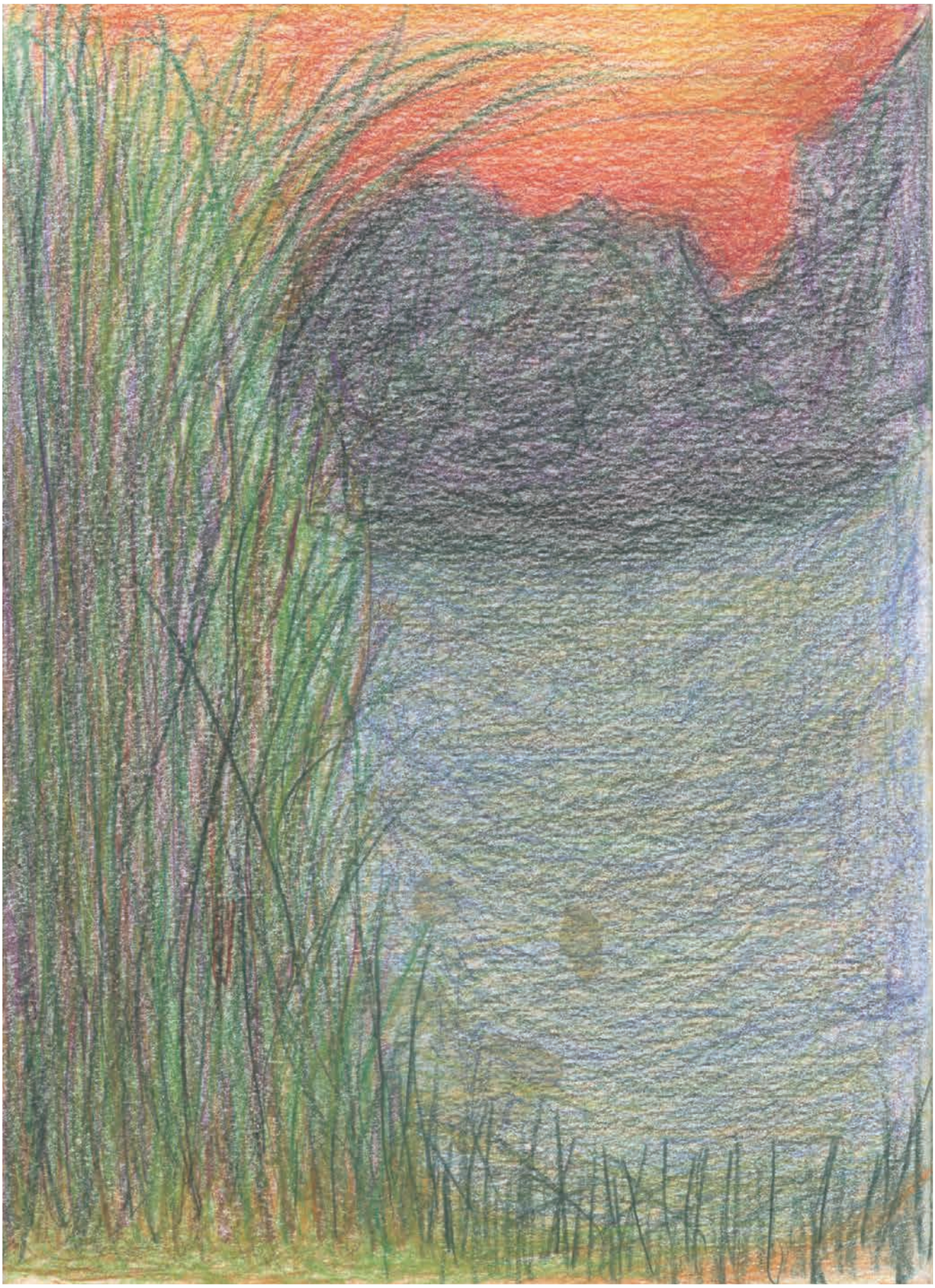
島の北にある**しきはま**は、わたしが一番慣れ親しんだ浜です。13 歳になって、どの海辺も訪れていいよ、と言われるまでは、ここにしか行けませんでした。**しきはま**にある洞窟につながる穴は、**にらがなち**が海に向かって出ていく場所です。少し沖にはごつごつした岩が多いところで、こういう地形を**しばな**と呼びます。ここには大きなはまぐりがいますが、絶対に食べてはいけないときつく叱られたことがあります。浜の岩場のなかの大きなはまぐりは、**さにてぃ**（旧暦三月三日）に**にらがなち**が**とぅがなち**にあいにいく時に、合図をする神聖で重要なはまぐりです。山もまちも海もみわたせる場所ですが、今は護岸工事によってすっかり景観が変わってしまっています。

最近は、混同している人が多いようですが、**うーす‘とぅい**は、**ぱいぱい**や**にがぃ**とは違います。**ぱいぱい**は手を合わせて頭を下げることすべてを全体的に言う言葉です。その中で、**にがぃ**は、ひとつの目的をもって**ぱいぱい**することです。これに対して、**うーす‘とぅい**は、自分の希望や願いをを言うのではなくて、相手に対する敬意をこめて頭を垂れることそのものです。ですから、毎日の暮らしの中で、一番自然によく出てくるのは**うーす‘とぅい**です。良いことがあっても悪いことがあっても、一日中**うーす‘とぅい**と口に出てきます。なんであれ、敬意を払うべきものに出会って、**うーす‘とぅい**と言わないことには落ち着きません。例えば親の側を通るときに、**うーす‘とぅい**とつぶやかないような子どもは、眉をひそめられたものです。



しきはまのようす　Shikihama beach

うーす‘とぅい（祈り）には、間違いとか足りないとかはないのです。ここがおもしろいところで、**たらぬむぬやたらしひり**（足らないものは足らしてください）と、必ず言いそえるのが習慣だからです。



原題：シキ浜から北西の方を見て　　2015年7月、21x15cm、画用紙、色鉛筆

A sacred beach: ***Shikihama*** beach. This was the only beach I was allowed to visit until I was thirteen, when people began treating me as a grown-up. I followed Grandma and the other elders to fish and pray there. The ground deities (***Niraganachi***) used to flow out into the ocean deities (***Tuuganachi***) through one of several sacred caves (***abu***). A species of bivalves worked as gatekeepers of the cave, and when I caught some to cook and feed Grandma, I was badly scolded for my ignorance in eating this sacred shellfish.

4.2　日の出に祈る――――――――――――――― Praying for the rising sun

若夏のころの**あが゜いさ‘てぃ**（東崎）の情景です。**あが゜い　てぃだん　んかいぬ　うか゜み**といって、日の出を迎えて祈ります。夕日とは違う強い光り方、輝きをみせます。

けれども、一日は、日が昇る前の、暗いうちから始まっています。まだ布団からでない時に、体をのびのびさせたりしたあと、耳たぶも伸ばします。よくよく伸ばして「小さい音でも、よいことを聞き漏らさず、悪いことも聞き漏らさないようにさせてください」と祈ります。夜の内に生れたいい音を、右手でつまんで集めて、前に伸ばした左手の手のひらに載せていく。親指人差し指中指の３本でまずつまみます。指で砂粒をつまむのと同じ形でまず小さな音を拾います。それから、蚕の糸とりをするように、人差し指でぐるぐるして、手のひらにぬぐいます。次は５本の指でつかんで、大きな音を広げた指に絡めるようにおいていきます。これらを、耳に入れるときは、手のひらを丸くくぼませて耳に入れます。右の耳の場合は、耳をもっていきます。このあと、**たてぃかみる**（うやうやしく奉る）ことをしてから耳にいただきます。こうしていただけばまた良い音が生まれてくるし、いただかなければ、減っていくのです。お年寄りは、自分の耳ばかりでなく、周りの小道具にも音をいただかせていました。それが終わったら、畳を二度ぽんぽんとたたいて、**にらがなち**（地の神々）**よお**　といい、大地に向かって、今日一日を始めるご挨拶とします。

なんぬはなうか゜み（波の花おがみ）と言って、毎朝のお祈りでは、海の見えるところで**なんぬはな**（波の白い泡）を拝みます。**なんぬはな**の様子を見れば、人は天気の予測など、いろいろなことを知ることができます。

わたしを懐に入れた、元気なころのじいちゃんは、祖納の港から船が出ていく時に、きっと見送りに行きました。よく目をこらしていて、出港する船から、ネズミでもゴキブリでも、なにかが飛び降りないかを見極めます。もしも飛び降りるようだったら、それはその船が沈む兆し。大声でその船を呼び戻さないといけません。

夕日には、**いり　てぃだんば　うか゜まり　ひりぃ　ふがらたぬぅ**（夕日を拝ませていただいてありがとうございます)」と祈ります。夜には夜の祈りがあり、朝から晩まで、毎日があらゆるものへの感謝と祈りに埋め尽くされた日々を、わたしは、じいちゃん、ばあちゃんとともに送ってきたのでした。

原題：アンカ゜イティダン　ンカイ　　2019年9月、21x30cm、画用紙、色鉛筆・水彩

Praying for the rising sun: Morning prayer for the rising sun (***angaitidan***). By the time the sun (***Tidaganachi***) rose, I had already finished several rituals and prayers to welcome the arrival of a new day. Purifying my soul and body is needed to chase away evil spirits that may have entered me when I was asleep. Elders usually attended the morning admiration and evening farewell prayers for the setting sun (***iritidan***).

4.3　月に呼びかける ―――――――――――――― Talking to the moon

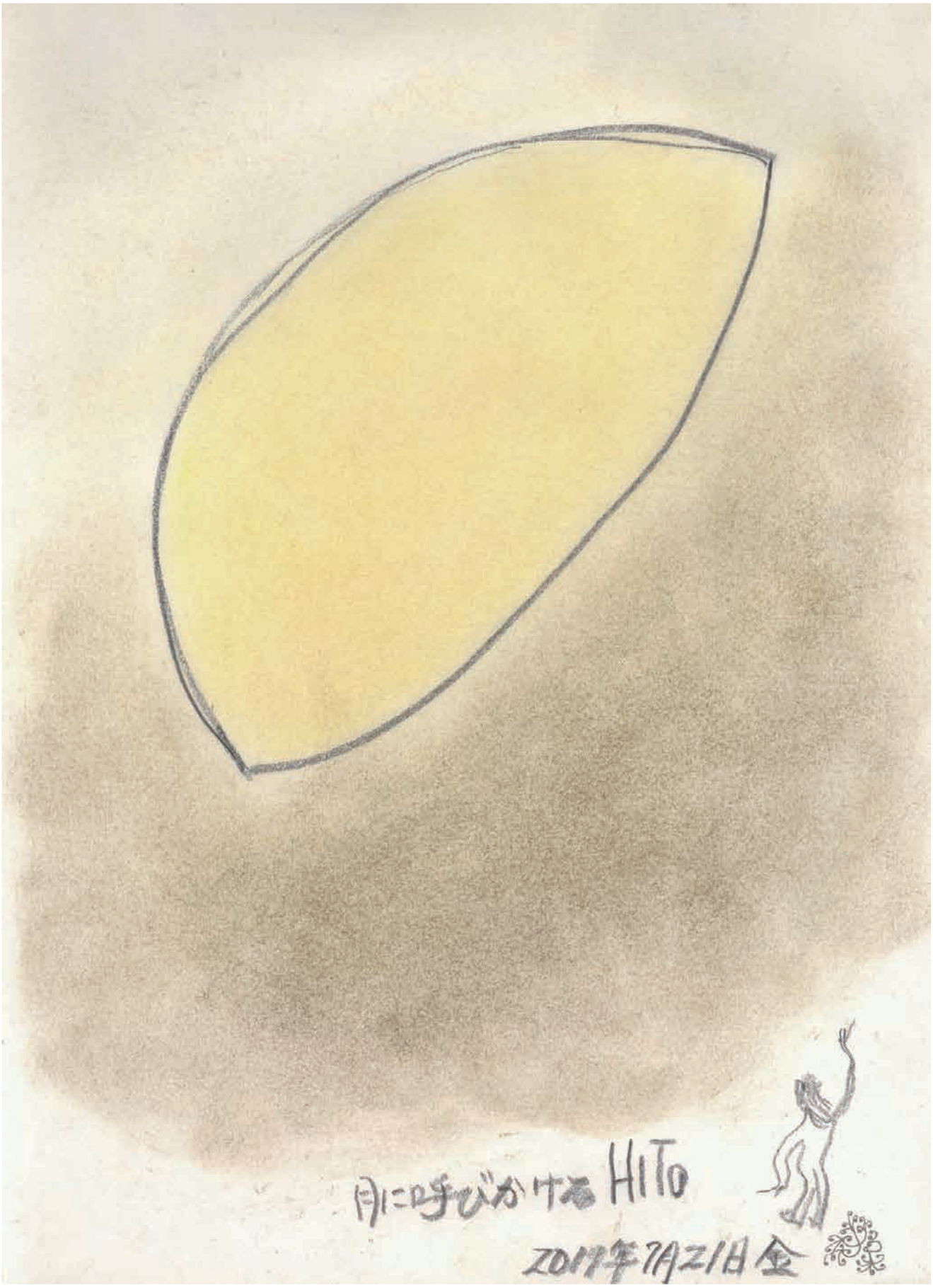
月に呼びかけるHITO。月の光をあびながら月に呼びかけています。月に歌ったり話したりする習慣は今はもうないようですが、わたしはどこで暮らしてもあまり変わりません。寒いとか、雨ばかりのとき以外は、よくやっています。

うとぅんとぅがなち（月の光様）がないと夜は困るでしょう。月の光の存在感は大きいものです。することがたくさんあって、畑仕事が残ってしまった時、月明かりの中で畑仕事をすることがあります。夜は仕事をしたら、ほんとうはダメなんだけど、例外がありました。こういう条件の人は許されるのです。例えば、伝説の**どぅゆぬはな**（百合の花）の精に恋した若者の場合。この人は父親がなく、たくさんの兄弟のいちばん上だから、昼を夜につないで働くけど、それでも間に合いません。また、家に年寄りをかかえていて昼間は年寄りの世話で、夜しか畑仕事ができないとか、近々舟に乗ってどこかへでかけ、しばらくは帰ってこれないという予定の人。こういう人たちは神様に許されて、夜働くことができるのです。

そのときには、こんなふうに祈ります。1 まず太陽の神に。あなたのいらっしゃるときにするはずの仕事をさせてもらうのでごめんなさい。2 畑のまわりのみなさん、周辺にいる木々とかみんなに。静かな時にがさがさ騒いでごめんなさいね。3 畑そのものに。静かに眠っている夜中なのに足を入れて騒がしてごめんなさい。4 月と月の光のそれぞれにおねがい。これから仕事をするのを許してください。

また、夜寝ないで徹夜してしまうことがあったら、**どぅあんぬみ**（闇）に対してお詫びをしなければなりません。「闇と明るい世界の区別をせずずっと起きていました、ごめんなさい」といって、最敬礼をします。そして「これから訪れる明るい世界への通せんぼをしないでください」とお願いします。与那国島では、**‘とぅむてぃぬい**（朝食）の前に、明るくなるころに少量の食べ物をいただきますが、それを**ひり**と呼んでいます。**ひり**を食べるのは、昨日に感謝し、あらたな今日との区別をつけるためだと言われています。

人間の月光浴と同じように、**し‘てぃ**（節祭）に、**ちち**（獅子）は3日間働くのでその前の夜、旧暦の8月15日の夜に**うとぅんとぅあんしみ**（月の光浴びせ）をします。東から月が上がってくると、獅子の毛の中にくまなく月光をいれます。手で毛をほぐして月光がいきわたるようにします。こうすることで獅子は力を得て3日間の働きがしっかりできるようになります。



原題：月によびかけるＨＩＴＯ　　2019 年 7 月、34x25㎝、画用紙、鉛筆・クレヨン

Talking to the moon: The moon (***'Titinganachi***) is probably more important for us than the sun itself. It sends us benediction, purification, and health. Here, I drew a tiny human being hailing the great moon with sincere thanks. Friendship between different peoples can be strengthened if partners make their promises in the moonlight (***Utuntuganachi***). Grandpa brought me to the beach to bathe in the moonlight on the 13th, 14th, 15th, and 16th nights of every month in the lunar calendar to make me healthier. I still hear his voice during a full moon.

4.4　海辺の鎮魂 ―――――――――――――― A requiem on the seashore

海で亡くなった人のことをおもって、長い長い**がぁーり**（鎮魂の叫び）をしています。この**がぁーり**に同席した全員は心をひとつにして、海をさまよう魂にお祈りをしました。わたしが 19 歳だった 1973 年のできごとです。

わたしの大おばにあたる、**たまんく**という女性がいました。**たまんく**は体が不自由でしたが、兄弟を霊的に守る**ぶないぬかん**（姉妹神）の役割をはたしていました。ある日のこと、与那国島と西表島の間の海が荒れて、**とぅーがなちぬたきり**（海の神のたぎり）という状態になりました。漁に出ていた弟の舟が沈みそうになっているのを、姉の守護の力で救おうと、祈りながら、弟の舟の見えないもやい綱をたぐりよせている**たまんく**。その姿を変に思った人が通りがかって、**たまんく**の手をパンとたたきました。そのとたん、必死に助けようとしていた祈りが途切れ、**たまんく**が祈りの中で握りしめていたが綱が手から離れてしまいました。**たまんく**は泣き叫び、「**かまよぉ、かまよぉ**」と弟の**ちまな**（名前）を呼び続けました。

兄嫁の**なさ**は、哀しみと怒りに荒れ狂う**たまんく**を背負って、近くの**しきはま**に行きました。浜で機嫌を治そうとしたのです。いやいやをしたままの**たまんく**に貝を拾ってはひとつひとつ見せたりしました。二人は長くこの浜にいたのですが、そこには**かぶ**と呼ばれるアマサギが群れで休んでいました。**なさ**はアマサギたちに**たまんく**の心を鎮めてくれるように頼みました。アマサギたちは**たまんく**を囲み、クォカクォカと鳴いて機嫌をなおしてくれました。**なさ**はそれ以来アマサギを見ると手を合わせるようになりました。

海で遭難した弟の**かま**にいのちを救うことができなかったことをあやまり、**とぅーがなち**（海の神様）に、一度はお願いしたことが中途半端になってしまったことを詫びなければという思いを残したまま、**たまんく**は、戦争中に亡くなりました。

ところが、**たまんく**と**なさ**の両方の**ちまな**（島名）を受け継ぐわたしに、昔亡くなった**たまんく**の嘆きと涙がいつも押し寄せてくるのでした。そこで、**かま**の**ちまな**を受け継いだ弟が島の外から帰ってきたのをチャンスに、つながりのある皆が心をひとつにして、**かま**が遭難した西表島方面の海に向かい、**あが゜いさ‘てぃ**（東崎）から**たまんく**の嘆きを**がぁーり**で伝えたのでした。

たまんくの哀しみは、この絵に描かれている**がぁーり**でようやくおだやかになり、**かま**に抱かれた**たまんく**は、静かに眠りにつくことができたのです。

原題：長い長いガアーリ　　2015年9月、21x30cm、画用紙、色鉛筆・水彩

A requiem on the seashore: I was 19 years old when I organized a prayer for one of our relatives. He was killed in an accident on the sea, and we needed a special prayer to calm his spirit wandering in the ocean. My yells were longer and louder than ordinary memorial prayers to encourage the spirit of the deceased to navigate directly to another world, ascend to heaven, and return to us someday riding on dragonflies and moths.

4.5　それでも生きたい ―――――――――――――― Still wishing to live

ひもじくて、瞳かすみ、手足はかじかみ、それでもわたしは生きていたい。どんなに苦しくて悲しくても、歌って踊って、手足を伸ばしてのびやかに、おなかが切れるほど笑ってすごそう。これは、両親への感謝の歌であり、自分たちの伝承を伝えることを暴力で抑えつけられ、固有の言語さえ奪われてきた、わたしを含む、たくさんの**むぬんな**たち（物言わぬ民）への応援歌です。最後の**とぅゆまりひり**は「名声が高まりますよう」という**どぅなんむぬい**です。

父と母のじゅもんムヌンナ

ムヌンナ ムヌンナ ムヌンナ は 優しい調べ / ムヌンナ ムヌンナ ムヌンナ は まほうのことば / ムヌンナ ムヌンナ ムヌンナ は 平和の標 / ムヌンナ ムヌンナ ムヌンナ は わたしのいみな / ムヌンナ ムヌンナ ムヌンナ と きょうもひびく / ばあちゃんの声 / じいちゃんの声 / 涙まじりの / かあちゃんの声 / と / とうちゃんの声 / ムヌンナ ムヌンナ ムヌンナ は 平和の行進 / いま どんちょうは あいた（あがった）/ ムヌンナが叫ぶ / ムヌンナがうたう / ムヌンナは いま ときはなたれ / 大空を舞ふ 風のように / ムヌンナは 北の寒空で ときはなたれた心を 広げて舞いつづける / 夜明け前の大空を 雪降りだす大空を / 深夜の凍てつく 北の大空に / ムヌンナが おどる / ムヌンナが うたう / ムヌンナは 南からきたのよ / ムヌンナの 吐息は 星の彼方へと 旅立つ今 / ムヌンナよ なけ / ムヌンナよ 叫べ / ムヌンナよ 両手を広げて うたうんだ / 世界に向かってうたうんだ たちあがれ ムヌンナ こわがるな ムヌンナ / まわりのみなさんといっしょに うたい おどる ムヌンナの調べ / 人が人をあやめない日を願い / 枯れるな水脈とうたい / ありがたい神様方と おんなじぐらい まわりにいる / いてほしくない マヌムヌには / やさしく やさしく向き合えば / ムヌンナの日々が むくわれる / 痛かった日 / 辛かった日 / 苦しかった日 / むなしかった日 ‥‥‥ / 全てが いま むくわれる / 潮時というものか？ / ムヌンナよ 死ぬ日まで / うたうんだ / イヤイヤ 死んでも うたいなさい / アフリカのムラから 世界に向かって うたうんだ / チチカカ湖のほとりから / ネパールのムラから / ポーランドの林の中から / たけしろうさんの部屋から / ‥‥‥ / ‥‥‥ / ‥‥‥ / ‥‥‥ / ‥‥‥ / ダッタンのムラから ‥‥‥ / たくさんの ムヌンナが おどりだす / ムヌンナの群は 今 / とぅゆまりひり とぅゆまりひりよぉ ひいりひりひり / たばらりたる たばらりたる / ゥオーストゥイ タバラリヒリィ〜〜 ヒリヒリヒリ〜 /

原題：HITO　　2017年7月、35x24cm、画用紙、水彩・墨

Still wishing to live: A self portrait. This creature, hungry and shivering, has not yet lost its will to live. When Grandma passed away, I found that very few people followed her way of life. I was sometimes regarded as odd, or even mad, by the islanders for living as a future ***Mutu'kahamai***. Off the island, I encountered discrimination. At the age of 33, I finally returned to my island and opened a textile studio with clothes made from natural materials from the island.

4.6　春への感謝 ―――――――――――――――― Spring thanksgiving

この絵の女は、春を呼んで木に向かって喜びの歌をうたっているところです。木はすでに芽吹いています、春が来てくれたことへの感謝やお願いの歌があたりにあふれています。

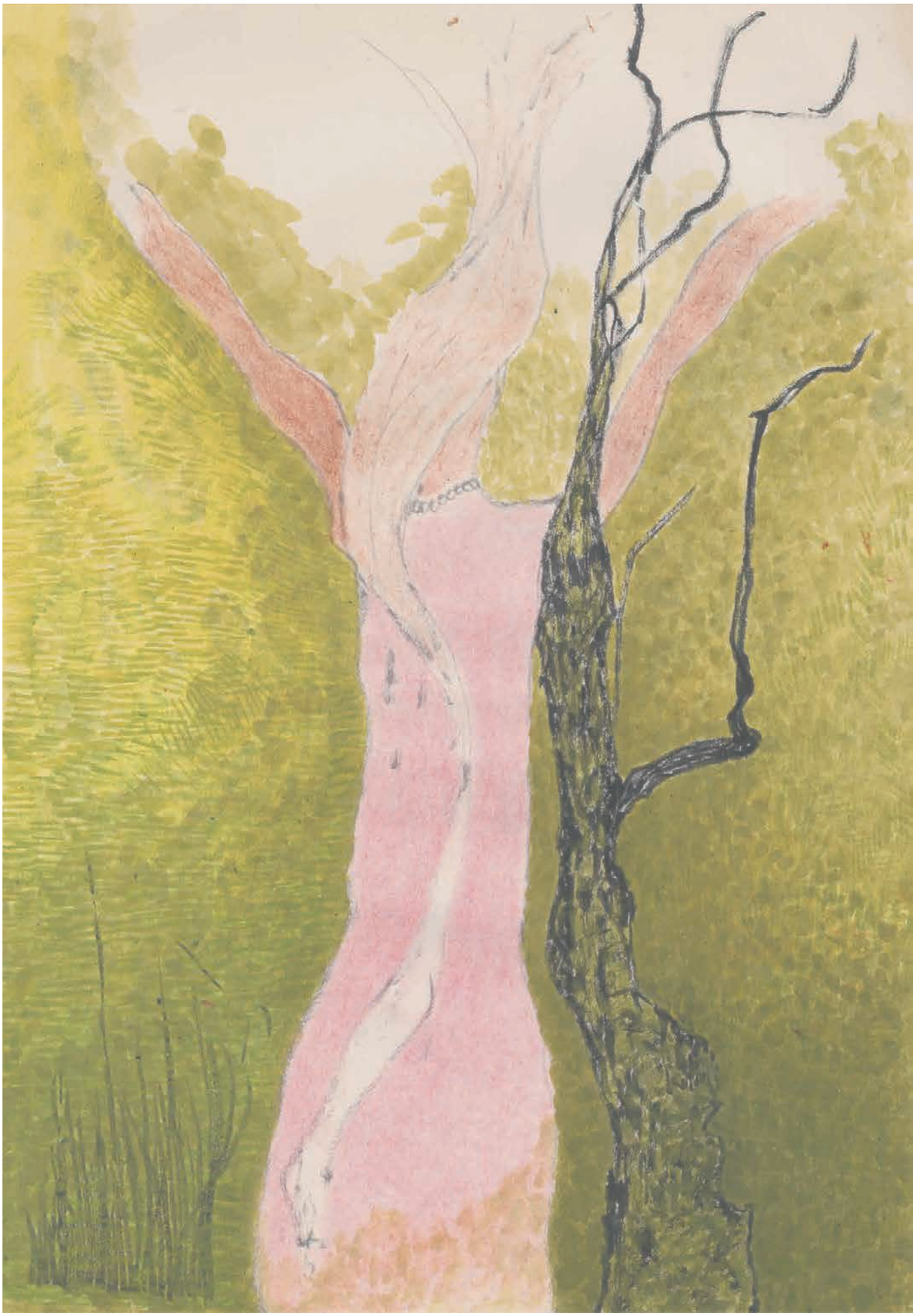
春のことを**うるむ**といいます。**うりむ**、**うりでぃみ**ともいいます。春風は、**うるむかでぃ**、**うりみかでぃ**です。

1～3月頃によく降り、草木の成長をうながす**きむやあみ**（霧雨）がくると、**きぃぬはんにか゜い**（木の葉祈願）があります。**どぅわい**（お祝い）の後に行なわれる祈願祭で、野の草木の芽吹きを喜び、**きぃぬはん　‘つぁぬはん　しゃにぃしゃにぃ**（木の葉も　草の葉も　よろこばしい）と祈ります。気の合う者同士で行なわれ、場所は決まっていませんが、野山で盛大にやっていました。

田畑の祈願もあります。**すらがぶ　にか゜い**（植物の先端＝大きな　願い）と言って、田畑の作物が豊かに育つように親戚や**はたぎどぅない**（田畑が近い親しい者同士）で集いが行なわれ、元来は**だま**（御嶽）で旧九月九日に行う人の**どぅばだにか゜い**（胴肌願い、健康祈願）も加えて行います。場所はいくつかの田畑の中から、毎年どこの誰の田畑で行なうかを相談のうえ決めます。

田の稲の発芽を願う大きな祭り**うるむきんだい**も行われます。その願いの言葉は、例文として1.3の月光浴のところで紹介しました。その例文にあるように、**にか゜い**の出だしからいきなり、すべての神々に**にか゜い**（祈願）するスケールの大きな**うーす‘とぅい**です。**んにまい**（稲）の発芽を願う祈願で、田畑の実りがにぎわい、華々しい秋の豊作につながることを願う最初の祈願で、万一これを欠かすとたいへんなことになります。誰もがひもじくならないように祈る大切な祈願で、太鼓をたたいておこないます。

誰もが飢えないようにするために、人のいのちを支える畑のものには、「正しい盗み方」と「正しい盗まれ方」があります。正しい盗み方は、その畑全体の成長に悪い影響がないように、遠慮しながら、あちこちから少しずついただくこと。そして正しい盗まれ方は、自分の畑に出かけてみたら、誰かがあなたの畑のものをとっていたとしましょう。その時は、面とむかって叱ることはできません。呟払いとか大声で歌をうたいながら近づくとかして、相手に持主がきたことを気づかせるようにします。これは、どんなに貧しい境遇にある人でも、その人を飢えて死なせるようなことをしては絶対にいけないということを教える、すばらしい与那国島の知恵です。



原題：春を呼んでうたう　　2019年、35x24cm、画用紙、水彩

Spring thanksgiving: A goddess singing to a tree to invite the coming of spring. During the spring, I celebrate the growing leaves of herbs and trees with my companion animals.

4.7　井戸と天女 ―――――― A heavenly maiden indicating a source

祖納の東村に古い井戸があります。明治生まれの人の中にはこの井戸を拝む者もいました。

島が長い日照りに苦しんでいた時の話。雀たちはぽとぽとと落ちて死に、**ばんでぃみん**（上向きに吹き出る水）も枯れて、**かーら**（川）には流れる水がほんのわずかあるだけでした。この長い日照りで死んでいく者もいて、**むらぬうや**（村の親）は毎日天を仰ぎ地に伏して雨を降らせてくれと祈りつづけました。

そんな日々、ある家のおばあさんが「天から使いの者を行かせるから、その者の言う通りに井戸を掘りなさい」という夢を見ました。おじいさんに話すと、「これはありがたい。道具を揃えておこう」と言って井戸を掘るための道具をかき集め、むらの人々もまちわびました。ある朝、おばあさんは、美しい声で呼びかけられました。庭の片隅に美しい女の人が立って「わたしは今日、太陽の光に乗ってここにきました。この場所を四角い形に掘ってごらんなさい。きっとおいしい水がたくさん湧きでている水の道に届きます。島のみんなにおいしい水をのませなさい。雨はしばらく降りません。でも、この水の道は枯れることはなく、待っていればきっと雨はふります。」そう言うと、横の樹にすうっとはいっていきました。おじいさんは近所の人々を集めて、女の人が示した場所を言われた通り四角い切り口をつけて掘りすすめると、水の道に届きおいしい水があふれ出ました。この井戸のおかげで、その日から水に苦しむことはなくなりました。それからは、**かーぬ　ぬちぬ　どぅわい**（井戸の主の祝い）をしていましたが、いつのまにかやらなくなりました。

祖納から少しはずれて北東側にひとつの井戸があります。それが**ながどぅぬかー**です。その一帯は**くちむら**（後村）と呼ばれています。**くちむら**には井戸が少なく、その**ながどぅぬかー**は共同で使用されていました。田畑の帰りに手足を洗い、牛馬の水あそびに、また女たちは洗濯、炊事道具の洗い、芋洗い、などに、皆それぞれが上から下へと洗い場を守って使いました。

また、井戸から汲んだ溜り水と、流れる水では、使い方が違っていました。流れる水に漬けておくものは、種もみと、ゆっくりすすぎたい布や主に竹製の道具でした。次のようにいうお年寄りの言葉が耳に残っています。

ながりみん	**あらぬんがし**	**‘きぃ**	**うとぅがにぬんどぅぉ**
流れ水	でないと	漬けて	おけないよ

原題：降りた天女　　2022 年 3 月、30x21cm、画用紙、色鉛筆・水彩

A heavenly maiden indicating a source: Learning oral traditions was an important part of the training for a ***Mutu'kahamai***. Long ago, rain stopped falling on the island for four winters. Islanders, young and old, died of hunger and thirst. The ***Mutu'kahamai*** of that time advised people to join their spirits and hands together to face the divine trial. When they all joined in the prayer for rain, a goddess emerged with the rays of sunshine and indicated the spot to dig a well. They were all saved by the water from this new well, and they prayed for the goddess, who went into a nearby tree.

4.8　はらむ ―――――――――――――――――――― Becoming pregnant

与那国島の人たちは、長い間、**むとぅ‘かはまい**さんに、種から芽が出たけれどもう播いていいですか？　代掻きや田植えのとき安心して進めていいですか？　といったことを相談してきました。ですが人が**むとぅ‘かはまい**に、いろいろの相談ができた時代は終わってしまいました。せめて人の悩みを紙の上の**むとぅ‘かはまい**さんにお話しておこうと思ってこの絵を描きました。

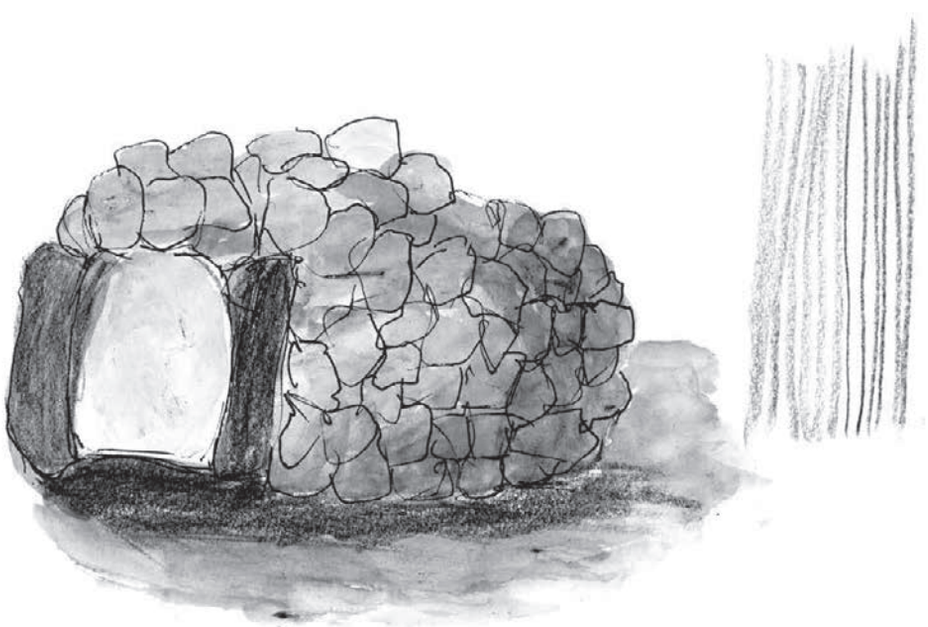
ちかごろ与那国島からの電話や手紙は「島は枯れている」と言ってきます。

きぃぬ	**ないん**	**さがびでぃ**	**ぷぁびてぃ**	**とぅん**	**うむつぁみぬん**
木の	実も	少なくて	渋くて	ぜんぜん	おもしろくない、

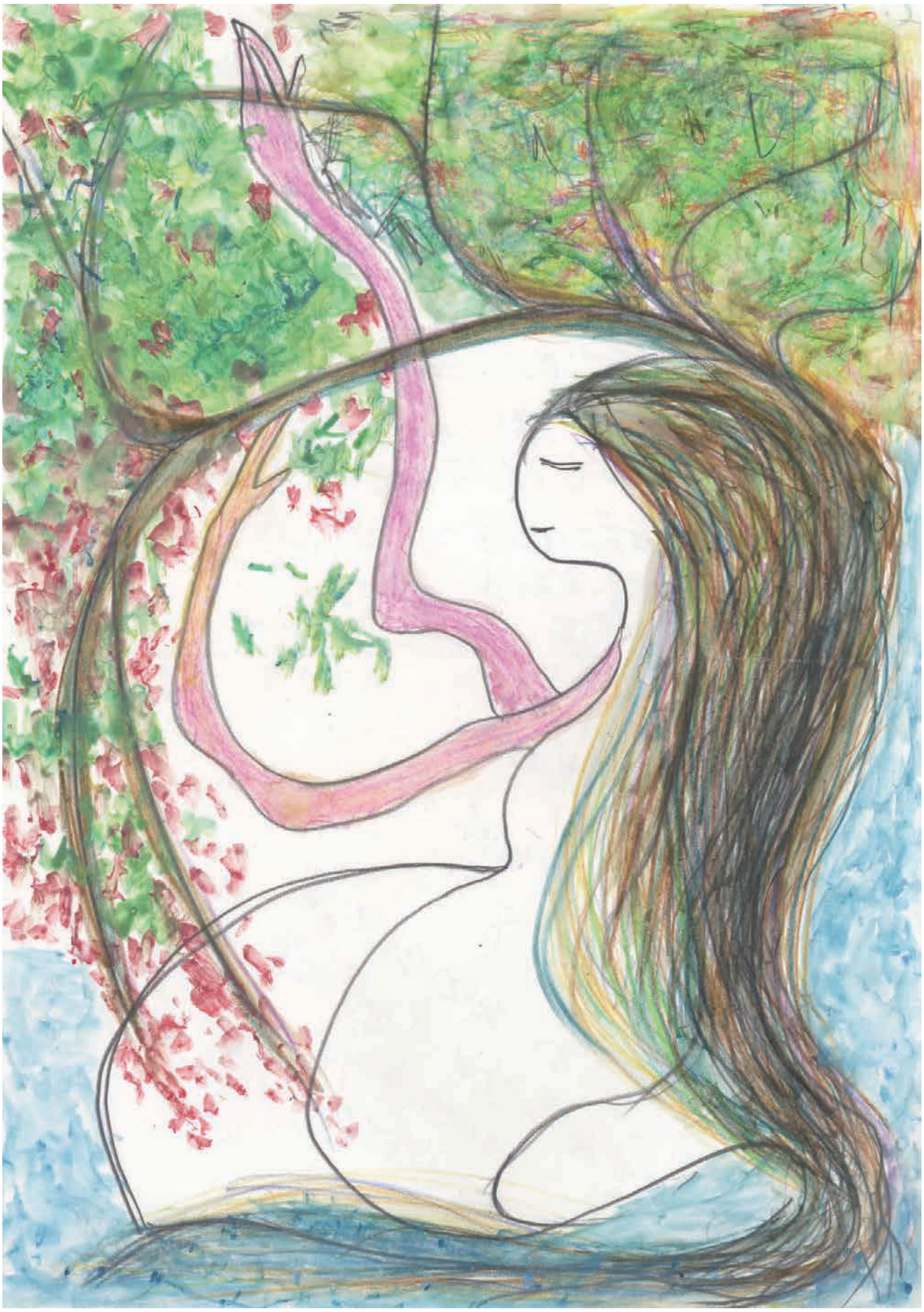
と幾人もが同じことを言います。だから近ごろはこの「はらむ」を描いています。**むとぅ‘かはまい**さんは、いつもわたしたちを見守ってくれてるような気がするのです。

はるぬはまい（畑の食べ物の祈り）ということを、冬にします。いろいろの食べ物を与えてくれた畑にお礼として感謝の気持ちをこめて歌をうたいます。これをする人がどんどんいなくなって、そのために地力が衰えているんじゃないかな、とわたしは思います。**はまい**は、食べ物、飯米という意味です。

風葬の時代の**むとぅ‘かはまいだや**（岩屋）には父が連れて行ってくれました。もっと新しい時代の**むとぅ‘かはまい**の墓もありました。



むとぅ‘かはまいの墓　Tomb of *Mutu‘kahamai*



原題：はらむ　　2021年2月、30x21㎝、ケント紙、色鉛筆・水彩

Becoming pregnant: ***Mutu'kahamai*** in the form of a pregnant goddess. I drew this because we no longer have a ***Mutu'kahamai*** to ask for guidance regarding the seasons of agricultural activities. The lives of plants and animals, including humans, grow in her. I could not become a real ***Mutu'kahamai***, so I left the island. However, I do not regret it, because the ground deities, ***Niraganachi***, spread themselves everywhere on the Earth. I can sing, dance, draw pictures, and pray for all the lives around me.

4.9　ぬ‘てぃぬかーら ―――――――――――――― A source of lives

この絵は、よろこびの涙が大地をうるおし、うたう一声は木の美となり、草木と一体化したHITOは、**ぬ‘てぃぬかーら**（いのちの源）が枯れないようにいつも歌ったり**にらがなち**にいろいろなことをお話したりしています。「はらむ」の絵でおなかに入ったいのちたちが、次々に飛び出して島はにぎやかなこと。

思いやり、いつくしみ、お世話、そんな語感をみんな込めた、**うむいとぅらん**という言葉があります。**うむい**（思い）を届けるというような意味です。人間同士にもつかうけれど、赤ん坊の時から家で育てた**ちんちら‘てぃ**（ジャコウネズミ）は、**にら**に帰って今ごろはどうしているだろう、そろそろ家庭をもったかな、と家族で会話するような時にも使います。

これらの生き物は、お互いに食べたり食べられたりしながら共存しています。ですから、食べ物のことを**ぬ‘てぃちでぃむぬ**（いのち継ぐもの）とも呼んで、敬いの祈りをささげます。人間だけを特別扱いしたりしません。

まりちまや　んまんまんでぃ　んたん‘てぃん　あがとぅちぬ　’とぅんでぃあ（生まれ島は　どこどこと　いっても　同じ　人なんだよ）。出身で差別はしません。そんな明治生まれの先輩方の教えを、**ぬ‘てぃぬかーらぬ たぎだぎ うーす‘とぅい**（いのち湧く源の　みなさんへの　お祈り）として捧げています。

うまれた所が　ちがうだけ / うまれた時が　ちがうだけ / うまれた形が　ちがうだけ / 育ち方が　ちがうだけ / すごし方が　ちがうだけ / 好みが　ちがうだけ / ただ　それだけのこと / なのにどうしても / ちがう　相手をうけいれられない / カナシイ　ワタシタチ / こんな　あなたとわたしで　世界は / 大気圏は　まわりまわっているのよ。

うーす‘とぅいの中に**ぬ‘てぃぬかーら**が出てくる例をご紹介しましょう。

ぬ‘てぃぬかーらや　たーん　くーん　うむつぁる　むちまさ
いのちのみなもと（与那国島）は　誰も　彼もが　うれしい　睦まじさ
ぬ‘てぃぬかーらや　ちなさる　むぬがら　ほおてぃんきん　あちぐ　あちぐ
いのちのみなもとは　小さな　ものから　巨大なのも　熱く　熱く
むちまさ　むちまさ　むちまさ　よー
睦まじさ　睦まじさ　睦まじさ　よー

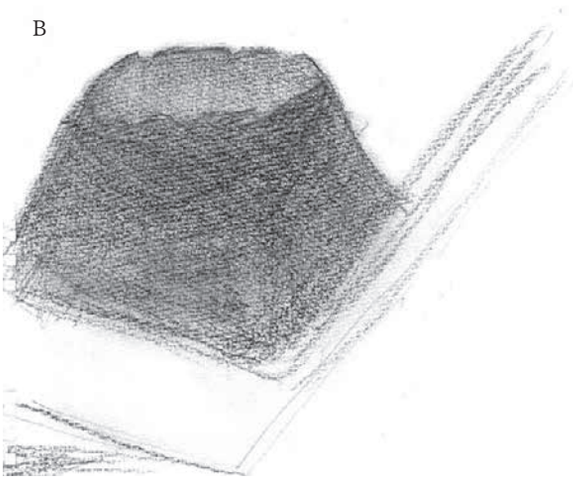
原題：ヌツティヌカアラのひとつ　　2021年2月、30x21cm、ケント紙、色鉛筆・アクリル水彩

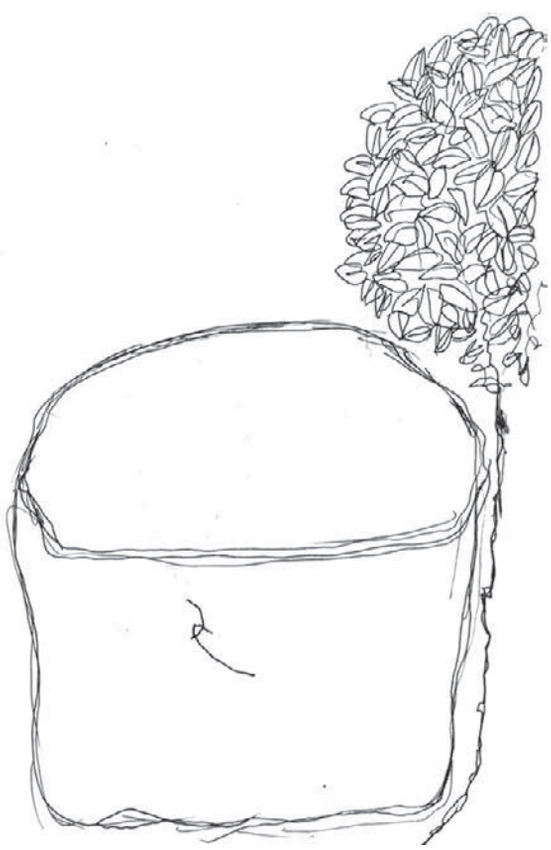
A source of lives: A source of lives, our Yonaguni Island. Every kind of plant and animal grows in the womb of a goddess that governs and provides benediction to the island. We all belong to a family born to this same mother. We may be different, but we will join ourselves together.

A

第５章　めぐる水への祈り

B





C

A 雨乞い４日目の女性。A woman in her fourth day of prayers for rainfall.

B 縄で擦れて石がすり減った共同井戸。 A public well with its stones ground by the bucket rope.

C 大きな石の水溜め**いちたらい**は財産だった。***Ichitarai***, big stone containers, were treasures of rich families.

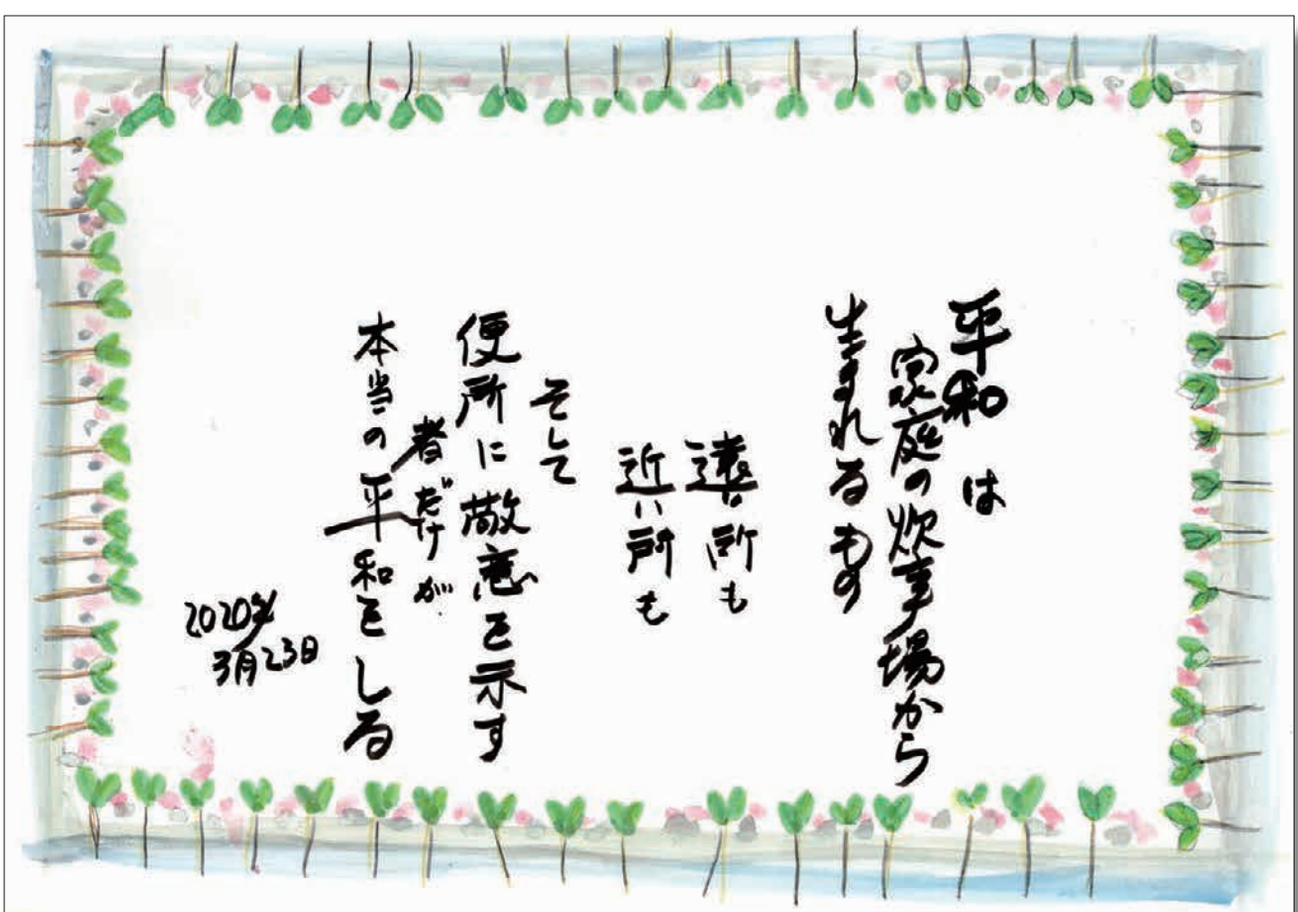
あなたが わたしの目の前に現れるのにどれほどの道程、どんな旅をしてきたのやら、わたしには知り得ないその足跡、本当にありがたい事です。そしてまわりに潤いを与えるあなたに、ただ頭を垂れるのみです。

気軽に粗末にできないあなた、たとえそうされても、一音の文句などわたしに投げやしない。天空から地上へ　そして、森や、林、湖や川を通り、予想もつかない長い道程を ・・・・・・。

本当におつかれさま。そしてありがとう。あなた。

Chapter 5. Prayers for Water Cycles

We are ignorant of your long, unfathomable journey toward us. I am only grateful for you, giving moisture to all your surroundings. Our precious water: even if you are not treated with due respect, you never utter a word of complaint. Unimaginable is your journey from the sky to the ground, through the forest, woods, lakes, and rivers. We thank you for your service, our precious water.



Peace comes only through kitchens and toilets.

5.1　魔除けの石 ―――――――――――――― A stone to ward off evil

今の人は、石敢当（いしがんとう）という言葉はご存知でも、与那国ではもともと、**‘とぅはんしいちぶぐ**、つまり「人外しの石」と呼んでいたことはご存知でしょうか。**‘とぅはんしいちぶぐ**をなぜ立てるかというと、人は歩く時、普通は目に見えませんが、つま先から**まぬむぬ**（魔物）、良からぬものをポンポン出しています。また、道端でごろごろしている**まぬむぬ**もあって、これを人はつま先でよけたり蹴飛ばしたりしながら歩いています。それらが我が身に激突しないように石に吸わせます。道にいる魔物が、人のつま先にどんどん蹴飛ばされて、前の方に行くと、最後には、道が突き当る所にある屋敷に入ってくることになります。こういう行き止まりの家は**まぬむぬ**が入りやすいので、**‘とぅはんしいちぶぐ**を置いています。こういうわけだから、人を足蹴にすることは、その人を魔物扱いしているということにもなって、とてもいけないこととされているのです。昔は、客商売の人は、良い物も悪い物もどんどん入っていらっしゃいという意味で、石敢当を立てませんでしたが、今は普通の家と同じように立てるようになってきました。

‘とぅはんしいちぶぐは、石がひとつではなく５つもある場所もあり、独立していて裏側に香炉があったり、シャコ貝の小さなのがおいてあったりします。この言葉は、大正生まれの人までは使われていて、普通に話題にのぼる言葉でした。しかし石敢当という言葉が、あとで島に入ってきて、石にも刻まれるようになると、**‘とぅはんしいちぶぐ**という言葉は次第に使わなくなりました。

まぬむぬの姿は、普通は見えませんが、この絵は、わたしの子どもが６歳の時、本人が希望して、芸能の中でその扮装をした時のものです。

まぬむぬ　An image of devil

原題：トゥハンシイチブグ　　2020年5月、30x21㎝、ケント紙、色鉛筆

A stone to ward off evil: Evil spirits, phantoms, and ghosts may enter human bodies when we are asleep. They may come out of your toes when you walk, and they gather at the ends of pathways. People place stones of protection at such places to prevent these evils from coming in. They were called "tuhanshi ichibugu," meaning "stones to remove (evils from) humans."

5.2　**にらがなち**とその成長 ―――――― Growth of ground deities

にらは地底のことです。お年寄りの会話の中にも、**‘か**（神女）のみなさんの祈りの言葉のなかにも、よく登場しました。**にら**に敬称の**かなち**をつけて**にらがなち**とお呼びすることも普通でした。金色に実った田んぼを見れば、決まって**うまぬ　にらや　かないぶんどぉ**（ここのにらはかなっておるぞ）、**うまん　にらや　でぎどぅ　ぶんさい**（ここもにらはすばらしくできておるんだなぁ）とほめるものでした。そして、昔は牛を、わたしの時代には水牛を使って踏んで固めた田の底から水が抜けると、こう言いました。**にらがらどぅ　たーぬ　みんや　んぐりひゅるんやぁ**（にらからぞ 田の水はすべって行ったんだろうなぁ）。

むとぅ‘かはまいになる訓練を受けていた幼いわたしは、よく与那国島のあちこちの山の中や、通院で行った石垣島の山の中に、何時間もひとりっきりで座らされていました。その時に決まって**くまん　にらや　かないぶんどぉ**（ここも　にらはかなっているよ）とばあちゃんたちはいうのでした。

旧暦の三月三日がすぎると、お年寄り達が野原を歩く行事がありました。人だけなく猫や犬、鶏たちもついてくる行列です。道々、芽吹いている草や木をほめたり、愛でたりしながらゆっくりにぎやかに野道を行きます。目的の所までくると、一人のお年寄りが、**うまぬかたに　あるはでぃぇ　にらや。くぁいする　にら　みきんだげぇ**（ここらあたりに　あるはずねぇ　にらは。丈夫な　にらを　見つけようや）と声をあげます。すると、みんなして地面をぽんぽんと手でたたいてみたりしながら、**にらよ～　にらがなちよ～　ひんとぅきぃわいひり**（にらよ～、にらがなちよ～、お返事してください）と頼みます。そうこうしているうちに必ず、誰かが、**うまだ　あんさい**（ここにあったぞ）と言います。わたしは、この行事のお世話でいつもてんてこ舞いでしたが、これが、4.6 でちょっとご紹介した、**きぃぬはん‘つぁぬはん　しゃにぃしゃにぃぬだい**（木の葉も草の葉もよろこばしいお祝い）のもともとの姿でした。左の写真は、すずめの巣のようだという**にら**を枠織りで作ってみたものです。

枠織のにらがなち　An image of ground deities, ***Niraganachi***, expressed by frame weaving.

A

B

C

D

原題：ニラガナチの成長　（刺繍Ａ－Ｄ）

Growth of ground deities: Ground deities, ***Niraganachi***, expressed in the form of embroidery. Four stages of their growth are expressed according to what I perceived on the island. The web is thickest in the center of the island, and it will become thinner near the ocean. If the web grows thicker than 15 centimeters, the elders regarded it as being sufficiently grown. Where the web becomes thin and fragmented, plants will not grow well, and agriculture will fail.

5.3　海の底の **にらがなち** ―――― Ground deities under the ocean

この絵は、海の底にもある**にらがなち**を描いたものです。

ばあちゃんと石垣島に行く船の上で、西表島が近づくと、ばあちゃんはお祈りをして、わたしにも、大きな島の大きな森のすばらしい香りをかぎなさい、とすすめた上で、こういうのでした。

いりむてぃぬ　にらや　ばんた　　にらとぅ　あがとぅちどぉ
西表の　　にらは　わたしたちの　にらと　　同じだよ
どぅぬむぬぬ　にらどぉ。　にらや　うんながぬ　すぐば
同じものの　　にらだよ。　にらは　海の　　底を
あいたらしきてぃ　んまばみん　あいたらし　きぃぶんどぉ。
はしっていて　　ここにも　　はしって　　くるんだよ。

お年寄りが亡くなられるにつれて、**にら**のことを話す人も少なくなっていきましたが、この**にら**の名残りと思える子ども遊びがありました。ひとりの子どもを両手と両足を残して体全部を浜の砂に埋めます。そして、砂に埋まっている子に向かって、みんなでいろんな質問をするのです。埋められた子どもは、質問に答えて**にら**の様子を話し、ワイワイとおしゃべりします。「やぁ、**にら**はどんなんかぁ？」「ん、いいよぉ！」「どんなにいいかぁ？」「ん、そうだなぁ、ずーっとしばらくいたいさぁ。」「ダメダメ、そんなに気持ちいいなら交代せえよ。」まだ幼すぎるわたしは**にら**遊びをしてはいけないことになっていて、みんなのぞうりの番をしていました。

にらは、小さくは、自分のまわりにぐるっと腕をまわして、その範囲だけを指すこともあります。それらが、からまりあい、つながりあって大きな存在でもあります。**にら**は、たくさんあります。**にら**には境界線がなく、つながっているものです。厚さは最低でも 5 寸（15 センチ）はないといけないと言われています。これより薄い場合は、やせ細っているから、しっかりお世話してうるかしてあげなさいといわれました。**にら**が枯れたり穴があいたりせず、みずみずしくあるように、その息吹を感じながら暮らすことが、人々の願いでした。

稲刈りのあとで、田んぼの持ち主は、一握りの炒った米を天に向かって投げ上げて、次のように大きな声でよびかけ祈ります。

てぃんや　ふぎるとぅん　にらや　ふぎんな　　よぉ
天は　　穴があいても　大地は　穴があくな　よぉ

原題：海底に見るニラナガナチの存在　　2013年5月、21x30cm、画用紙、色鉛筆

Ground deities under the ocean: Ground deities, ***Niraganachi***, can be found under the ground and in the ocean. They grow by forming a complex web made of various tissue-like lines. The core of my early training as a future ***Mutu'kahamai*** consisted of feeling the existence of the ***Nira*** where they were healthy and supported a good amount of plants and animals.

5.4　神々の出会い ―――――――――――――― Encounter of the deities

与那国島のにらは少しずつ動いています。この絵は、海に向っていきおいよく走りだし、**とぅーがなち**（海の神様）と出会っている**にらがなち**（地の神様）を描いたものです。

にらは、常にまわりの海に向かって少しずつ流れています。そして集まって島の北側であれば**しきはま**から海に向かって流れ出ます。祖納の東村にあった洞窟の入り口から入って、今でも途中あちこちに口が見える長い洞窟にそって北の海辺の方に向かいます。祖納のいちばんの高台にいったん集まって、**しきはま**に着きます。**にらがなち**は、そこでは形がはっきりして平たくなって、その浜にいる大きな二枚貝が殻をぱくぱくして合図すると、海辺の洞窟を通ってポットロオン、ポットロオンと海に出ていきます。**とぅーがなち**のところへ会いに行く**にらがなち**に、**とぅーがなち**に伝えてくださいといって、いっぱいお話をします。三月三日以外にも**にらがなち**は大体年に6回海に向かうと言われていますから、その時には、お年寄りが集まってひとしきり**にらがなち**に語りかけて、祈って歌っている光景がみられました。

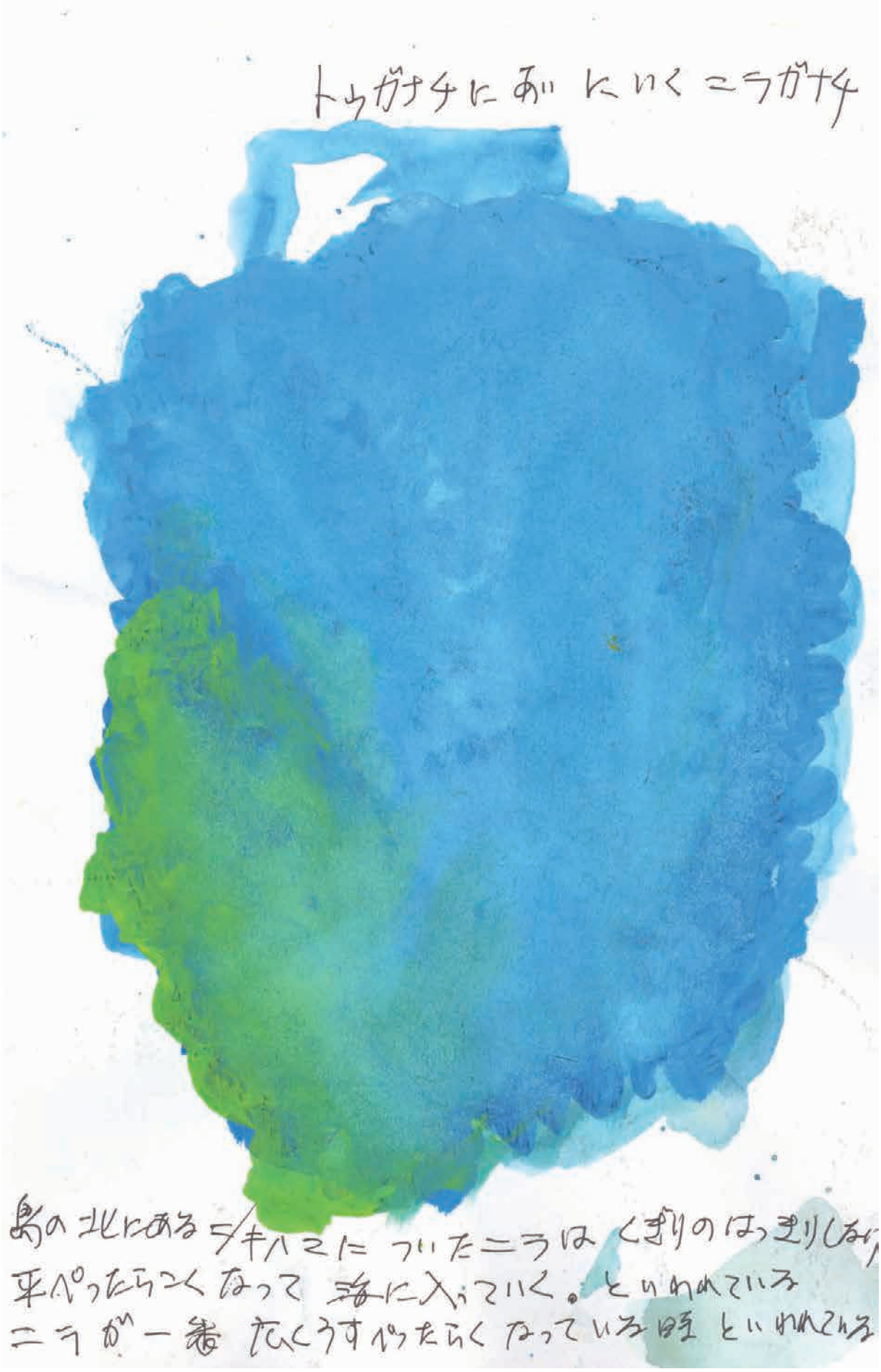
そして、**とぅーがなち**の合図と同時に、**てぃんきあん‘きるんでぃ**（天に預けること）が始まります。その時**にらがなち**も**てぃんがなち**に向っていろいろ叫びます。これを**にらがなちぬがぁり**（大地の神の叫び）といいます。それが終わると、**とぅーがなち**は平たくなって元の海原となって、うねった波が静かに動き、**にらがなち**たちが島にまっすぐ早く帰れるように 手伝ってくれます。

出会いは、**うんながぬはた‘てぃ**（海中の端）で起こっていて、太陽とは違うまばゆい輝きを見ることができるといいます。このとき海の中では美しい光景が広がり、たくさんのお花畑になって数日の間それが続くと言われています。

また、これとは別に、与那国島の**にらがなち**が大挙して西表島の**にらがなち**に会いに行くのが**あか゜いさ‘てぃ**（東崎）から見えたという人もいました。

にらがなちは、**てぃんがなち**の所にも上がっていきます。ときどきそれが感じられます。その時は、いつか戻ってくるはずだけれど、それがいつになるかはわからないので、「自分が生きているうちに戻ってくるかねぇ」などは、お年寄りたちのありふれた会話でした。

まれに、たくさんある**てぃんがなち**の一部が地上に落ちてくることもあったそうで、ばあちゃんの話では、それを人間が受け止めて**にらがなち**に送りとどけ、**とぅーがなち**と出会う時を待って、天に送り届けたということです。



原題：トゥガナチにあいにゆくニラガナチ　　製作年不明、30x21cm、画用紙、アクリル水彩

Encounter of the deities: On occasion, such as the third of March in the lunar calendar, some of the ground deities, or ***Niraganachi***, will flow out of the island in thin layers into the sea to meet with the deities of the ocean, or ***Tuuganachi***. When they meet offshore, they will be excited and overjoyed at the encounter. The elders said that they could see such encounters from afar.

5.5　魔物たちの出会い ―――――――――― Encounter of evil spirits

島から海に出る**にらがなち**たちを迎える**とぅーがなち**たちは**にらがなち**と相対して、**にらがなち**が担いできた島の**いふなむぬ・まぬむぬ・いらんむぬ・だふなむぬ**（変なもの・魔物・いらないもの・役に立たないもの）のもろもろすべてをうけとります。そして**にらがなち**と**とぅーがなち**は、力を合わせて、それらの「いやなもの」を**てぃんがなち**（天の神様）に昇らせます。

「いやなもの」は、天に上る前に海面で、出会いを喜び、まとまってぐるぐる渦を巻きます。その様子をお年寄りの話をもとに描きました。

ぐるぐるとまわるまわる、わたしとあなた、みつめあって、ほほえみあって、ぐるぐる回るうちに、わたしとあなたがひとかたまりになる。そしてぐるぐるぐるぐる回りながら、ひとひらひら、はがれて舞う、舞う・・・・・・まき散らしながら・・・・・・。

もともとこれらの「いやなもの」も人間の暮らしから生まれたものです。**すでぃ**（お清め）と言って、夜寝ている間に、体の中に忍び込む**まぬむぬ**（魔物）を、毎朝体から取り除くようにしてきました。**まぬむぬ**は、手の指先や足のつま先、髪の毛の先から出ていくので、それらを全部**にらがなち**にお願いして預けます。

長い髪を解いて、うつむきになって髪を**ぐち**（くし）や素手で梳きながら**すでぃ**をするという習慣がありました（第４章扉の上の図）。友達同士が出会って、たまたま**まぬむぬはんし**（魔物はずし）やろうか、ということになります。**すでぃきんだげぇ**（お清めやろうや）と言い合って、お祈りしながら悪いものをみんな**にらがなち**にお預けして、そのうちいつの間にか楽しい宴会になっていきます。そういうお祝いは、**にらがなちんき　とぅんきぬ　どぅわい**（にらがなちに託す祝い）といいました。こうして毎日、人間界からの悪いものをあずかって下さる**にらがなち**は、それを全部引き受けて、海に出ていってくださるのです。

てぃん（天）に昇っていった**まぬむぬ**たちは、**ふちぬかぬかた**（星のかなた）まで行って、そこで清められて、再びありがたい雨や、星の光、月の光、太陽のぬくもりとなって、島に降り注ぐのです。その時まで記憶を保っていた**まぬむぬ**は、その天からの恵みに人間たちが喜ぶと、ほほえんで解放されると考えられています。また、天に穴があく時に、その穴から天のかなたへと昇り、二度と地上には戻らないものもいると考えられてきました。

原題：ほほえみあってぐるぐるぐるぐる　　2022 年 11 月、38x27cm、画用紙、アクリル水彩

Encounter of evil spirits: These spirits, chased by amulets and protective charms, are trapped by the underground ***Niraganachi*** in the end. These spirits go off the island with the ***Niraganachi***. When these spirits meet, they smile at each other and continually move in one direction expressing the joy of the encounter. They then go upward until they arrive at heaven. They are purified there and return to the ground in the form of sunshine, moonlight, starlight, warmth of the sun, and rainfall. When people welcome them, the former evil spirits will be freed and laugh for joy.

5.6　慈雨 ―――――――――――――――――――――― A welcome shower

あみ（雨）には、たくさんの豊かな表現があります。**うぶふい**（大降り）、**ぐまあみ‘てぃ**（小雨）、**てぃだんふい**（天気雨）、**かたふい**（片降り）、**あみだらだら**（長降り雨にぬれている様子）、**ながふい**（長降り）、**あ‘たふい**（急な降り）、**あみぱらぱら**（雨ぱらぱら）などです。

たっぷりと雨がいただけると、水分は土中に浸透します。そういう**にらがなち**にまで届く雨を**でぃうりあみ**（地降雨）といって、感謝します。**でぃうり　きるたみんかぎりぇよぉ**というと、**でぃうり**するまで水をかけなさいよ、という意味で、この場合は、屋敷内の花、木、菜園にかける水をさしています。

雨が降らないときは、とても困ります。わたしは、毎年、**ちっちよ**（ウグイス）が来るのを見張っている役目でしたが、ある年は**ちっちよ**が来ても雨が降らず、前の年も雨が少なかったので、今年こそは雨が降りますようにと**あみうり**（雨乞い）の祈りがありましました。久部良に住んでいたおばあちゃんが、**あみういぬびでぃり**という田原川のところにある石の**びでぃり**（霊石）のところでお祈りをしました。**‘かぬあぶ**（神女）のみなさんの雨への願いはこんな言葉で始まります。

でぃぎらしでぃぎらし　あらぐ　　ふがらっさ
できさせできさせ　　たいへん　　ありがとうございます
てぃんがなち　にらながなち　んでぃたてぃわいひり
天の神様　　地の神様　　出で立ちおでましください

雨が降ると、一時的に**くむい**（水たまり）ができます。**くむい**には**くむいぬち**（水たまりの主）がいると考えられていて、人々は敬う日常でそのような場には一礼するならわしがありました。また、**くむい**の生き物はめったにとることはせず、よくよくの場合だけ許されていました。子どもにもそのように言い聞かせていました。肉眼で見える**くむい**にいる、あめんぼ、かえるなどの小動物は、**くむいぬち**のお使いをする者と考えられています。**くむいぬち**は、雨上がりに現れ、水たまりが干上がるとどこかへ行ってしまわれると考えられてきました。例文は、お年寄りに聞かされた言葉です。

くむいぬちんき　でぃんき　　ならいよぉ
水たまりの主に　お辞儀する　ようにしなさいよ

原題：2022 年立秋大雨　　2022 年 8 月、33x24㎝、和紙、墨

A welcome shower: Rain nourishes the ***Niraganachi***. When it rains abundantly, water is absorbed and stored under the ground.This nourishes ***Niraganachi*** and helps them grow. When we prepare paddy fields, if there is some leakage of water, we cannot expect a yield of rice. So, after cultivation with cows and then by a carabao, we shouted our prayer, "Even if the heaven is perforated, the ground should have no holes."

5.7　台風の予感 ―――――――――――――――― Predicting a typhoon

大きな台風が来ると、被害が大変ですが、逆に、来てくれないと島は困ります。台風が来ないと虫が増えて、野菜や植物たちが被害にあいます。台風なしでは、島のいのちそのものが持たないのです。ですから、毎年、春の芽生えの後、**さにてぃ**（旧三月三日）の祈願のあと、**むち　あんまさ　はらいぬにがぃ**（虫が多すぎないように払う祈願）をして、台風が来るように願います。

んぬま‘てぃ（竜巻）　*Nnuma‘ti*, a tornado

竜巻は、**んぬま‘てぃ**といいます。これは、**んぬ**（角）**ま‘てぃ**（巻く）という意味で、遠くから見る場合の呼び方です。自分自身の生活圏内で起こる場合は、**んぬ**と呼びます。

季節の流れにそって、島外から来てくださるものには、ちゃんとお迎えをしなければなりません。黄砂も、きちんとお祈りをしてお迎えをするものの一つです。例文は、台風の大切さを表したお年寄りの言葉です。

かでぃ	**‘かぬがらや**	**ぬ‘てぃ**	**むいらりぬん**
風	吹かないことには	いのち	萌えられない

原題：秋大台風ことしくるよ　　2017 年 6 月、35x25cm、画用紙、水彩

Predicting a typhoon: I drew this in June 2017, predicting a strong typhoon in autumn. As predicted, a typhoon hit Japan in September, and people were killed. Typhoons may be dangerous, but we should welcome them. We must thank and pray for everything coming from afar, like typhoons, yellow sands, or dragonflies.

「いのり」と題するこの絵は足元の水脈がしだいに枯れようとしているという与那国島からの便りを受けて描いたものです。

与那国島には、今生きている人たちが経験したことがないような、さまざまな天変地異の伝承が残っています。はるかな昔から人々の心を束ねてきた**むらぬうや**（村の親）と、季節のめぐりの中で食べつないでいけるための祈りと助言を担当する**むとぅ‘かはまい**とが協力して、さまざまな困難を乗り越えてきた経験の伝承があります。その時に、どのような知恵でそれを乗り越えてきたのかを記憶することも、幼い日からわたしが受けた**むとぅ‘かはまい**への訓練の重要な中身でした。

4年も続いたという干ばつ（4.7参照）では、多くの人々が亡くなりました。干ばつによる飢餓を**がつ**といいます。**がつにや　きぃぬ　ぬばりん　かりひぃ　とぅるむぬん　みぬたる　あてぃんがいどぅ**（飢饉の時は　木の　根っこも　枯れて採れるものも　なかった　らしいよ）、と語られています。それでも、人々は心を合わせて祈って、争いが起こることはありませんでした。島の歴史の中でこの時期だけいざこざがあったと伝えられているのは、長雨が続いた時です（2.2参照）。長いお話の中には、役人という言葉も、王様という言葉も、**どぅな**（税）という言葉も出てきませんから、琉球王の支配を受ける前の時代の伝承と思われます。人々が薪を奪いあう中で、すざましい争いが絶えなくなったのです。**むらぬうや**は知恵をしぼって、めいめいが自分で集める薪の他に、みんなで日を決めて、その日は「誰のためか誰が使うかわからない薪」を集めて積んでおくことにしました。こうして、いつ止むともわからない雨が続いていても、みんなで薪を集めて乾燥させておくようになりました。女も子どももこのときは薪を集めます。それ以来、島はふたたび穏やかな日々を迎えましたが、それには「日にちがかかった」と伝えられています。

そのほかに、**ない**（地震）があります。古風な言い方では、**どぅない**ともいいますが、さらに古くは**んに**といったことが次のことわざからわかります。

うんに　だにんどぅ　むん　どぅばがい　きぃがらや
そんなに　家庭で　喧嘩　ばかり　していると
んに　うぐしきるんどぅぉ
地震を　引き起こすよ

原題：いのり　枯れるな水脈　　2021年3月、26x18cm、ケント紙、アクリル水彩

Water cycles: Underground water cycles may constitute the ***Niraganachi***. We feel that water cycles are continuously weakening every year. This is because we have replaced the soil and trees with construction work for roads, buildings, and airports. It is also because people have forgotten the importance of ***Niraganachi*** and stopped praying to them.

5.9　枯れるな水脈 ―――――――――――――― Water cycles for ever

この絵は、何度目かの心臓発作から回復して、わたしの中に流れるいのちの水脈と**にらがなち**、**とぅーがなち**、**てぃんがなち**が、この星の循環の中にある、ひとつながりのものだと改めて気づいたよろびのなかで描きました。

恐ろしい津波は、**しきゃなん**。ちかごろ混同される**なんぬり**は、高潮のことです。**しきゃなん**のおそれのときは、**うぶにばな**の上の**うらぶ岳**のふもとの**はいなぐ**まで避難します。地震の時は、**とぅしかとぅしか**と地震鎮めの言葉を唱え、各家庭では、**んにや　とぅしか　にがぃ**（地震の収まる願い）をしました。**なんぬはな　うがみ**（波の花拝み）も、海からの危険を察知する方法でもありました。

こんな大切な教えのすべては、たくさんの神々や生き物や食べ物の名前とともに**どぅなんむぬい**（与那国語）で伝えられてきたのです。小学校６年生の時、方言禁止令を強制しようとする担任教師とわたしは対決しました。校長のはからいで、琉球政府の教育委員会のおじさんが島にやってきて、わたしと丸一日話して、わたしだけは**どぅなんむぬい**を話し続けていいという許可をとりつけました。中学では、人は植物にいかに支えられてきたかを、標本を作って研究し、それは今も続いています。

稲に限らず、神様がしっかり眠ってくださらないと、わたしたちの暮しもうるおいません。神様たちの平安が必要なのです。いま島では、削岩機や大型の機械がどんどん持ち込まれて、岩は砕かれ、土は削られ、海もアスファルトやら何やらに埋められようとしています。わたしたちは、島のもっている「力」を越えるようなものを入れようとしています。このままでは、島は沈む。

どぅなんむぬいを大切にして、昔から、島の人たちが、恐れ、敬い、伝えてきた神様たちや精霊たちの声に耳を傾けて、それをちゃんと覚えて伝えていってほしい。これが、島の人たちみんなに、いまわたしがいちばん伝えたいことです。

島に火の弾が降り注ぐいくさのあった日々を語りついだ父母や祖父母。わたしはその平和への思いを、受け継ぎたいと願っています。火は、ありがたいものですが、敬いと祟りを忘れたら、すべてのいのちを飲み込んでしまいます。

枯れるな水脈 / 歌っておくれな水脈 / わたしとわたしの仲間に / 永遠無限のほほえみを / こしらえておくれな水脈 / にらがなちん　とぅーがなちん　てぃんがなちん / かなちぬまーぎり　んでぃたてぃわいひり / 石ころも砂粒も / 汝の歌に心地よく眠るのですから / たばらりひり　たばらりひり　たばらりひり

原題：枯れるな水脈　画くことは祈ること　　2022年7月、30x21cm、上質紙、色鉛筆

Water cycles for ever: I drew this just after my hospitalization following an acute heart attack. I am living on an end of the water system that is sustained by the sacred ground deities and all other lives. When the great water cycle of this planet stops, my heart will also stop immediately. Therefore, my shortest prayer is, “Forever be the water cycles!”

鑑賞の手引き ―――― *A Guide to the Art*

解説の末尾のKは渡久地健、Tは安渓貴子、Yは安渓遊地執筆。**太字**は与那国語。

1章扉A　草の露

説明に**どぅい ぬ ちゆ**（百合の露）とあることから、描かれているのがテッポウユリの葉先とそこから落ちる露であることがわかる。露の中に写っている少女は、**ちゆ**（露）とあだ名された幼いN子さんその人である。N子さんの作品には、南島の初夏に咲き乱れるテッポウユリの群生を描いた美しい線画もあり、ユリと恋に落ちた男の物語も語られている。Y

1章扉B　はちんかい

はちんかいは、N子さんが2歳の時、初めてお年寄りの集まるところに出向くことになった。糊を当てた布を簡単に縫って着せてもらったが、門を出る前にお守りがほしいと本人が言って、頭に魔除けの**つ'つぁ**や赤い糸を縛り付けてもらって、まるで闘牛に行く人のように決然と口を一文字にしている。Y

1章扉C　むぬんな

いろいろなことを話しすぎて、深刻な事態になることが多かったN子さん。13歳の時、何を聞いても、何を見ても、人前では話さないということを約束させられ、家では**むぬんな**と呼ばれるようになったという。自分を守るために「しゃべるな」という意味だが、本人には最も苦しい時代だった。無理やりに閉じられた口の代わりに、奔放に四方八方を目指す髪が、押さえつけられた反抗心を代弁しているようだ。Y

1.1　生まれる

N子さんの胎内記憶の絵の一つ。胎内で感じた、温かみや光や、そして聞こえてきた音や声が、色の花束のように描かれている。ここでは、最もわかりやすい「生まれる」を紹介する。明るくもあり、やや寒くもある世界から守ってくれていた母の子宮から産み落とされるいのち。紫がかった血の色のしたたりは、その後のN子さんの歩んだ苦難の道を暗示しているようだ。Y

1.1　付図　洞窟での出産

これは、帳面の見開きに鉛筆と青いボールペンで描かれた線画である。妊婦とその夫は黒の濃い線で、出産を見守る人びとは淡い青い線で描かれている。遠い日の出来事を、あたかも昨日のことのようにありありと再現している。絵は、真冬の寒中に描かれている。そのせいか、線描には線の硬さがあるが、じつはそれが尋常でない場面の緊張感を生み出している。K

1.2　お守り

幼いころのN子さんに、祖母がお守りを着け、お清めをしている場面を回想した絵。やさしい祖母と恐怖にゆがむ孫娘の表情は対照的である。そして二人の背後にある「影」も対照的である。幼子の背後の「影」は、背後からさまざまな **だなむぬ**（魔物）に襲われようとしている彼女自身を表わしているのに対して、祖母の背後を包むぬくもりは、それらの恐怖からの守りの力を示している。K

1.3　月光浴

月の光は、**うとぅんとぅがなち**と尊称され、特別な癒やしの力があるとされる。病弱だったN子さんは、旧暦の13、14、15、16日の4日間は必ず、海水に浸かって月光浴をさせられた。南の島も夜の海は寒い。泣き叫ぶN子さんが、喉の奥まで月光を浴びるようにと月を指差す祖父との日々は、季節を問わず続いた。Y

1.4　肥溜めから這い上る

なぜかN子さんは、よく肥溜めに落ちるのである。あたり一面に広がる臭気の中で、なんとか這い出したものの、冷たさとショックとで口もきけないN子さん。この絵は鮮烈であるものの、長く見続けていると、不思議と愛着を覚えるようになる。何十年も前の記憶は、たとえ一時的に忘れていても失われてしまうことはない。N子さんは「記憶たちが突然団体で帰ってくる」と表現しているが、深く遠い時間の流れの彼方に、ちょうど厚く積もった地層の中の「化石」のように、過去の出来事が埋もれている。それが、何かのはずみで突然現れる。Y、K

1.5　便所立てこもり

よその家のトイレに立てこもって、なにごとかを泣き叫び続ける子ども。赤い丸い口から刺々しい無数の苦悶する声が噴出している。一見男児に見えるが、これもN子さんである。足の色は青色。画中のテキストには肌の色も変わってまるでトカゲのようで怖かったという家族の声が書き込まれている。K

1.6　屋根の上で叫ぶ

幼いN子さんがいないと思ったら、いつのまにか人の家の屋根のてっぺんの**ちんぷる**と呼ばれる所に上って、そこにまたがって、何事か叫び始める。それがご近所にとっては、知られたくない家族だけの秘密だったりするので、N子さんの行動は、しばしば頭痛の種子になった。Y

1.7　怒り

絵は、他所の家の庭で涙を流して怒りながら素足で四股（しこ）を踏む6歳のN子さんをアニメ風に描いている。首から上はレモンイエロー、手と足は茶色、頭髪は虹色で総毛立っている。生まれた時にチアノーゼから紫色の赤ん坊だった彼女は、時々人間離れした肌の色になったという。四肢は人間というよりヤモリなどの人間以外の動物をイメージしてしまう。特に右の手足は、人体の解剖学的に見て不自然である。「それでも生きたい（4章5）」や「魚と話す（3章4）」などは、N子さんのデッサン力の確かさを証明しているから、これは意図した表現である。怒って四股を踏む子どもを写実的に描いたら、絵の意図が伝わらない、かえって不自然な絵になるであろう。N子さんの絵に時おり顔を出すアニメ風の絵は、N子さん独特のカリカチュアである。なお、6歳児の上部と前面（左）には、淡い鶯色と白緑（びゃくろく）のぼかしの技法が用いられている。K

1.8　月に祈る

与那国島では、毎朝毎夕の太陽への祈りの他に、月への祈りはごく大切にされた。N子さんは、祖母の祈りのときには、おとなしくしていることを身につけた。Y

1.9　涙の口噛み酒

幼年時代を回想して描いたN子さんの絵の中の少女（N子さん自身）は、漫画風に描かれていることが多いが、この絵では比較的写実的に描かれている。絵は、鉛筆（黒）と赤系（レンガ色、ピンク、朱）と黄緑の色鉛筆を用いて、時間をかけて丁寧に描写されている。少女の右目の周りにほどこされた黄緑色は――眉や目、口元の表情とともに――ほとんど一人で四日間も課された生米を噛んで口噛み酒を醸す仕事の辛さを表している。K

2章扉A　神聖な食用植物

野菜でも植物でも、採ってすぐに食べず、なつかしい畑や大地と別れて人間に食べられる運命を受け入れる気持ちになるまで、少なくとも半日は、小屋の中などに休んでいただく必要がある。その中に、とくにお清めやお祓いを必要とする神聖な植物があったことを、シンプルな線画で表現したもの。Y

2章扉B　ほうき

ソテツの葉など、ほうきの材料は、6種類以上あったというが、ここでは2種類だけを示す。Y

2章扉C　アダン紐の作り方

自然の素材を生かした道具作りの民俗を図示したシリーズの中から、アダンという植物の茎から丈夫な**あだぬち**という紐を作る方法が簡明に描かれている。Y

2.1　樹からの水

樹木に降った水を集めて使うぐらい、島の人びとは天からの恵みの天水を大切にしてきた。雨は葉に落ち、葉から小枝へ、小枝から大枝へ、そして幹に集まって流れ下って地面に降りていく。樹幹の下部に与那国ではさまざまな道具に多用されるくば（ビロウ）の葉をしばり付け、樹幹を下る雨水を集める。ビロウの葉柄の下に甕などの容器を置く。雨天でも空は青い。木の根元には、人間と天水の恵みを分かちながら「イイナァ」と喜ぶカタツムリが描き入れられている。この小さな生き物は、かつては食べ物でもあったが、N子さんが深く愛してやまない存在の一つでもあるのだ。K、Y

2.2　竹筒の水貯め

この絵に用いられている主要な色は、赤・緑・青・黄である。赤と緑、青と黄は、それぞれ補色（反対色）の関係にある。この絵では、補色の使用が際立っている。そのため、絵は色と色とが反響し合う独特の効果を生み出している。並べ置かれた6本の竹筒の上部には放射状に後光のような光が放たれ、青（空）と神々しく響き合っている。存在感のある絵である。竹筒の上部には、ビロウの葉で作った水汲みと、ビーカーのような形の容器を象った線描がある。K

2.3　海藻を干す

この絵は、不思議な絵に思える。主題の**なちら**（カイニンソウ、駆虫薬になる）が朧げに、平底の物干しカゴを取り囲む周りが明瞭に描かれている。そして、絵には二つの視線がある。物干しかごの傍らに立つN子さんがいて、まずかごのなかを覗き見る、見下ろす視線が一つ。もう一つは、吊るし紐を辿って視線を移動すると木の梢に行きつき、今度は見上げる視線に変わる。絵（タブロー）はあくまでも平面の二次元だが、生きられる空間は動的な三次元である。複数の視線は等身大の生活者の自然な眼差しなのだ。なお、絵の左上には小さい空が見えている。絵の中央の丸い白は目の粗い紙の地の色である。K

2.4　眠る稲

左ページ左側の鉛筆画は、N子さんが、**むとぅ‘かはまい**の修行をはじめてまもない、ようやく数字が5つまで数えられるようになった4歳ごろ。N子さんが

まず描き始めたのが、稲の種もみの絵だった。水につけて発芽をまつ間、何日目かを大きな石、小さな石で数えながら「このもみはまだ眠ってる」ということを示すために描いた絵の再現。左ページの右側の絵は、鉛筆で描いたものが、稲もみの形に切り取られている。男女の神が仲良く眠る米粒で、仲が良いほど虫などのじゃまが入らないという。この籾が水に漬けられると、やがて種もみの中に、根と芽が準備されてくると、苗代に撒くことができる。その時の種もみの中の様子をお年寄りが話す内容に沿って描いたもの。女神が根となり、男神は芽となる。その後、男神は女神のいる稲を離れてどこかへ旅立ち（右ページA）、B～Cのように、女神だけが眠る稲となる。Y

2.5　苗に歌う

食べ物の生産を中心として人と自然の関係の調整を司る、**むとぅ'かはまい**の候補として、幼い時からN子さんに託された仕事の一つ。黄色と青を主調とする絵。小さな苗代田の水面に映った空の色が美しい。苗代田の手前には、苗束が置かれてある。苗代田のほとりで幼い子が歌っている。子どもは色鉛筆で、ほかは透明感のあるアクリル水彩で塗られている。子どもは楽しく歌っているといった様子ではない。黄色の中にいる子ども。その子どもの周り（空中）には朱色と緑の線が無数に舞っている。長く長く続く、辛い、祈祷の歌声である。N子さんの描く絵によく見られるが、この絵でも右上に小さな空がある。K

2.6　赤ん坊を木に預ける

泣き止まない子どもの守りに疲れると、赤ん坊をゆりかごに入れて木に預ける。あるいは庭の土に預ける。多忙な島の暮らしの中で、島人が樹木や大地へ寄せる信頼。この絵は、樹木に対する島人の心性をも描いている。ゆりかごの中は描かれていないが、子どもが安らかに寝ているのだ。かごの中とは対照的に、木の葉はやさしく歌っている。この絵の鑑賞には「眼で聴く」ことが求められているといえよう。ポール・クローデル（1995『眼は聴く』みすず書房）は、視覚芸術である絵画の中にも、耳をそばだて音を聴きとる態度の必要性について、オランダ絵画を事例に指摘している。K

2.7　疲れを木に預ける

桑の実などのさまざまな野生の木の実を忙しく集めているN子さんは、疲れ果ててしまった。その時、体を木の幹にあずけて休むと、不思議に心身の疲れから回復できる。映画の一場面のような物語性のある絵。Y

2.8　ガジュマルの木

目の粗い画用紙に細いペンと色鉛筆で描かれた大樹。木は、その樹形と気根から判断して、ガジュマルである。絵は、黒と茶を主調とする抑えられた色彩で描かれ、葉は捨象されている。ほとんどデッサンといってもよいが、しっかりと大地に根を張った木の構えが、絵に存在感を与えている。K

2.9　木の精霊に出会う

絵の右下隅に「15-1」と記されている。「人は植物にいかに支えられてきたか」と題する、N子さんの2012年の展示会で用いた作品番号である。クレヨンで描かれた、紫と茶を主調色とする幻想的な一枚。**きでぃむぬ**（木の精霊、妖怪）がどこに描かれているのかは判読できない。技法的に見落とせないのが、茶色の木の幹に走る引っ掻いたような細い淡い線であり、それが樹木に躍動的な起伏を与えている。N子さんの森や木立、草むらを描いた絵はいずれも逸品であり、これは幼少のころからの島における植物利用の経験知や、学校時代にめばえた植物愛と植物をめぐる生物文化の研究という彼女のライフワークのたまものである。K

3章扉A　大こうもり

くぶやと呼ばれる大こうもり。N子さんのすべての下着にこのマークが付けられていたという。Y

3章扉B　ジュゴン

八重山のジュゴンは大正時代に絶滅したと言われるが、1964年ころまでは与那国島の沖で目撃されていたことがわかる貴重な資料。海の中の神様としてお年寄りは拝んだという。Y

3章扉C　カタツムリ

カタツムリは大切な食べ物。N子さんの母親が水を入れた鍋にカタツムリを入れて火にかけたところ、全部逃げ出して、いのち拾いしたカタツムリたちが「危なかったね」と声をかけあう情景を描いたほほえましい線画もあるが、割愛した。Y

3.1　卵を抱く鶏

雌鶏を見つめる少女の心象。芸術の本質は、見えるものをそのまま再現するのではなく、見えるようにすることにある（パウル・クレー、2016『造形思考（上巻）』ちくま学芸文庫、p.162）。そのことを強く感じさせる一枚。温められている卵は見えるはずがないのに、この絵では透けて見えている。鶏のいる藁か茅を敷いた

床の部分は、色鉛筆を塗った後に擦りつけて色を拡げる技法が採られている。小屋のほの温かい熱が広がっていく。鶏の前面の余白が生きている。K

3.2　水牛に乗る

むとぅ‘かはまいになるための大切なステップに、人間以外のものと会話ができることがある。ことに、天水に頼る与那国島では、田に水が貯まるようにしっかりと耕し、**にら**と呼ばれる耕盤をしっかり踏み固めるかどうかが収穫できるか否かを決する絶対条件だった。4歳ぐらいから、水牛の背に乗せられて、水牛が気持ちよく働いてくれるようにお願いするのが、N子さんの重要な役割となった。スケッチブックの2ページにわたって水牛の背中を描いたものの、貼り合わせようとするとバランスが悪いので、2枚の間に紙が補われている。補った紙の色がもとの紙とはずいぶん違うオレンジ色なのは、面白い。Y

3.3　魔除けの十字

絵の上部に軒先がわずかに描かれている。家畜小屋の軒下に赤い紐で吊るされた**あでぃま**（十字）からオレンジ色の神々しい光が放射状に出ている。現実には見えない呪力を、この絵は描いている。K

3.3　付図　家畜の居場所

魔除けの十字**あでぃま**がそれぞれの家畜の前に下げられていたことを示す線画。与那国の伝統的な物質循環の図と見ることができる。便所の右側は豚・山羊・馬の小屋があり、動物たちは日々の暮らしの中で食べて糞をする。それがやがて田畑に入れられ作物にとりこまれていく。そしてそれを人がいただく。むろん人も同じ循環のなかに入っている。人の便所の左は、肥溜め、魚の骨・貝がらの置き場、少し離れて胎盤を埋める場所がある。これらが、日々大切に手入れされている。豚小屋には魔除けの貝、山羊と馬には魔除けの**あでぃま**がかけてあり、毎日が祈りの中で生きていることが見て取れる。T、Y

3.4　魚と話す

一人の女性が海辺にたたずみ、魚に語りかけながら、海に向かって一生懸命に感謝の気持ちを歌っている。別の絵では、女性の後ろには空の袋が置かれている。まだ海の恵みは手に入れていない。魚や貝たちと会話し、採る前に礼を尽くすことが島に生きる作法として大切なのだ。同じ場面を、N子さんは何枚も描いている。いのちあるものに対する想いと礼儀をめぐる、これは重要なモチーフの一つである。少女は目を閉じ、魚は真剣な眼差しを少女に注いでいる。少女は鉛筆による線描であるが、魚は色鉛筆によって丁寧に着色されている。この対照性がいわく言い難い魅力を生んでいる。少女は一見ラフスケッチに見えるが、生きた線で表された静謐な顔立ちと、陰影をほどこされた身体のたたずまいが、厳粛さを与えている。繰り返さてきたモチーフゆえ、N子さんは「いまだ完成していません」と言うに違いない。その意味で、この絵は「芸術における未完成」（J. A. シュモル編、1971『芸術における未完成』岩崎美術社）という芸術創造にかかわる重要な論点をはらんでいる。Y、K

3.5　海亀の子の見送り

海亀の卵が孵化したら、子ガメたちが海に帰るのを見送るということを、N子さんの祖母は、毎年していた。子ガメたちが雲の浮かぶ空のような海に泳ぎだす様子がかわいい。Y

3.6　鳥が巣立つ

ほとんど黄緑一色で描かれた、具象と抽象のあわい、といった作品。雛と親鳥らしい輪郭から、この絵は鳥を描いた具象絵画である。一方、鱗のようなタッチが織りなす色のパターンは、鳥という具体的な形を離れても、それ自体がとても心地よく、その意味で抽象絵画ともいえるのだ。K

3.7　トンボ

島を訪れる**あぎだん**（トンボ）は特別のお客様。軒にトンボが止まるように**あぎだんぐさ**（クマツヅラ）を挿す。そこに止まろうかどうしようかと迷っているようす。羽のある虫には祖先の霊が乗ってくる。Y

3.8　猫がいない

N子さんにとって猫は、特別に親しい仲間だ。これは、ともに暮らした猫の「きたこ」の捜索願。愛猫が早く見つかってほしいと祈るような気持ちで、毛の一本一本をいつくしむように心を込めて細いペンで丁寧に描いている。K

3.8　付図　猫をやぶに寝かす

猫のほうむり方。小鳥の場合も図示されていたが割愛した。

3.9　仲間たち

さながら広げた布、タペストリーのような絵。蒔かれた種がいっせいに発芽した、縦長の畑のような所に、小鳥、愛猫、ひよこ、亀が遊んでいる。K

3.9　付図　動物たちと歩く

お年寄りたちは、字の読み書きを知らない人がほと

んどだったころ、N子さんは、いつもお年寄り同士の伝言を運ぶ役を仰せつかった。手紙には、要件が絵で描かれていて、その絵を、**かいだ**と呼んでいた。それを持ち歩いて届けるのが、幼いN子さんの役割になっていた。その伝言配達の光景を描いた線画には、彼女に付き従うようにともに歩く、鶏や山羊や猫の他に、歩くのが遅い亀やカタツムリのようなさまざまな動物たちの姿が、コミカルな線画で描かれている。Y

4章扉A　祖母の祈り

N子さんを教え導いた島の伝承者の似顔絵の中から。14年を同じ部屋で暮らし、いつもあらゆるものに祈っていた祖母の姿は、N子さんの日々の暮らしの基本となっている。Y

4章扉B　清め

祈りの前に、体にたまったよごれ・けがれを指先や毛の先から落として、大地の**にらがなち**にあずける。Y

4.1　祈りの浜

N子さんはこの「**しき浜**」の四季を繰り返し描いている。N子さんの原風景としての海辺の風景。たくさんの伝承と祈りの記憶の積み重なる浜を、色鉛筆で愛撫するように描いている。時間をかけて塗り重ねた色合いは幻想的である。島に生まれ育った者にとって、海辺は原風景を形づくる重要なトポスの一つ。サンゴ礁に砕ける波の遠鳴り、また渚を洗うリズミカルな音もなくてはならない音の風景（サウンドスケープ）であるにちがいない。N子さんは「ザバーンと打ち寄せるしぶきを見て育った」という。民俗学者の宮本常一も「私のふるさと」（1984『家郷の訓』岩波文庫に収録）で、周防大島の家に「ドサリドサリ」と砕ける波の音のことを書いている。K

4.1　付図　しき浜の地図

祖納の墓地のある**にんばら**（浦野）の前に広がる潮だまりが、絵地図のように表されている。潮だまりには、黒い生き物らしきものもいるが、黄緑や黄色、青、赤で彩られた熱帯魚が一匹ずつ描かれている。その多色の魚は「海辺の岩のむきだし」の茶、海の青が全体として淡いために、ひときわ鮮やかで、絵を見る者の目に飛び込んでくる。K

4.2　日の出に祈る

水平線に昇る**てぃだ**（太陽）を迎える祈りと、夕日を見送る、**いりてぃだんみうぐい**（入日見送り）を、お年寄りたちは毎日欠かさずにやっていた。水平線の上を真っ赤に染めた太陽が、一日の始まりを告げる。Y

4.3　月によびかける

晴れわたった空にかがやく大きな月とその光を浴びて立つ、右下の小さなHITO。N子さんがHITOと書く時、それはいのちあるものたちの末席にある新参者として、そっと仲間に入れていただくといった謙虚さが感じられる。少しかけた月はやさしげで、HITOはおもわず感謝の言葉を呼びかける。T

4.4　海辺の鎮魂

左側に小さい空がある。女性の「**がぁーり**（鎮魂の叫び）」の声は長く長く続き、その言葉の一つ一つが彼女の前の無数の色の斑点として表現されている。この絵を見る者は、長い祈りの声を聴くことになる。つまり、この絵は「眼で見るよりも耳で聴く絵画」なのだ（前出，P. クローデル『眼は聴く』、p. 8）。K

4.5　それでも生きたい

青灰色と墨の、わずか2色で描かれた、濃淡の使い分けが見事な作品（厳密にいえば、青と墨の2色以外に、余白にはごく薄い黄がほどこされている）。灰みを帯びた青は凍えるような寒さを、青と墨の混じった濁色はひもじさを助長している。まるで頭部は魚類、左手はトカゲの手に見える。髪は乱れ、流れるような身体の線はさながら水棲動物だ。画題に「凍えてひもじくてそれでも生きたい人」とあり、女性は目を見開き、前を向いている。この絵もN子さんの自画像であろう。K

4.6　春への感謝

人と樹木の関係、樹木信仰は洋の東西に共通するテーマである。この絵を見て、多くの人は反射的にオウィディウスの『転身物語』巻一の「月桂樹になったダプネ」で語られ、多くの画家や彫刻家が造形化した《アポロンとダプネ》を思い出すであろう。しかし、この絵をよく見れば、女性は木に変身するのではなく、木と重なっている（木の前に立っている）から、転身物語ではない。また、N子さんは大樹の幹に身をあずけて疲れを癒やす人（2章7など）をいくつか描いている。N子さんは木に対して全幅の信頼を置いている。川崎寿彦（1997『森のイングランド』平凡社ライブラリー、p. 365）の表現を借りれば「自然と調和し、豊かに交感できる人びと」を描いているといえる。K

4.7　井戸と天女

干ばつで人びとはあえいでいたそのときに、水の精ともいえる女性が、水が湧く泉のありかを教えてくれた。たおやかな天女を描くやさしい筆使いと、左下で目を見張る島びとの驚きの表現の対比に伝承の世界が

広がる。T

4.8　はらむ

この絵は、次の作品「**ぬ‘てぃぬかーら**」と同じ系列で構図もほとんど同じ。長い髪を持つ女性。髪の一部は舞い上がり樹木の枝と化し、うっそうと緑の葉をまとっていく。葉の緑の中には、緑の補色である赤(血色)が混じる。女性の両腕は、ピンク色で細く、腸管または血管のようにうねっている。女性の身体は丸みを帯び、目を閉じている、決して悲しい表情ではない。「**ぬ‘てぃぬかーら**」が臨月とすれば、こちらは、これから、たくさんのいのちたちを育む準備中の段階だ。K, Y

4.8　付図　むとぅ‘かはまいの墓

代々の**むとぅ‘かはまい**の墓と言われるものがあって、N子さんがのぞいてみた時には、4体分ほどの人骨があったという。Y

4.9　ぬ‘てぃぬかーら

これは、ヨーロッパ19世紀末芸術＝アールヌーヴォーを思わせる曲線の美しい絵で、与那国島に伝承された生命観を表現したマスターピースである。この絵もある種の「樹木神話」を表しているかも知れない。女性は大樹に腰を当てているようにも、逆に女性の長い髪の毛が樹木に化したとも見える。髪の毛は、樹幹と樹枝と一体化し、樹の根となって大地に根をおろしている。さて、この女性像は何を表しているのだろうか。女性の顔の前面の木の枝には蛹または子宮さながらの形象が見え、この小さな袋の中に宿る双子は、稲の種もみの中で育つ芽と根である（2章4B)。女神は臨月で、その体には多様な生物が誕生を待っている。この絵は「動物は、いのちあるものを摂取してしか生きられない」生命系をめぐる世界観を表象している。その証拠には、中央部の2匹の猫の上に、かまどにかけられた釜が、赤い線で描かれている。これらの生き物たちのすべては、**ぬてぃちでぃむぬ**、命つなぎのもの、すなわち人間の食物でもあるのだ。それとともに、画家自身を描いた絵、島の生きとし生けるものとともに生きてきた半生を回想しながら描いた自画像でもある。彼女は涙を流しているが、これは「よろこびの涙」「祈りの涙」である。K, Y

5章扉A　石盥

フクギの木で囲まれた屋敷の一角にどっしりと置かれた**いちたらい**（石盥）の絵。石盥には砂岩や琉球石灰岩が使用されたことがわかる。与那国島は、八重山層群の砂岩でできた山地・丘陵地のある高い島であるが、島の北側にはサンゴ礁起源の琉球層群の琉球石灰岩の台地が広がっている。砂岩の地層には節理と呼ばれる割れ目が生じ、ブロック状の石材が得やすい。琉球石灰岩は、琉球で最もポピュラーな石材である。島の石材で作られた、水を大事に使ってきた先人たちの生活の知恵ともいうべき石盥は、道路の拡張工事などによって失われていったという。K

5章扉B　共同井戸

鉛筆で描かれた村の共同井戸。石の井桁が、擦り減ってくぼんでいるのが印象に残る。Y

5章扉C　雨乞い

雨が降らなければ、島の生活は枯れてしまう。その時、雨乞いをするのだが、祈りも4日目ぐらいになれば、祈る役割の女性はほとんどそうであるが、心身ともに消耗していまにも倒れそうだ。Y

5.1　魔除けの石

沖縄県下で、石敢当（いしがんとう）と呼ばれる石が、道路の突き当りなどに立ててある。与那国島でもみかけるが、もともとは**‘とぅはんしいちぶぐ**つまり「人はずし石」と呼んでいた。N子さんには、そうした魔物とされるものたちの姿を、具象と抽象のあいだの見事な表現であらわした怖いような作品がたくさんある。そうしたものが見えない私たちにもわかりやすい場を描いたものとして、この一枚を選んだ。Y

5.2　にらがなちとその成長

「**にらがなち**」はN子さんの最も重要なモチーフの一つであり、絵に描き、論考にしたため、枠織りで表現し、そして刺繍にまで縫い上げたのだ。ここに掲載した4枚は、刺繍をほどこされた乳白色のツイル生地の服の部分写真である。糸の色数は、緑系（鶸色、柳木葉、若草色、萌葱）、紫（紫、薄紫）、青系（空色、浅黄、熨斗目色、パステルブルー）、茶系（栗色、枯草）、桃色、朱など、十数色に及んでいる。刺繍は、「平縫」や厚みを持たせた「肉入」でもなく、点描風で糸がモクモク盛り上がった箇所はダイナミックである。

Aは、大地の底に躍動する**にらがなち**を表現している。地底の様子ではあるが、見るものには、中央は大樹が踊り、その上に鳥らしきものが止まり、右下には緑色のヘビ、さらにカタツムリやトンボのような小動物の姿も見えるような気がする。くねくねと立ちのぼる青系と緑系（鶸色）の線は、いのちを支える水の循環そのもののようだ。Bには、桃色や水色やパステル

ブルーの花弁が見える。C は、円ないし多角形の模様が美しく、大地さながらだ。そこには花やヘビなどの動植物が見える。D は網の目のようなパターンで、上部中央と右上の丸いマウンド状のふくらみが目を惹く。二つのマウンドの間を赤い細長い生き物が通っている。HITO かそれともヘビか？

見あきることのない、この刺繍絵は、糸で歌い上げたあらゆる「いのち」を潤し育む水脈とその成長への讃歌であることには相違ないだろう。なお、色名は『日本伝統色――色名辞典』『改訂版色名小辞典』（いずれも日本色研究事業、1984 ／ 1988）を参照した。K、Y

5.3　海の底のにらがなち

この絵は、5 章 9「枯れるな水脈」と同じ系列の作品で、絵のサイズをはるかに越えて、見る人にスケールの大きさ、壮大さを感じさせる。補色の関係にある青とオレンジを主調色として（寒色が画面の下部を、暖色が上部を占める）、この 2 色に緑色や紫色が加わり、全体としてうねるような曲線が画面をおおっているが、右上から左下に一条の閃光が走り、画面を引き締めている。画面上部には淡色の帯があり、これは高い地平線の上にわずかに見える空なのだろうか。下部に見え隠れする「海底のニラガナチの存在」という文字は、青色のクレヨンでおおわれ、そのクレヨンは黒の台紙の上にも及んでいる。これは、いったんは完成して台紙に貼られた絵に再び筆が入れられたことを意味している。青の加筆によって絵は深みを増した。絵裏には、「若いニラ」の成長と書かれているが、**にら**は、こうして、育ち広がっていくのだ。K

5.4　神々の出会い

画中のテキストにあるように、海に入る「**にらがなち**」のイメージ。緑を帯びた青が美しい。K

5.5　魔物たちの出会い

人が恐れる魔物とされた、目には見えないものたちが、**にらがなち**とともに海に流れ出して、そこで出会って、美しい花のように輝きながら、出会いを喜んでぐるぐる回っている。これから天に昇って浄化される前の、そんなわくわくに、出会ってみたい。T

5.6　慈雨

たっぷり降る雨は、地面にしみ込んで**にらがなち**の住まう地底を潤す。墨に浸した筆を振るように和紙に描かれた絵からは、雨音までも響いてくるようだ。Y

5.7　台風の予感

薄藍だけで描かれた縦長の絵。螺旋状に上層に伸びるのは巨大な積乱雲の渦、台風の雲である。絵の右下に「秋大台風が来るよ」と記されている。この絵の描かれた年の台風について、ウェブサイト「デジタル台風」などで調べてみた。彼女の予想に違わず 9 月 9 日に発生した台風 18 号は、列島を縦断し各地に記録的な大雨をもたらし、全国で合わせて 5 人の死者を出した。しかし、絵はけっして暗くはなく、むしろ透明感にあふれて美しい。「雀がいないと私はこまる」と歌う N 子さんにとっては、台風も自然の摂理であり、当然「台風が来ないと私はこまる」のだ。K

5.8　水脈

太い丸筆を用いて一気呵成に描かれたと思われる、ほとばしる清澄な水色が目を惹く一枚。書のような味わいがある。もしや、この中に無数の「水」という文字が隠されているのかも知れない。K

5.9　枯れるな水脈

スケールの大きい傑出した一枚である。画の右下、木の葉の上に「枯れるな水脈」と記されている。水脈が枯れることはあらゆるいのちの終焉を意味する。また、「画くことは祈ること」とも記されている。枯れるな水脈、生命のみなもと、とこしえなれ、と祈っている。水色を主調としながらも、黄緑・黄・オレンジ・ピンク・赤・茶の色鉛筆の線画が、画家ゴッホの「星月夜」のように、渦巻いている。渦巻きの中に、数個から十個ほどの赤・オレンジ・青のつぶつぶが 3 か所に抱かれている。絵にはフレームがほどこされている。すなわち絵の下に土色（大地）、右に種子から発芽したばかりの黄緑の植物たち、左と上に青（空）が縁どっている。この絵は、この星の、いのち育む水の大循環を表象している。それとともに、躍動する水脈の小さな渦の中の赤いハートで表された画家自身も描かれている。何度も止まりかけた心臓の発作からよみがえり、耳も目も働きを止めた中で、水脈の別の端の赤い点で示された主治医の女医の匂いによって、まだ生かされていることに気づいたよろこびの情景なのである。大きく言えば、大気と水とが循環しながら、熱的な平衡状態を保ってきた地球環境。その中で、心臓が鼓動するせいぜい数十年という瞬間を生きている自分の肉体。この絵は、食べたり食べられたりしながら、ともにこの奇跡の星で「いのち」をつないでいくあらゆる生き物たちが織りなす生命系の宇宙への讃歌でもあるのだ。K、Y

渡久地　2022年の11月末に、安渓先生の家を山口市に訪ねて、4日かけて、数百枚のN子さんの絵の実物を見せていただいたんです。それらは驚くほど多様で、N子さんは「一個の多面体」だなと思いました。これまで歩んでこられた人生と無縁でなくて、非常に特異な芸術です。子どもの頃を回想した絵はアニメ風なのに、樹木やススキの絵は濃密で存在感があり、ストイックなまでに限られた色数とすぐれた構図で、古典的な絵画が持つ確かな存在感を獲得することに成功しています。

安渓貴子　美術としての値打ちまではわからないままに、N子さんからは、たくさんの絵や絵入りの文章をお預かりしてきました。例えば、この本の表紙になっている絵なんかは、人であるなしを越えて、すべての生き物が共存することの大切さや、樹木の恵みといったN子さんの感覚がよく表されていると思いました。

渡久地　そう。表紙に選ばせてもらった《**ぬ‘てぃぬかーら**》の絵は哲学的です。文章では表現しきれない与那国島の世界観をいかに表現するかで苦闘してきたに違いないN子さんが、苦悩や悲しみを突き抜けて、晴れやかさに到達した、希望が見える作品。今のところの代表作のひとつだと思います。

N子　あの絵は、私としてはまだ未完成なんですよ。

安渓遊地　いつ頃から絵を描いているんですか？

N子　ものごころついたころ。両親は、壁と柱とふすま以外だったら、どこに描いてもいいよと言ってくれてた。よく許してくれたと思う。

安渓貴子　遊びで描いてたの？

N子　遊びだけど、仕事でもあったの。私が数を5つまで数えられて、石を並べて日数が記憶できるようになった時――たぶん4歳ぐらい――から自分の家と近所の農家の何軒もの種もみが根を出し発芽し始めるまでの面倒をまかせられていたの。「この米はまだ寝てる」とか、「そろそろ起きてきたから苗代に蒔いていいよ」とかを、袋ごとに区別して絵に描いてた。幼い私を、食べ物がちゃんと手に入るようにみんなのお世話をする役割の**むとぅ‘かはまい**に育てようという島のお年寄りたちの特訓を受けて暮らす中に、絵を描くことも自然に入ってたのかもしれない。

渡久地　10年前の北海道移住後の絵は新しい境地だし、色彩も豊かで、最近増えてきた抽象表現も面白い。技法的にも画材の面でもいろんなチャレンジをしておられますよね。

N子　アクリル絵の具なんかは、使いはじめてまだ20年にならないけれど、体があちこち痛かったりするから、楽に描けるものを探しているという面もあります。

渡久地　N子さんの《木下ウスマイ一族の木》《哀しむ人を見守るキディムヌ》なんかは、フランスのバルビゾン派のテオドール・ルソー（1812-1867）に見せたいくらいです。今回は選ぶのにとても困りましたけれど、後世にのこる名画がたくさんあると思っています。

N子　難しいことはさっぱりわからないけれど、私にとって、絵を描くことは、息をしたり、歌ったり、踊ったり、太鼓を叩いたりすることと同じで、毎日の暮らし、日々の祈りそのものなんです。それをこうして本にしてもらえるのは、うれしいことです。

安渓遊地　欲ではありますが、あなたの口頭伝承の画文集も、出したいですね。**ふがらさぁ**（ありがとうございます）。

和歌嵐香Ｎ子（わからんこ・えぬこ）

1954年、与那国島に生まれる。病弱だったため祖父の懐に入れられて育つ。作物や家畜の世話を担う中で、４歳ごろから絵を書き始めた。高齢者からの伝承を聞きながら大きくなり、小学校では方言使用が禁止されることに抵抗して与那国語を使い続けた。中学生以来のライフワークは、「人はいかに植物に支えられてきたか」の研究。石垣島の高校を経て、成人後は那覇・四国・京都・佐賀などを遍歴。やがて島にもどり、自然素材を生かした染織の工房を設立。高齢者から教えられた、昔ながらの島の暮らしの知恵を文章や絵で表現。2011年に、北海道に移住し、現在に至る。身の回りのすべてのものにやどる「いのち」に向き合い、心をこめて平和を願う祈りを捧げる日々の中から、さまざまなアートを生み出し続けている。

筆者の絵筆　Author's paintbrushes

安渓 遊地（あんけい ゆうじ）http://ankei.jp

1951年富山県生まれ。人類学・地域学専攻。山口県立大学名誉教授。京大理博。主な著作に、宮本常一・安渓遊地 2008『調査されるという迷惑』みずのわ出版、安渓貴子・安渓遊地 2011「与那国島のものの見方・考え方」『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社、安渓遊地・安渓貴子 2011「530年前の済州島からの漂流民の記憶」『うたいつぐ記憶』ボーダーインク、など。

安渓 貴子（あんけい・たかこ）

愛知県生まれ。生態学・民族生態学専攻。山口県立大学非常勤講師。理学博士。主な著作に、安渓貴子 2009『森の人との対話――熱帯アフリカ・ソンゴーラ人の暮らしの植物誌』アジア・アフリカ言語文化叢書 47: 1-614、東京外語大 AA 研、安渓貴子・当山昌直編著 2015『ソテツをみなおす――奄美・沖縄の蘇鉄文化誌』ボーダーインク、安渓貴子 2022「コンゴ民主共和国ソンゴーラ人の料理 ――域内自給による食の多様性と持続可能性」『農耕の技術と文化』31: 47-71 など。

渡久地 健（とぐち・けん）

1953 年沖縄県本部町生まれ。地理学専攻。琉球大学非常勤講師。学術修士（筑波大学）。主な著作に、渡久地健 2003「植物景観画としての《奄美の杜》――田中一村絵画の地理学的考察」『沖縄文化』第 96 号、渡久地健 2012「殷元良《粟鶉図》覚書」『地理歴史人類学論集』3: 53-60、渡久地健 2015「南島歌謡に謡われたサンゴ礁の地形と海洋生物」『人間科学』32: 137-160 など。

Wakaranko, Nko (author)

She was born in Yonaguni Island, Ryukyu Arc, in 1954. At the age of two-and-a-half years, she began drawing as part of her job of taking care of germinating rice grains. She grew up listening to oral traditions from the elders and continued to use the Yonaguni language in elementary school, resisting the ban of her language as a dialect. Her life's work since junior high school has included research on human-plant relationships. As an adult, she lived in Naha, Shikoku, Kyoto, and Saga. She eventually returned to the island and established a dyeing and weaving studio, making use of natural materials from the island. In 2011, she moved to Hokkaido, where she lives to this day. She continues to create a variety of artwork from her daily prayers for peace for all lives.

EDITORS

Ankei, Yuji (http://ankei.jp)

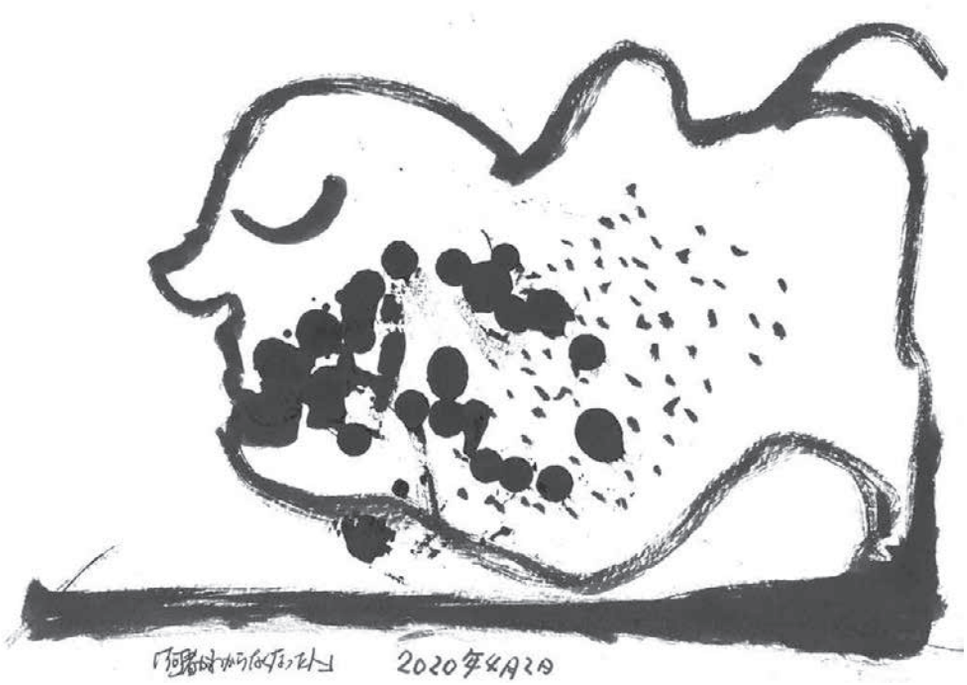
He was born in the Toyama Prefecture in 1951. He majored in Anthropology and Area Studies and is a Doctor of Science (Kyoto University). He is currently a Professor Emeritus at the Yamaguchi Prefectural University.

Ankei, Takako

She was born in the Aichi Prefecture. She majored in ecology and ethno-ecology and is a Doctor of Science. She is currently a part-time lecturer at the Yamaguchi Prefectural University.

Toguchi, Ken

He was born in Motobu-cho, Okinawa, in 1953. He majored in geography and is a Master of Science (University of Tsukuba). He is currently a part-time lecturer at the University of the Ryukyus.



著者自画像「何者かわからなくなった人」
A self portrait of the author, entitled "A person wondering 'Who am I ?' "

著者の体調のため、本書の内容についてのご連絡はすべて以下のメールあてにお願いします。a@ankei.jp
Due to the author's condition, all correspondence regarding the content should be addressed to a@ankei.jp

同じ著者による与那国語 4000 語・画像・祈りの動画
Visit a database of 4000-word vocabulary, drawings, and movies of prayers and songs in Yonaguni language.

【与那国島生物文化データベース】
URL https://dunanmunui.wixsite.com/my-site

RIHN LINKAGE Artbook 02

ぬ‘てぃぬかーら どぅなん いのち湧く島・与那国
Nu‘tinu Kaara Dunan, The Source of Lives: Yonaguni Island in the Ryukyu Arc

2023 年 3 月 15 日　発行

著　　者　和歌嵐香 N子（わからんこ・えぬこ）
編　　者　安渓遊地、安渓貴子、渡久地健

発　行　所　大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所（LINKAGE プロジェクト）
〒 603-8047 京都市北区上賀茂本山 457 番地 4
Tel. 075-707-2100

印刷・製本　東京カラー印刷
装丁・DTP　福田美智子（オフィス カモテトップス）

Author: WAKARANKO Nko
Editors: ANKEI Yuji, ANKEI Takako, and TOGUCHI Ken
Publisher: Research Institute for Humanity and Nature (RIHN) (LINKAGE Project)
457-4 Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto, 603-8047 JAPAN
Cover & DTP: FUKUDA Michiko (Office Kamote Tops)
ISBN 978-4-910834-19-1　Printed in Japan

© WAKARANKO Nko, 2023

Vast is our ocean, and we must open our minds wider: A message from the author

In this book, I express my memories of life on ***Dunan Chima*** (Yonaguni Island of the Ryukyu Arc, near Taiwan), through my drawings and writings. It aims to be of some help to revive ***Dunanmunui*** (the Yonaguni language), which is in danger of disappearing. It also seeks to restore dignity to the indigenous culture of the Ryukyu Islands and ensure the peaceful coexistence and continuity of the family of life on this miracle planet. It is a declaration of peace through respect for biodiversity and cultural diversity.

On Yonaguni Island, we have spoken ***Dunanmunui***, the UNESCO-designated language. We have respected all living things and invisible spirits on the island. We have thanked and prayed to the plants and animals, our life-givers that provide food. Throughout our long history, islanders have wisely responded to natural disasters such as droughts, long rains, tidal waves, tsunamis, and other crises in the water cycle by using our traditional environmental knowledge. For us, the earth, sea, and heaven are sacred. In our traditional cosmology, the holy ground, ocean, and heaven work together to purify the dirt and pollution made by us humans. Surprisingly, this is consistent with the latest scientific studies showing that the circulation of water in the atmosphere reduces entropy while keeping the earth in a steady state, I hear.

Today, the global environment and food security are at stake. How can we, the islanders, survive in peace? Here I introduce a translation of my poem entitled "Islands Free of War."

That day, fish was cooked in the pot. Suddenly, everyone began to flee from the air raid. Grandma ran with the pot and lamp. Grandpa ran with Grandma's pillow. Father ran with the reins of his horse. Mother ran with her baby crying on her back. The cat also ran. Even the chickens ran. When the bombs fell on our southern island, everyone ran and ran and ran. After the war, the elderly continued to talk of war-free islands. Those elderly who spoke of peace all passed away. "Are other bombs going to fall on our island again?" asks Mother. And yet, I love my country, made up of so many beautiful islands. Vast is our ocean, and we must open our minds wider. We will coexist with people who may be different from us. My generation did not experience war. And yet, I continue to travel with the cry, "No bombs, no war."

March 2023, WAKARANKO Nko

ISBN 978-4-910834-19-1

だめだよ

あたしの にわとりに
さわらんで
こんどさわったら
ゆるさんからね
あたしの にわとりは
しんけんなんだから
だいてるのだって
あたしには うめないのよ
あたしの にわとりに
さわらないで
コッコッコッ コッ コオッ
にわとり にわとり
あこらないで
もうだいじょうぶだから
にわとり が いう
ものわかりん人だ と

RIHN LINKAGE Artbook 02

***Nu'tinu Kaara Dunan*, The Source of Lives: Yonaguni Island in the Ryukyu Arc**

LINKAGE Project, The Research Institute for Humanity and Nature (Japan)
総合地球環境学研究所 LINKAGE プロジェクト